



始



特 101
945



其面影

二葉亭作

名家傑作集



第三編

5. 3. 28

内交

解題

明治時代のわが文藝史をして永く其の光彩を保たしむるに足る藝術家の数は決して少なくないが、而もそれら多くの藝術家中にありて、真によく先驅者の稱に値する人は僅に三四を以て數ふるに過ぎない。本書の作者故二葉亭四迷（本名長谷川辰之助）は、實にその數少なき先驅者中の最も偉大なる一人であつた。混沌たる明治文壇の初期に於て夙くもかの『浮雲』の一篇を公けにして深刻なる心理描寫の範を示し、後年の所謂人生派の大道を指示したものは彼であつた。衆に先んじてわが文壇に露西亞文學の精髓を傳へ、且その譯筆よく後年に於ける外國文學翻譯の範を示したのも彼であつた。

本篇は『浮雲』發表後二十年に近き沈黙を破つて、新たに興記せる文壇の現實主義的傾向の分野に彼が投げ與へた最も有力なる聲援の如き觀あつた作品で同時に作家としての彼の最高頂を示す代表作である。内容の豊富、技巧の圓熟、正に之れ明治時代文學の精華として、永く後代に傳へて我等當代人の誇とすべきを信ずる。

大正五年三月

編者識

其
面
影

弱々とした秋の日は早や沈んで、夕榮ばかり赤々と西の空を染めた或夕ぐれ、九段坂を漫々登つて行く洋服出立の二人連がある。一人は細長く、一人は横太りの、反対は格構ばかりでなく、細長いのは薄汚れた霜降の香廣の、洋袴の膝も疾に摺切れて毛が無いのに、黒とは名のみで、日向へは些と憚りある鍰廣の帽子で、是ばかりは不釣合な金縁眼鏡を掛た、面長で頬の削けた、眉の濃い割に髭の薄い、何處となく貧相な、一見して老書生といふ風采の男で、何やら痛か詰込んだ、手摺れて垢光のする、揉皮のポートルフォリオを小腋に抱へてゐたが、横太りの方は薄い眉にきよろりとした眼、鼻も口も一つに寄つたやうな、逼迫しい面貌の、品格のない男、其代り服装は凝つたもので、何か新柄の華美な香廣の胴衣の胸には金鎖が燦然と光つて、中山の帽子から赤皮の編上靴に至る迄、身に着いたもの何一つ新調ならぬはない。是は寒竹やら何やら細い洒落たステツキを杖てゐる。

熟々視ると、其細長い方は、毎も秋になると、此服装で此ポートルフォリオを抱へて、毎日午前八時ごろ、神田の某私立大學の赤煉瓦の門を、俯向加減に蹣跚と這入つて行く彼人で、聞けば其處の講師で、講義録の編輯主任で、校友會の幹事の一人で、常も經濟原論と、貨幣學の講義を擔任する小野哲也といふ、七八年前に二十八で大學を出たといふから、今年は則ち三十五か六の中古の法學士。生徒の噂に依ると、此人の講義は乾燥無味で欠を誘ふ代り、義理明晰で曖昧な處がないと云ふ。尤も點が辛いので、餘り人望はない。

今一人の横太りの紳士は、日本橋の某俱樂部の階下のビリヤード室で能く玉を突いてゐる、某會社の葉村幸三郎として、先年其社の社長が歐米の視察に行つた時、隨行して一巡して來た以來、明ても暮ても倫敦がバリがと大に歐洲通を振舞はす所から、影ではガイドと譚名せられる人。是は高商出身であるけれど、哲也とは同郷で、中學迄は同窓の好もある。尤も年齢は一つ二つ弟らしい。

無言で坂を上り切つて、靖國神社の舊馬場内へ這入ると、葉村は喫半の葉巻の灰を敲落して、『ぢや、今の一件は到底駄目だね？』

『さやう……駄目といふ事もないがね……』と哲也は煮切らぬことをいふ。

『だつて、小夜さんは君次第だらう？その肝腎の君が第一に不承知を言ふやうぢや、到底も纏

リツコはないさ。』

『いや、僕は何も不承知を言ふのぢやないがね、しかし……』

『どうも意外だ。此話をしたら君は非常に喜ぶだらうと思つてたら……どうも意外だ。』

『だから僕は何も不承知を言やせんよ。』

『不承知を言はんものなら、然う澁るのが可怪いぢやないか。僕には如何も君の心持が分らん。奉公とはいひ條、家庭教師なら何處へ行つたつて客分扱ひだ。好いかい、先生で威張つて通れるンだよ。誰に聞かれたつて、些とも恥かしい事はないぢやないか？何處が不好ンだらう？』

『だから其に言分はないがね……』

『ぢや、何に言分が有るンだ？』ト詰責るやうに言ふ。

二

哲也は稍澁り氣味で、

『だつて、あの澁谷といふ人の家庭は、噂に依ると、随分……ソノ……亂れてるといふぢやないか？』

と言切つて竊と相手の面を覗ふと、葉村は極めて平氣な體で、

其面影

『さう、そりや何せ腕一本で彼處まで仕上げて來た程の遣手なもの、素行は修まらんさ。それが如何したンだ？』

『さうして彼人は……ソノ……小間使に能く手を着けちや、手切を取られるといふぢやないか？』

『ふ、ふ』と葉村は鼻で笑つて、『分つた、君は其様な事を心配してゐるンだな。さうか、それぢや僕は勸めん。そりや小夜さんは彼通り Tres charnante (ト異う鼻がつつて)だし、先様は女に掛けちや目が無いとお出でなさるから、永い間にや老父何を行らかすかも知れん。そりや僕は受合はんよ。』

『いや、其様な事を、僕は、何も……』

『しかしだ』と相手の言ふ事は能くも聽かず、『君も餘程變挺來な男だな。其様な事に恟々しながら、其であつて實業界で一花咲かす氣か。へ、へ、それよか、悪い事は言はれえ、大人しく一生教師でお目出度なつた方が好からうぜ。』

『何故？』

『何故ツて、君は何だらう、餘り見ともない事もせず、體好く一つ成功して見やうツていふ氣なんだらう？』

其面影

「必ずしも然ういふ考へではないが、併し親も兄弟も棄て了つて、自分獨り成功しやうとも思はんれ。」

「だから、體好く成功しやうと希望してゐるんぢやないか？成功もしたいが、人情も離れたくないと、其様な中途半端な……」と扱卸すやうに言て、弗ッ尻を切つて了ふ。

「ぢや、君は人情を棄てなきや、事業に成功せんといふのかね？」

「無論だ、普通の人間なら、無論然うだ。それとも君は豪傑だつたかい？」

哲也は苦笑して、「其は僕にも分らんがね、併し君の考へも随分極端のやうだね。」

「極端でなくツて、目的が達せられますか？中途半端で何が出来ますか？」

「然う、それは然うかも知れんが……」

「だからさ」と圖に乗つて、「苟も金が儲けてえんなら（と時々此様な野卑な言葉を使ふ、それが此人の癖で）、好いかい、苟も金が儲けてえんなら、人情なんぞ未練氣なく洒然と棄て了ふんだ」と聲高に此處まで言つて、急に聲を落として、「と、まづ、腹を極めといてさ、それから其腹を見透されねえやうに、一旦棄てた人情を又拾上げて、人情の面ツていふ奴を被るんです。尤も之を被り切ぢや不好え、臨機應變時の宜しきに從つて、チヨイ〜此奴を脱ぐ。其處がツレ加減物でね、學者にや一寸お曉の行きかされる所だ。」

と馬鹿らしい程得意である。

三

哲也は唯黙つて點頭くのみで、感服してゐるのか、但しは空然と耳を假してゐるのか、何方だか、曖昧であつたが、調子付いた葉村は其様な事に頓着はない。

「好いかね？」と益氣負ひ立つて、「金儲けの秘訣は先づ人情を棄てるに在りさ、而して其次に理想ツ氣を棄て了ふのです。君の様に然う何日迄も理想ツ氣が膠着てるやうぢや、金は儲からん。未練氣なく其奴を棄ツちやつて、何でも利己一點張りにならなくツちや、駄目だ。」

「といふのが矢張り一種の理想ぢやないか？」

「おい〜、お頼ん申しますすぜ。僕の言ふ事を理想と聞くやうぢや、君も餘程焼が廻つてる。僕は事實を言つてるんです。へえ、是は事實でございます。憚ながら活動してゐる人間だ。理想なんぞと、其様な骨董品めいたものを玩弄する暇はねえ！」と何やら大氣焔で、「君は其様な事いふけど、まあ考へて見給へ、理想は何だ？古本の精ぢやないか……おツとツと、何も然う驚く事はない、其に違ひないさ、あく、理想は古本の精さ。其様な古本の精なんぞに取憑れて、目を明いて始終夢を見てるもんだから、君は、お氣の毒ながら、最う死んでますよ。」

理想は生ながら人を殺すから、何が恐ろしいと云つて、是程恐ろしい者は世の中にない。活きた仕事を仕やうといふ人間が、然う死んでちや駄目だ。早く其理想ツ氣を棄ツ了ひ給へ、あゝ、悪い事は言はないから、早く棄ツ了ひ給へ。』

『成程。』

『成程ぢやないよ。第一君は慾氣が薄いや。然う慾氣が薄くツて何が出来るもんか。一體慾といふものは、君、何だと思ふ？ 慾といふものはね、好いかい、慾といふものはね、人間を蒸餾して取つたエキスだよ。だから慾の中には人間の旨味がチャンと籠つてる、古本の精なんぞとは質が違ふ。ね、此奴が身體中に充實すると、人間に五分の隙もなくなる——あゝ、恐ろしいもんさ。古本の精に取憑れた奴は、熱心になりや、狂氣になるしき、ならなきあ、隠居のやうな役に立たねえ人間が出来上ツ了つて始末に負へれえけど、人間のエキスの慾の充實した奴は、活氣があつて人間が活きてるから、社會へ出て生活の條件に密着従つて、早く成功する。理想だ、主義だと、其様な物に膠着くやうな人間は、融通が利かんから、働けません。君も、然う言ちや何だが、どうも些と……ソノ……働けません組の系統を引いてるやうだぜ。』

『さう。』

『例へば、今日の話にしてもさ、僕が君なら、理想だの、人情だのと、其様な粘氣は些とも無

其 面 影

いから、おい来たと奇麗に小夜さんを遣つ了ひます。えゝ、遣らんで如何するもんか！ 君は小夜さんが老父に口説かれやすまいかツて、心配するけど……』

『僕は何も其様な事を心配して居はせんよ。』

『まあさ……口説かれて小夜さんが諾と云つたら、尙ほ妙だ。然うしたら、今の夫人は肺で最う危ないんだから、逝つ了つたら否應なしに其後釜に据ゑツ了ふ。貧乏學士の妹から一躍して澁谷令夫人！ 小夜さんだつて、此奴あ満更でもあるめえぜ。』

『其様な事は、まあ、如何でも好いがね』と此方は蒼蠅さうで、『只彼女は然ういふ華奢な家庭にや不向の方だから、承知するか如何かと其處を掛念に思ふんだが……ぢや、まあ、歸つて一應當人の意嚮を確めた上での事にせう。』

『確めて否だと云たら、止す氣かい？』

『さう……』と考へる。

『困るねえ、君は、それだから……』

『宜しい！ では、僕が説得して成るべく遣る事にしやう。』

『さうだ、さう來なくツちや不好だ。ナニ女の事たもの、君の口先一つで如何にでもなる。』

『さう。』

其 面 影

『何も是れが當人の不爲になる事ぢやなしれ。』

『さう。』

『まあ、君も確り行つて、早く教師なんぞの足を洗ッ了ふさ。』

『さう……ぢや、是で失敬せう。』

『何だ、僕の家へ来るのかと思つたら……』

四

葉村に別れた哲也の姿は、今蹠踵と九段坂を降りて行く。

直眼下の町々には、軒燈やら電燈やらが星屑のやうに散らばつて、駿河臺は清澈つた空を背景に、夕闇の中に深沈と沈んで見え、看慣れて居ても流石に棄難い眺めであるを、哲也は一向に顧眄もせず、深き想ひの籠つた目を俯せて、凝然と地面を視詰めた儘で、蹠踵と降りて行く。不幸なる小夜子の身の振方、其には日頃少からず頭を悩ましてゐる所であれば、葉村の話は寧ろ耳寄の話で有やうなものゝ、又思ふと、狒々よ色情狂よと世に疎ましい噂のある澁谷なんどの邸へは、假令や家庭教師にもせよ、如何も遣りともない氣がする。況して小夜子は女の身なら、話したら怖毛を震つて嘸厭がる事であらうけれど、これが自分の一了簡で初手から斷然

其面影

其面影

辭つて了ひもならず、さればといつて歸つて此話をしたら、小夜子は否應なしに澁谷の邸へ送られて了ふは見え透てゐながら、之を話さぬ譯にも行ぬ切ない事情が其處にある。一家の主人でありながら、家内の事が萬事意の如くにならぬ焦燥さに、心中では火を焚く想ひがあるにつけても、あく、人生誤つて養子の身となる勿れと、ツイ我身の上が歎たれる。哲也は小野家の養子なので。

尤も養父に當る小野禮造といふは、結婚前に既に此世を去つてゐるから、目上と云つても今は養母の瀧子一人で、跡は瀧子の腹に出來た家着の娘とは言條、哲也には妻の時子と、禮造の不品行から小間使に生せた問題の小夜子とのみで、男氣といつては哲也一人、而も瘦せても枯れても一家の主人公、それが家内の事を思ふ様に爲し得ぬとは、餘りに言効のない沙汰であるが、それでも如何も思ふ様にならぬ。それは強て爲て成らぬ事はない、唯然う爲た後の影での泣言、面と向つての諷刺、不吉な面貌、其が昂じて肝癢紛れの八當り、其様な事が洵に厭なので、ツイ意地を徹す勇氣も挫け、母子の言ひなり次第に成て來た多年の惡習慣が、今は牢乎として抜くべからずなつて居る。

小夜子も實に薄命で、實の母とは縁が薄く、生落ちると其儘引離されて里に出され、稍長じて父の家に引取られてから、其頃は某省の高等官で世盛の父の體面もあつたのであらう、小學

から高等女学校の二年迄は何事もなく通學させられたが、小夜子が年頃になるに隨つて、兎角家内が我他彼此する。父が肝癢を起して寄宿へ入れると、それでは學費が掛り過るとて又採めて、一年足らずで遂に退學させられて、此度は赤坂邊の去る傳道學校へ預けられたのが、寧ろ没化の幸福、此處で英語が著しく上達した。自分も嬉しいと思つて必死と勉強してゐると、其中に父の病死で、家政大改革の口實の下に、豫て父の存命中から其身に附けられた財産はありながら、其は如何なつた事やら行方が曖昧になつて、無理に退學を取せられ、哲也が結婚すると殆ど同時に、嫁られて暫く地方に行つてゐたが、不幸にも其夫に死別れて今は出戻りの、邪魔にされながらも差當り行處もない憐れな身の上である。それを哲也は我が身に引較べて心から憐れむのであつたが、情が仇とは此處の事で、哲也が庇へば庇ふ程、繼母も妻も此不幸者に辛く當る、それで哲也は愈可傷らしくてならぬ。

五

其 面 影

「あく、可哀さうなもんだ」と小夜子の身の上を感みつき、哲也は蹶と壹岐坂を陞つて行く。が、其可傷しい小夜子の身にすら、今日の葉村の話は定めて二の足を踏まれやうと思ふものを、其を承知で看すゝ其厭な話を取次がなければならぬ此身の腑甲斐なさは、何に譬へやう

其 面 影

もない。あく、夫につけても、養子になんぞ成るものでないと、又しても我身の上が歎たれて、溜息を吐き吐き陟つて行きつゝ、フト氣が附くと少し來過ぎたので、二三間後戻りして、其處の横町を左へ折れて、哲也の姿は暫らく闇に紛れて見えなくなつたが、其が再び其先の、と或る横町の吾家の軒燈の下に現はれた時には、言知れぬ苦痛の色を面に浮べてゐた。潜門の引手へ手を掛けて明けんとして一寸躊躇つた。我家へ這入るのが何となく地獄の底へ陥落るやうな心地がする。暫らくして苦々し相に吻と唾をすると同時に、思切つてサツと引開けると、鈴が氣短かにチリン／＼と鳴る。

其音を聽付けて足早に玄關へ出て來たのは、木綿物の洗晒した袷に、是も仕立直し物らしい紡績緋の羽織を被た小夜子で、今年二十三といふけれども、小造りの一徳は丁度か一位に外見えぬ。成程口善意ない葉村までが tres charmeant と許すだけあつて、服装は見窄らしいけれど、面髪はしてゐれど、色は白く、稍面長の、切長の眼にも尋常な口元にも美の影は動いて、殊に其焦點とも見える眼が凝然と物を視る時には、其處に何とも言へぬ情趣が浮く。

と見るより持て居た洋燈を傍に置いて、友禪メリンスの袖口の柵らむ繊弱な手を突き、夜目には何とも知れぬ色のリホンを飄と靡かせて、衝と俯向く時、クツキリと白い襟元を後毛越しに微見せて、

『お歸り遊ばせ。』

妻の出迎せぬは平常の事として、哲也は格別氣に留めた様子もなく、小夜子には勿々に挨拶して、玄關へ上ると、左手が茶の間である。其前を竊々と通り抜けて、己が部屋と極めた奥の六疊へ這入ると、眞闇黒、燈火の來る間を衝立つて待つてゐると、軈て小夜子が片手には着替を抱へ、片手には此部屋のと極めた紙蓋の不景氣な洋燈を持つて、急いで這入つて來て、其處の机の上の、是も自分の丹誠に成つた毛糸の洋燈敷の上に竊と置いて、哲也を見ると、黙つて衝立つてゐるので、

『如何かなすつたのですか？』

『茶の間は静かだつたが、湯にでも行つたのですか。』

『は、いえ……アノ……また昨夜の處へ。』

『また寄席へ？』と驚いて上衣を脱ぐ手を止めたが、『能く出懸けるな』と常の調子になつて、

『そこで小夜さんが相變らず留守番か。能く出來てる、は、は、は。』

『でも私……』と言掛けると、哲也が釣し龜の泳ぐやうな格構をして、ホワイトシャツを脱がうとして藻掻き出すので、其袖を引張つて、『さう行き度もなかつたもんですから。』

『さう、小夜さんは餘り彼様な處は好かないやうだね……あ、難有う』と後からフワリと着せ

影 面 其

影 面 其

られた不斷着の袖へ、衝と手を通して、『しかし留守で丁度好い。少し貴女に話があるのだが……まあ、一寸茶を煎れて來て下さい。』

『御飯は？』

『飯は済みました。それよりか茶だ。茶を早く……』とどツかり机の前に坐る。

『はい』と言ひさま、其處へ脱棄の服を浚つて、部屋を出やうとして振向くと、其を見送つてゐた哲也と視線が合つて、嫣然して、首を傾げながら、『兄さん、お酒を飲みましたね？』

哲也は締のない口元をして、

『えへ……』

六

哲也が後向になつて、春を圓くして、出過ぎた洋燈の心の加減をしてゐると、人の這入つて來る氣色がするので、大方小夜子が茶を持つて來た事と早合點して、

『大層早かつたねえ。』

とひよいと後を振向いて見ると、下女の福が火斗に火を入れて持つて來たのであつた。むツくりした大きな膝をドシリと突いて、

「お歸なさいまし。」

何だ馬鹿々々しいと言はぬばかりに、ブイと又此方に向いて了ふ。此奴が留守の間の監視兵だ。大方十錢丸の一つも貰つてゐるだらうなどと、腹の中で思ひながら、故と素知らぬ面をしてゐると、福は尻痒痒さうに勿々に火鉢へ火を移して、座敷を出るや彼方向に汚ない舌をペロリと出すと、意ひきや小夜子が其處に立止つてゐたので、眞紅になつて、狐鼠々々と摺脱けて行く。小夜子は愁を含つた目に、凝然と其後姿を見送つてゐたが、何にも言はず内へ這入つて、

「あの、好いお茶は皆無になりましたから、番茶ですが、好うございますか？」

「番茶？ 結構！」と小夜子に向ふと、毎も元氣が好い。

竊と其處に蹲踞つて、徐に湯呑を起して茶を注ぐと、濛々と湯氣が立昇る。感心して其手附を見てゐた哲也の前へ、と差寄せて、

「お加減が如何ですかしら。」

影 面 其

「あ、有難う」と我に返つて、早速湯呑を取上げて、続けざまに三口程味はつて、「あゝ、甘い！ 漸く蘇生つた」と又二口程味はつて、「甘い！」と又言つて、鼻へ湯呑を宛がつて香を嗅ぎながら、「焙じてありますね？」

「え、焙じましたが、不可せんでしたか？」

影 面 其

「いや、結構！ 番茶は焙じるに限る」と又一口飲んで、「どうも貴女は違ふ！」

「え？」と其意味を解し難たらしい。

「どうも違ふ！」と又獨りで感心して、「茶を一つ煎るにしても深切だ。姉さんは斯うは爲て呉れない。」

「まあ！」と極り悪さうに微笑する。

「眞實だ。だから私は平生然う思つてゐるのだ、貴女には氣の毒だけど、貴女の不幸が私の幸福になつたのだと。」

といふ面を小夜子が不思議さうに向上げる途端、二人の目がヒタリ出合ふと、お互に衝と其を逸す。

哲也は想の深い目に、凝然と洋燈の火先を視詰めて、

「妙な事を言ふやうだが、貴女が戻つて来て、毎日斯うしてお世話になるので、私は始めて家庭の眞味が分つた……此家へ来て何年にも……」と言葉を切つて、「斯ういふ待遇を受けたことがない……」

と泌りといふ、その聲尻が少し慄へて聞える。小夜子は固より女氣の、もう目には一杯涙を含つて、垂頭れたまゝで面を擧げ得ぬ。

二人共黙然として向ひ合つた耳近くに、秋稍深き蟬こぼろぎの音が、淋し氣に偶と聞える。良やあつて哲也は氣を易かへて、

「ほ、然うだつて、貴女には未だ種々話が有つたツけ。まあ、もう些と此方へお寄り。」

七

哲也は強ひて小夜子を火鉢の側へ膝行ひざぎり寄らせて、

「他の事でもないが、今日實は葉村と一所に晩飯を喫つたのです。ところが葉村の話に、彼男の出てるる會社の社長の澁谷といふ人ね——そら、いつか新聞で散々叩かれた……おと、まだ小夜さんが田舎に居る頃の事だつたかな、知らないかしら。」

「ええ、私あたし、つい……」

「さうか。ぢや、仕方がないが、まあ、其澁谷といふ人の所ところで、家庭教師を探してるといふ話さ。ところで、葉村は是非貴女を世話したいといふのだ。けれども餘り感心しない話だから、私は曖昧な事を言つたのですがね、そりや待遇や何かは相當以上かも知れんけれど、何なにしても先方が甚ひびい家庭だからねえ。」

「甚ひびいといつて、如何？……」

其 面 影

「貴女は彼新聞を讀まんといふから、仕方がないが、そりや話にならん位だ。」

と夫そより其新聞の記事を記憶のまゝ話し出した要領は、澁谷といふは昔は見る影もない大道商人ちきんじんより身を起して、一代に巨萬の富を累かされた人程あつて、實業界では確に一方の雄將であるけれど、斯ういふ人には有りがちの一癖で、甚しく女色を愛する。それも其を賣物の藝娼妓ぎじやうぎを弄もてあそぶとか、妾を蓄へるとかいふだけなら、當代の紳商には常習じやうじゆくの癖事ひがごとと目こぼしにして置く法もあれ、此人の悪い癖は、邸へ来る奉公人で稍澁皮やせかわの剥むげた者があれば、小間使といはず、仲働といはず、必ず一度は手を着ける。それも一度、多くて二度、其沙汰三度に及ぶは罕まれで、跡はケロリとして振向いても見ぬのであるが、其最初手を下す時の手段は、無法といはうか、亂暴といはうか、腕力を用ひるは常の事で、叶はぬ時には麻醉劑たいすいの助を藉たすりることも有るといふ。それで奉公人の親元おやもととの悶着は年中絶えぬけれど、お抱に其専門のモグリ辯護士とかどあつて、毎いつも目腐金めくされがねで揉み消して了ふから、其程の罪惡を犯しながら、未だ曾て裁判沙汰になつた事はないとかいふ、文明の今日に有るまじい、一時は都下の是沙汰これさたを詳細こまごまに話して聞かせて、

「それは新聞の記事は虚實混淆こんかうしてあるかも知れん。しかし話半分に聞いても、随分甚ひびい話さねえ。如何だれ、小夜さん、」と微笑して、「行つて見る氣があるかね？」

小夜子は凝然と考へてゐて、是には何とも答へなかつた。

其 面 影

「偽だ〜！これは戯言だがね」と哲也は狼狽て取消して、「小夜さんの厭なのは分つてるから、貴女の意見を聴く迄もない。其場で直ぐ斷つて了はうかと思つたが、併し何分にも葉村が熱心で、是非世話したいといふのだ。其には何か仔細の有る事でせう、彼の男の事だから、大方向か小野心を起して小細工をやる積かも知れんが、其様な道具に使はれちや、堪らないからねえ、けれども斷然之を斷つて鼻を明させたとすると、彼男の事だから、幾ら家内の者には秘密にして置いて呉れと言つたつて、然うは行かない。必ず私の留守に来て、饒舌つて了ふ。さうすると……」と小夜子と面を視合せて、「ね、困つて了ふ。なに、私は宜しい、どうせ困り序だ。は、は、は。私は構はんが、貴女が堪らない。因で葉村には、拙いけれど、一寸免れを言つて置いたが、しかし道々如何考へて見ても、如何仕様もない。到底話さん譯にいかんが、話したら行けといふに極つてる。其を貴女は厭だといふし、私も其に賛成したら、邪推に邪推が果つて又一悶着は免れん。然うしたら貴女も二人掛りで苛責られて、随分堪まるまいが、しかし此處は、謂はゞ一生の大事の場合だからねえ、貴女も十分に覺悟を極めて、飽迄………」と言ひかけると、

「一寸……」と小夜子が何か聞答めて、耳を聳てた。

「何です？」と哲也は怪訝な面をする。

其面影

其面影

「誰か来たやうですから……」

ハツと氣が附くや、席を蹴つて勢猛に衝と起上るより、つか〜と進んで、颯と障子を引開けると、次の間の唐紙に碇りと人の突當る音がして、マタ〜と逃る足音が、茶の間を過ぎて、確に臺所方面で消えた……

八

障子は明放しに爲て置いて、哲也は舊の座に復ると、沈痛な調子になつて、

「是だもの、全で監獄生活だ！是程人を侮辱した話はない！引捕へて叱り付けるは雜作もないが、奥様の命令だと言はれたら、反て此方が赤面する。遊びにも行きたいが、留守も心配で、彼様いふ事を爲せるのだからうが、實に怪しからん奴だ！」と目を瞑らしたが、聽て冷かに自ら嘲ける如く、「併し此様に侮辱されながらも、尙ほ辛抱して居なきやならん身の上だ。小夜さん、世の中に義理程辛いものは無いねえ……」

と凝然と目を瞑つて腕を拱む。

此體を見て小夜子はハラ〜しながら、

「本當に兄さんにはお氣の毒で、私、もう……姉さんは何故此様な事を爲さるのでせう？元

は其様な人でもなかつたんですけれど……」

と謝るやうに言ふのであつたが、其言葉は最う耳には入らぬらしく、哲也は黙然として考へてゐた。久らくして信と目を睜いて、

「宜しい！ 私は一旦辛抱すると極めた以上は、飽まで辛抱する、辛抱して人間の苦痛のドン底を覗いて来るが、併し貴女は此様な家に辛抱して居なきやならん義理はない。此様な家に居て此様な侮辱を受けるより、寧ろ、葉村の話は幸ひだ、澁谷の所へ行きますか？……」と意氣込でみたが、又萎れて「とはいふものゝ、彼様な魔窟へ行くのは、如何に何でも貴女も厭だらうし、又遣られもせず……といつて此様な家に辛抱してゐるといふも残酷だし……あゝ、今私に少し金があつたらなあ、何處かの學校の寄宿舎へ貴女を入れて了ふのだが、其金はなし……あゝ、如何したものかなあ……」といふ頃には、今迄着纏めて光澤氣のなかつた面にクワツと朱を濺ぎ、目に怪しき光を湛えて、容易ならぬ顔色になつて居ながら、薄氣味わるくニタ／＼と笑つて、「僕あ何だか頭が混亂して、無茶苦茶になつて来た……」

小夜子は堪えかねて、「兄さん、何卒、もう、其様に御心配なさらないで……寧ろ、もう、……寧ろ其澁谷さんとかへ遣つて下さいまし……私、もう、覺悟を極めましたから……」
「さうさなあ」と又考へ込む。

影 面 其

影 面 其

「何卒然うして下さいまし。然う御心配懸げちや、私、本當に何ですから。」

「いや、私の心配は何でもないが」と淋しげな笑面を擧げて、「然うして貴女に行かれて了つたら、私も困るからなあ」と又ガクリと垂頭れる。

「其様に仰しやツて下さると、私、もう、如何して好いか……」と是も引入られるやうに滅入つて了ふ。

淋しい姿を二つ並べて、果敢なげに打萎れてゐると、忽ち氣立たましく門の鈴が鳴る。其音を聞くと、小夜子は颯と面色を變へて、

「あら、姉さんが！……」

と浮腰になり、狼狽して、衝と起ち上るや否や、パタ／＼と驅出して行く。此人には有るまじい此周章やうを、哲也は悲し氣に見送つてゐたが、果して今迄寂としてゐた茶の間あたりが俄に譟然と騒しくなり、久らくして其中より一つ離れて此方へ来る足音は、確に其と思ふと共に、衝と不快の氣が胸に塞つて、哲也は堪へ難き心地になる。

直と座敷へ這入つて来たのは、かう哲也に厭がれる其人で、即ち妻の時子である。稍色の淺黒い、險相な、信と見る目に力のある、品の無い代り婀娜ばい●意氣がる者は妹を差措いて此姉様を取らうも知れぬといふ人柄で、二十七には老作りの、去りながら寄席行とは信用れぬ贅

澤な濛い服装で、パツと裾を捌いて火鉢の側に坐ると、幽しい匂ひが四邊に薫ずる。

「只今。貴方は何方へお廻りなすつたの？」

哲也は無意味な面をして、「葉村が學校へ寄つてね、一所に晩飯を喰りに行つたもんだから。」

「何時ごろにお歸りなすつたの？」

「さう、何時頃だつたか。暮れて間も無かつたでせう。」

「夫から今迄小夜を引付けて、何をして居らしつたの？」とずばりと言つて、直と夫の面に視入る。

哲也も凝と其面を視返して、「話をして居たのです。」

「大層長いお話ですことねえ」と空嘯く。

九

影 面 其

「何が其様にお話が有りましたの？」と時子は更に夫の方へ向直つて「七時から——八、九、十、十一時」と指折り數て、「四時間になるぢや有ませんか？」と凝然と面を視詰めた。けれども、哲也が餘處を向いて更に相手にならぬので、少し焦燥氣味になり、「四時間も側へ引付けて置て——何が然うお話が有つたのか知らないけど、少しは奉公人の手前といふものも有ますから

影 面 其

れえ。」

「奉公人の手前が有る？」と哲也は凝然と顧つて、「妙な事を言ふねえ。小夜さんはお前さんの妹ぢやないか。お前さんに妹なら、私にも妹の筈。兄妹で話をするのに、奉公人の手前を憚らなきやならんとは妙だねえ。」

「お話を爲すつて不好と、誰も申しは致しません」とぢり／＼と肝癢筋を額に現はしながら、口ばかりは悪丁寧に、「けれども、物には程度といふものが有ますからねえ。家の者が出拂つた留守に、何ぼ義理の妹だつて、四時間も五時間も側へ引付けて置いて、泣いたり、笑つたり、取ッ付いたり、引ッ付いたり……」

「誰が其様な事を言つた？」と哲也が倍となると、

「誰が言つたつて、好ぢや有ませんか？」と此方も険しい目色になつた。随分賣る喧嘩なら買ひ兼まじき氣色であつたが、哲也が思返して、凝と耐へて黙つて了つたので、又舊の悪丁寧な調子に戻り、「それは誤解も有るでせう。正可高等の教育をお受けなすつた、苟にも學士の肩書の附く貴方が、其様な間違つた事を爲さる筈はないでせうけど、世間は皆貴方の様に然う分曉つた人ばかりでも有りませんからねえ。何ぼ義理の妹でも、餘り愛し方が度を超えて、男女間の遠慮といふものが亡なるやうですと、何か其處に妙な關係でも……それは有りはしませんまい、

有りはしますまいけど、有るやうに誤解されますからねえ。貴方も正可今の地位に満足して居らッしやりも爲ますまい？ 是から大に發展しやうといふ方が、萬一其様な事が下女の口から漏れて、厭な評判でも立てられたら、其がお邪魔になりますまいかと——女は淺墓なものですからねえ、其様な事が心配になりますの。』

『さうですか』と哲也は故らしく平氣な體になつて『其なら然う心配することはないでせう。なに、世間は皆其様な降らん奴ばかりといふでもなし、下女なんその言ふことを信用して、人の潔白を疑ふやうな、そんな愚劣な者には、疑ふなら疑はせて置いて差支へないと思ふ。若し一々其様な者の言ふ事に取合つてゐたら、例へばお前さんが每晚寄席なんぞへ行つて遊んで來るのも……』

『お言葉の中ですが、私遊びに寄席へ参つた覺は御座いませんが……』

『さうですか。ぢや、每晚出懸けるのは、あれは何の爲めに行くのだらう？』

『阿母さんが行きたいと仰有るから、年寄を一人で出すも何ですから、それで附添て参るのですが、悪う御座いましたかねえ？』と顯然見え透く虚言を平氣でいふ。

其面を哲也が見下げ果てたと言はぬばかり、苦々し相に凝と視てゐた眼に、颯て冷笑を浮べて何をか言うとすると、福がいつの間にか來て、座敷の外に蹲踞り、

其面影

『奥様、此お手紙はッ』

『おと、然うだッけ。此方へお呉れ』と手紙を受取る。

『もう、お奥のお梅は伸べましたが……』

『さうかい、そいぢや最う好いから、お前はお休み。』

福が御挨拶を申して、横目でジロく且那様の面を視ながら引退るを待つて、

『これは先刻参つたのださうで御座いますが』と飽迄切口上を棄てず、手紙を夫の前に差置いて、『福が此手紙を持つて上らうとしたら、なぜだか、大層お驚きなすつて、卒然大きな聲で、

『誰だ！……』とか仰有つたさうで御座いますね。それで彼女が吃驚して、逃出しましたので、ツイ上るのが遅くなつたのださうで御座います』と厭に引絡む。

『さうですか』と愈平氣の體で、『福も可怪な奴だな。手紙を持つて來るに、何も足音を偷む必要もなからうに、忍足で來るから、大方何か必要があつて、立聽に來たのかと思つたら、然うぢやなかつたのですか？』とざろりと妻の面を見る。

『然うぢやなかつたのかと仰有つて』と苦笑として、『其様な事何も私の知つた事ぢや有ますまいし。』

『さうですか』と哲也は鼻で言つて、手紙の封を颯と切り、凝と其に目を注いで黙つて了つた

其面影

が、固より何處から來た手紙か、何が書いてあるのか、分らなかつた。

哲也が何時迄も手紙を視てゐて相手にならぬので、時子も遂に退屈して、アイと起上つて座敷を出た。茶の間の前迄來ると、まだ燈火が射してゐるので、卒然其處の障子を開けて見ると、小夜子が火の氣の無い火鉢に押覆さるやうになつて、俯向いて居る。

『何をしてゐるの？』

と言つても返事がない。その黙つて俯向いて居る妹の頸元を、時子は凝と視てゐたが、

『をかアしな！ 泣てるンだよ、此人は。』

と其儘衝と奥の間へ這入つた。

一〇

其 面 影

冷々とする夜であつた。哲也は夜着の中に身を屈めて凝と目を瞑つて見たが、まだ決着の附ぬ小夜子の身の始末が胸に支て、日頃寐付の悪い身の、愈寐られべくもなく、又しても夫を考へて、行詰つては臥反を打ち、壁に向つて太息を吐くのであつたが、やく曉方近くなつて昏昏とする、忽ち不思議な悪夢に墮はれて偶と目を覺せば、滿身汗に濕つて、領元胸先のぬらくとする心地悪さ。首を矯げて見ると、もう障子の日影は大分長けて、枕元の時計を見る迄もな

其 面 影

く、常よりも寐過してゐるは知れてゐれど、側に寢た妻は相變らず貪眠くて、まだ目を覺した様子もなく、彼方向きの、無理に作つた坊主領の、其寐姿を見るにつけても、直と昨夜の事が思ひ出されて、何とも言へぬ厭な氣分になつた。

が、氣を易へて、起き上つて、急いで顔を洗つて茶の間へ來て見ると、隱居は既う朝飯を済したらしく、長火鉢の前に圓くなつて、眼鏡を方に新聞の拾讀をしてゐたが、哲也が挨拶をする、上目を使つて眼鏡越しにギロリと見ながら何やら言つた其眼色は矢張例の眼色で、今日に限つて睨めるやうに見えたのではないが、之を見ると晴れた日も曇る程、哲也は常も厭な氣分になる。夫かと云つて、入婚以來只の一度も此人と明白に衝突を爲たことはない。表面は阿母さん、哲也さんと、飽まで美しい關係であるけれど、縁組の最初から、其處に互に妙な隔てがある。隔てがあるから、此人に黙つて苦笑とせられるのが、妻の切口上の攻撃よりも辛い。それが哲也の社會上の地位が略定まつた近頃は殊に甚しくなつて、面を合すさへ苦痛を感じる程で、時としては家内の事が意の如くならぬのも、妻の我儘の所爲ではなく、唯頑冥な此義母一人あるが爲めのやうに思はれ、此人に對して何とやら百年の遺恨が有るやうな心地がする。虚心に考へて見れば、是は謂れない事で、家庭の面白からぬ第一原因は、反て我の此義母に對する此疎隔心に在るかも知れぬと、哲也も必ずしも思はぬではなかつたけれど、けれど、面り

に母の皺澤山の、汚染だらけの、險相な面を見ると、唯理由もなく不快の氣が衝と胸に塞がつて、久しく席を同うするにさへ堪へぬのであつた。

今日は殊に厭な氣持がするけれど、勉めて何喰はぬ面をして其處に用意の膳に向ふと、小夜子が襷を外しく、急いで来て給仕に立つ。味のない飯を茶で流込ながら、何時迄も黙つて居るのが可怪しくなつて、誰にいふともなく、

『どうも睡い！ 昨夜餘り晩かつたもんだから、』

と何心なく言つた積りの一言も、言つて了ふと、其處に妙な影が射して、小夜子はハツとしたりしく、直ぐ尻眼で一才繼母の面を見た。

けれども隠居は此言葉が耳に入らぬ如く、知らん顔して黙つて新聞を視てゐた。其癖哲也が箸を棄てて起つて納戸へ着替に行くのを、出入りの世話を一人で引受けてゐる身の、今日に限つて餘處に視ても居られずと、續いて起つて其跡を追ふ、小夜子の姿が襖隠れに隔たり行を、隠居は信と振反つて目送ると其儘、急に注意の塊となつて聽耳を聳てたが、納戸の話は密々と、聲ばかりして筋が聽取れぬ。兎角する中其話聲も噤と止んで、バタ／＼と出て来る二人の足音に、隠居は周章で膝の新聞を取上げて、急に又凝と視入ると、哲也の面が瞥と覗込んで、出懸の挨拶をする。其時隠居は初めて新聞から目を離すやうな面をして、例の眼鏡越にギロリと顧りな

其面影

其面影

がら、『御苦勞でございます。』といつて、又新聞に目を落したが、玄關迄送り出した小夜子が、一旦挨拶をして置きながら、『一寸……』と呼止めて、何やら耳打でもする様子に、隠居の面は又勃然擧つたが、もう其時は話が済んで、小夜子の聲で改めて、『では、行つて入らつしやいまし。』

と聞くと何故か隠居は薄く唇を引歪めて鼻の先で、へ、へと笑つた。

此時奥で、『福！ 福！』と氣立ましく呼ぶ聲がする。

小夜子が小走りて駈けて行つて、『福は今手が塞がつてますが……』

『手が塞がつてるなら、塞がつてると早く然う言つて呉れるが好いぢやないか。散々人に呼ばして置いて。』

『つい、聞えなかつたもんですから。何か御用ですか？』

『煙草の火ですよ！』と大きく言つて、跡は沸々と、『極つてらアね。』

『はい』と、大人しく、小夜子の姿は茶の間へ隠れた。

一一

學生は皆驚いた、平生は低い滅入つた聲で、諄々と煩瑣い程深切な哲也の講義も、其日の疎

漫なることは、時とすると何を説くのか、殆ど要領を得ぬ事さへあつた。で、講義が済むと、皆怪訝の顔を看合はせて『哲ちやん。』今日は如何かしてゐるぜと怪しむのであつたが、怪しむべきは夫ばかりでなく、哲也は毎も教場を出ると其足で、直庶務室へ駈付けて、其處の電話に掛らうと焦心る。

其昔卒業論文の賃銀論では、随分先輩の博士達に驚嘆の目を側めさせた哲也の頭でも、あはれ小夜子を救ふ手段に就ては、昨夜一夜を考へ明しても、殆ど何の結末も附かぬ苦し紛れ、窮策ながら、差當つては葉村の來て、喋々と其事を饒舌るを防ぐ外はないと思つた。防いだ後を如何に處置すべきか、其處は我ながら曖昧で、まだ睨と思定めに所があるではないが、兎も角も當面の急務は此外に出ぬと思ふので、來るを防ぐの道は我から訪問るに在りと、唯一言『歸りに寄る』と葉村に言ひ度ばかりに、斯う人も怪しむ程屢電話に足を運ぶのであるが、いつも折悪く其が塞がつてゐる。此方が明け先方がお話中で、給仕に心得させて、念のための口上書まで渡し、我身代りに立てやうとすれば、次の休憩時間には其給仕の行方が知ぬと、萬事が翩翩の、思ふ様にならぬ焦燥さは地輪を踏むばかりであるが、さて奈何とも仕様がなない。

午後になつて、辛うじて通話が叶つて、やれ嬉しやと思へば、葉村は留守だと云ふ。もう會社へは來ぬ筈かと問返へせば、睨とは分りませんがと、まだ何か言つたのなれど、其は聴取れ

其面影

其面影

ず了ひに、弗り電話は切れて了つた。泣出しさうな面をして電話口を離れた哲也は教員室へ戻つて來て、其處の空椅子にどうと身を投掛るより、兩脚を踏開け、腕を十字に拱み、反身つて失望を太息と共に天井に吹付けるを、側に居合せた同僚の一人に見咎められ、『小野君、如何かしたか？』と怪しまれて『如何もしやせん！』と叱付けるやうに言放つて、彈かれたやうに跳起ると、例の錫廣の帽を鷲掴みに、つか／＼と戶外へ出た。既う受持は済んで歸るばかりの身ではあるが、斯うして戶外へ出たに何の目的が有るでもなかつた。唯焦燥さの棄場に困つて安坐して居られぬ爲であつたが、一旦出ては最う引ッ返しもならず、いら／＼しながらも、何やら見えぬ力に牽れるやうに、家路を辿ること四五町にして、偶と四角の自働電話に目を注げて立止まつた。暫く凝然と考へてゐる中に、稍蘇生つたやうな面になつて、衝と其箱の中に姿を隠したかと思へば、聽て外へ漏れる其聲を聞けば、又しても懲りずまに葉村を呼出すのであつたが、留守の葉村は矢張留守なので、では若し歸つたらと其を冒頭に、云々の者が晩に訪れて行く由を確と傳へて呉れと、蒼蠅られる程繰返し／＼其を言つて、箱を出ると其足で、三番町の葉村の宅を訪れて、此處でも亦留守居の者に幾度か念を押して其を言置、外へ出て吻と一息した。

もう是で大丈夫、外の防ぎは付いたと思ふにつけ、今更氣掛りなは我家の光景、小夜さんが

留守に責られて困つては居ぬかと、其を思へば、閑な身も氣忙しくして、俵を呼んで壹岐坂下まで駈付け、飛降りるなり、坂を走り上るなり、我家の門口迄息急きつて来て見ると、綺麗に拭込んだ黒塗の自用車らしいのが一臺其處に下りて居て、待草臥た黒鴨仕立の車夫が駈込に腰を掛けて正體なく寝込んでゐる。

けれども哲也はまだ其とは氣が附かず、誰が来てゐるのか知らずと暢氣な事を思ひながら、まづ内へ這入つて、歩きもせぬに草臥れた腰をどツカリ玄關に卸す其音を聞付けて、勝手に働いて居たらしい小夜子が手を拭き、周章と走り来て、可哀や待侘びて居たのであらう、出迎の挨拶さへ例になく忘れて、

「兄さん！ 葉村様が来て居らっしゃいますよ。」

「葉村が？……」と哲也は暫く目を睜つて小夜子の面を見てゐたが、聽て小聲ながらに「失敗た！」と絶叫すると、驚き、悔恨、失望、當惑、其等が一時にクワツと面に現はれて、「ぢや、もう出ましたね、彼話は？」と何よりも先づ其を聽きたがる。

「えと、其が出て私本當に困つて了ひましたわ。」

「で、詰り如何になりました？」

「既う行くことに決りました。」と悄然と垂頭れる。

その可傷しい姿を瞥と見ると、哲也は忽ちクワツと急込んで、「誰が決めたんだ、失敬な！ 人の意見も聽かずに擅断にも程がある……」

と後から小夜子が狼狽た聲で、未だ何やら言つたのであるが、其は最う耳に入らず、猛然と奥を目掛けて進んだ。

一一一

颯と奥の襖を開けた哲也は尋常ならぬ見脈であつた。怒に輝く目に倍と座中を見渡すと、葉村を上座に据ゑて母子二人掛りで款待の最中と見えて、杯盤の狼藉たる中から、輝いた三人の目が齊しく此方を振向く。

中にも床を背にして、滅多な客には出さぬ事にしてある黄八丈の厚蒲團の上に、小さな體を大きく据ゑた葉村は、もう大分參つたらしく、華やかな微笑の尙消残るちろちろ目を無理に薄目に睜いて、心地よげに哲也を見迎へながら「やあ！」と明放しの高聲を揚げて、「嘘吐きの隊長、歸つて来たな」と先づ浴せて、哲也が氣難かしい面をして、むづと席に着いた前へ、持合せの杯を突付け、「さあ、罰杯だ。」

「何故？」

「何故も無えもんだ！ 本當に君の様に信用の出来ない人間も無いぜ。昨日彼程受合つて置きながら、未だ當人へ話がして無いなんぞは驚くれ。」

「嘘ですよ！」と時子が横から口を出して、「昨夜の中にチャンと話は済んでるんですよ。」

「でも、先刻小夜さんが……」

「貴方も餘程正直者れえ」と一つ輕蔑して置いて、「彼は皆しらばツくれてるんですよ。なに『まだ伺ひません』ことが有るもんですか。もう昨夜の中に其は『伺』がつて、それから何だわ……私チャンと知つてるわ」とざろりと哲也の面を尻目に掛けたが、昨夜程の見脈でもなかつた。

「さういふ譯かれ？」と葉村は哲也の面を覗込んだが、哲也は默然としてゐた。

兩腕を膝に載せて屈むで烟草を煙らしてゐた隠居が、此時ニヤリと薄氣味の悪い笑を漏して、

「正可此女の言ふ様でもないんでせう。哲也さんにも其處には又種々深い考へがお有で、それで未だ皆には話が無かつたんでせうけど……」

「いくえ、其に違ひないのよ」と時子は矢張葉村を相手にしながら、「いつでも然うなんでもの。二人で密々内所話しちや相談を極めといて、私達は後廻しき。それも後で話が有つたり、無かつたりでね、矢張貴方の様に秘密の多い人達ですから。」

「おツとツとい！」と葉村は兩手を出して其飛汁を禦いで、「貴方の様にだけが餘計な文句だ。」

其 面 影

其 面 影

人聽の悪い！知らない者は本當にしますよ。」

「ほ、ほ」と軽く笑つて、「だつて、其様な事仰しやるけど、貴方だつて餘り秘密の無い方でも有りますまい？」と異う尻上りに云ふ。

「どうして〜、公明正大なもんさ。だから自然と夫婦中も好くつてね、毎も日曜にや、二人分のお賽錢を巾着に入れて、手を引合つて淺草の觀音様へお参りに行きますのさ。」

「さうでせうれえ。其だから曩昔も新橋の……」と目で笑つて、「あれが露顯した時なんぞにやれえ、奥様に平謝に謝つて、お刺に帯を買はされるやら、歌舞伎座を奢らされるやら……」

「失敗ツた！」と頓狂に大きな聲を出して、頭を抱へて、小さくなつて、密りと「そいつを言はれちや一言なしだ。」

「は、は、は！」と隠居が男のやうに笑つて、「どうも物喰ひの悪い人は、何處へ行つても兎角頭の揚らないもんですれえ。」

「やツ、叔母さん迄が……」と目を圓くしたが、「かう如何も若いのと、年を喰つたのと、二人掛りで攻められちや、敵はれえ」とぐたくと首を掉る。

又高笑ひになつて、其が止むと、隠居が「どれ、私は斯うしちや居られない。」とうんとこなと起ちかゝる。

「まあ、好いぢやないか。もう一つ飲れ。」

と葉村が我前に陳んだ杯の一つを取上げるより、呷と乾して、面を擧めながら衝と差すと、隠居は手を揮つて、

「もう私はいけない。其は貴方にお預けさ。」

此時時子が物をも言はず、丁と徳利を出して、看る／＼其杯に満々と注ぐ。

「おやッ！」と葉村は目を圓くして、杯と時子の面とを交々眺めて、「不意撃やつたね。これだから年増と支那人の呉服屋は嫌ひだといふのだ。」

「何故さ」と時子は微笑ひをしてゐる。

「時々押賣を行るからッ……」と大きく口を開いたなりで首を蹙込める。

「それこそ人聽が悪いわ。失禮な！」

アハ、オホ、と笑聲を合せて二人は面白さうであるが、哲也は些とも面白くないのである。

一三

其 面 影

哲也は甚だ面白くない。席に着いた時、葉村が一杯獻したばかりで、後は振向いて見る者も無いのは先づ好いとして、二人は愚にも附かぬ事を面白がつて話合つてゐて、小夜子の事は忘

其 面 影

れたやうに何とも言ひ出さぬ。我顔を見たら何は借て措き、先づ以て事の経過を告げて同意を求むべきであるを、餘りといへば踏付けた仕方と、今は養毎の去つたに稍遠慮氣の失せた哲也は、不平に思ふ心を明白に面に顯はして、凝然と妻を見据ゑてゐたが、突然、

「それで、小夜さんの事は如何なつたのです？」

是で折角の二人の興も醒めて、時子は氣の脱けた面ばかりを此方に向け、「小夜の事ですか？先方でお急ぎださうですから、明日朝の中に、葉村さんのお宅迄伺つて、冬子さんに連れてツて戴くことになりましたの。」

「其方が都合が好からうと思つてね」と葉村も話の仲間に入つて、「何しても澁谷の方では、今迄のに急に行かれて大狼狽をやつてるもんだから、野暮に急ぐのだ。」

「誰が行ると決めたんです？」と哲也は葉村を棄てて措いて佞と妻に向ふと、

時子は嘘でもなさうに吃驚して、「あら、貴方と小夜とで決めたのぢや有りませんか？」

「私と小夜さんとで……？」と鸚鵡返しに言つて不審の眉を寄せた。

「何をお恍惚なさるんですよ！ 貴方が初に受合て居らしつたのぢや有ませんか。而して昨夜

……私にや何ともお話がなかつたけれど、小夜へは其お話が有つて、其時チャンと行くことに相談が決つたんでせう？ それで、先刻小夜を呼んで聞いたら、「兄さんさへ御承知なら」ト冷

笑して、「行きたい」と言つたんでせう？ 私は今日始めて聞く事なんだから、何だか事情が分らないけど、大方其様な事だらうと想像してゐたんですが、違ひましたか？」

「ぢや、小夜さんが行きたいと行つたのですね？」

「ええ、私にや然ういひましたが、貴方にや然うは言はなかつたのですか？」

「私は未だ全然話をせんのだから、其様な事は知らない。」

「さうですか。」と冷笑したが、しかし昨夜程の毒氣はなかつた。

葉村は突然天井を仰いで聲を放つて笑つたが、笑止むと、「堪へられねえ。餘程先生如何かしてゐるぜ。」

「本當にねえ」と時子は又彼方向になつて、「自分達が相談づくで行くと決めときながら、誰が決めたつて聞く人もないもんですわれえ。」

斯う手厳しく當られても哲也は憮然として一句をも吐き得なかつた。是に至つて賊ありと見て劍を按じたりや、夫が我影法師であつたよりも尙ほ拍子脱けがして、我ながら我爲た事の馬鹿らしきに、殆どいふべき言葉をも看出し得ぬのであるが、しかし考へて見ると、妻の誤解したのも無理はないと思はれる。成程自分は葉村には受合つたやうに言つて置いたに違ひなく、小夜子も問はれて或は行きたいと言つたであらう。行き度ないは知れてゐれど、否むだ後の我迷

影 面 其

影 面 其

惑を想へば、小夜子の身にしては然う言はざるを得なかつたであらう。それは昨夜の言葉の端にも察せられて、今更疑を容れべき餘地もないが、それを言つて了つては、最う我力に及ばぬ。それを言はせ度ないばかりに今日一日藻掻いたのであつたが、もう斯う成つては是非に及ばぬと、觀念の眼は閉ぢても、無念さに腸の煮ゆる想ひがある。

其様子を二人は可笑がつて、竊り顔を看合せて笑つたが、聽て葉村が大きな聲で、

「おい、如何したく、確りしないか。何も然う考へることは無いぢやないかよ。」

「考へるではないが」と哲也は慵げに目を開いて、「順序が錯雜して分らなくなつたもんだから」と我知らず太息を漏らす。

「三段論法には嵌りませんか。」

「あは、は、は」と持つて來て押付けたやうな笑ひ方をして、「どれ」と重さうに身を起し、「僕は着替へて來う。服だと窮屈だ。」

ノツツリと出て行く哲也の後姿を見送つて、二人はまた面を看合せて密り笑つた。

一四

後で時子は其でも小聲になつて、「葉村さん！察して下さい、私本當に厭なッ了ひますわ、

始終彼様なんですもの。苦アい面をして、黙アつてゐて、人が側へ行つて話掛けりや、蒼蠅さうに彼方向いて了ふし、それかと言つて、何處が氣に入らないのだから、聞いたつて言つては呉れないし、私確に嫌はれてるわ。』

『なアに、ありや彼様いふ男なんだよ』と葉村は一向取合ひさうもない。

『いとえ、其に違ひないのよ。だつて、若し性質なら、誰に向つたつて同じ調子でなきやならないでせう？』とところが人に由つては大違ひ！全然別の人のやうに成るんですもの。』

『さうかれ。僕にや常でも彼様なだがねえ。』

『それは貴方が知らないんですわ。家へは能く學校の生徒さん達が遊びに来ますがね、さうすると、如何して彼様に饒舌るのかと思ふ程お饒舌をしてね、御機嫌ですの。家の者でも……』と一寸躊躇つたが、『小夜だけは違ふわ……』

『氣に入つてるね。そりや僕も感付いてる……出來てるンぢやないかれ？』と笑割さうにニタ／＼となる。

『そりや何とも言へませんが……』と凝然と考へて、『只ね、どうも可怪いと思ふのは、夫ながら小夜が澁谷さんへ行くのを厭がりさうなもんぢや有りませんか？』とところが然うでもないんだから、少し變だわ。』

其 面 影

『だから、先あ左程にも思やせぬといふ片思なんだらう。』

『いとえ、然うでもないの。小夜の方でも口へこそ出しちや言はないけれど、心ぢや何とか思つてるに違ひないと思ふ事が澤山有るわ、えと、そりや澤山有るわ。』

『さうかれ。それぢや薩張分られえや。いや、兎角學者といふ奴は氣の知れないもんだ。』

『本當に氣が知れないと云て、彼程知れない人も滅多には無からうと思ひますね。舊は彼様でも無かつたんですけど、如何して彼様に成つたつたんでせう？』

『さう、異なることは随分異つたねえ』と不知誘はれて昔を憶ひ出したといふ風で、『僕が未だ此方の家に世話に爲つてる頃は、第一彼様に陰鬱ぢやなかつた。雙方とも負す劣らずの剛情だつたから、能く喧嘩しちや、貴女方を困らした事も有りましたねえ。』

『さうでしたねえ』と莞爾となつて、『貴方も彼時分は随分亂暴だつたのねえ。そら天長節の晩に、酔拂つて歸つて来て、私を捉まへて困らしたことが有つたわねえ。』

『まだ覺えてるかね』と葉村も莞爾となる。

『覺えてなくつてさ。私彼晩の事は一生忘れやしないわ——口惜しいから』と矢張笑ひながら。『可怖いく。道理で此頃能く風邪を引くと思つたら、ぢや、憑つてゐるんだね』と口には茶にしてゐれど、内々は少々極りの悪い様子。

其 面 影

此方は存外平氣なもので、面白さうに矢張其を繰反して、
 『私一生忘やしないわ……』

一五

此方は哲也、ノツソリ座敷を出て竊と茶の間を窺いて見ると、隠居は勝手へでも出てゐるの
 か、影も見えず、小夜子が獨り忙しさうに溜塗の吸物膳を拭いてゐたが、と見て、

『兄さんのお膳が大層遅くなりまして。只今直ぐ持つて参りますから。』

『其よりか私は何だ、一寸着易へたい。衣服は何處に在りますか？』

『は』と小夜子は起ち上つて、『御免遊ばせ』と兄の側を摺脱けて、急いで納戸へ入つたので、
 哲也も續いて其處へ入つて、袖疊みにした不斷着を出して呉れた小夜子の面を、と見ると、

『小夜さん、貴女は行きたいと言つて了つたさうだねえ。』

とさも力なきさうに云ふ。

小夜子は急に俯目になつて、『兄さんには誠に済みませんが、私が斯うしてゐては、始終御
 心配が絶えませんから……』

『それは分つてる、貴女の心は能く分つてる』と頗に頷いて、『貴女の身になつたら然ういふ氣

其面影

其面影

にも成るでせうけど、私の心配が絶えんからツて、貴女を棄てて措いては、第一死なされた阿
 父さんに對して私が濟まない……が、最うどうも仕様がな、最う仕様がな、と残念さうに
 反覆したが、『もう仕様がなから、試みに、まあ、行つて見て下さい、而して若し何か厭な事
 が有つたら、直ぐ歸つて来て下さい。』

『は』と首を下げる。

『此處は貴女の家だもの、誰に遠慮も有りやしない。厭な事が有つたら、直ぐ歸つて来てくだ
 さい。若し其を彼はいふなら、其は言ふ方が無理だ、私が飽迄辯護する。だから、厭な事が有
 つたら、直ぐ歸つて来て下さい。』

『は』と又首を下げる。

『しかし嘸厭だらうねえ。皆私が悪いのだ、最初に斷然辭つて了へば好いのに、逡巡して居た
 もんだから、つい此様な事に成つて了つて、貴女には厭な想をさせるし……』
 と後を言はずに歎息する。

『いくえ、私其様なに厭だとも思ひませんか……』

哲也は頭振を振つて、『いや、其様な事は有るまい。』

『いくえ、其様に厭だとも……自分さへ正しくしてゐたら、周囲が如何様でも勤まらないこと

も有るまいと思ひますから。』

『そりや然うだが、しかし其にしても厭でせう。そりや言はんでも分つてる……宜しい！ 私
も何時迄も貴女を彼様な處へ遣つて置きはせん、必ず其内に何とか方法を附けて、貴女を引取
られるやうにして引取るから、まあ、此處一二ヶ月の事だと思つて辛抱して行つて下さい。』

『は』とは言つたが、承服せぬ様子で凝と考へて『では、黙つて行つて了ふのも餘り何ですか
ら、言つて了ひますけど……兄さん！』と何とも云へぬ深い想ひの籠つた目に哲也を向上げて、
『私一生のお願いが有りますが、叶へて下さいますか？』

『一生のお願い？ 何です？ 何なりと遠慮なく言つて見て下さい、私の力で出来る事なら、
何でもする、貴女の爲なら、何でもする』と意氣込むと、

小夜子は又俯目になつて、『私考へて見ますと、かう家の揉めるのは皆私の所爲だと思ひます
わ。ですから、私今度行つたら、如何様に辛い事が有つても辛抱して、先方で置いて下さる中
は勤めて居ますから、兄さんも……』と中絶れて、『もう私の事なんぞ御心配なさらぬで……
……』と聲尻が慄へて、又暫く中絶れたが、思ひ切つて、『何卒姉さんを……あ、あ、愛して上げ
て……』

影 面 其

とばかりで後が續げず、衝と彼方向いて直と袖を面に當てた、その細そりと變れた姿を見れ

影 面 其

ば、手づくれの束れ髪にも、憐らしや女氣に、庭に咲いたを一輪摘んで、簪代りにした白菊の、
その花さへ葉さへ戦かせつと、奥を憚つて忍音に袂駄けてゐる。

と見ると哲也も、何がなしに悲さに衝と胸が逼つて、思はずはらくと落涙した。

一六

小夜子は遂に澁谷家へ行つた。其から後の哲也の朝夕は急に火の消えたやうに淋しくなつた。
學校は掛持共三つ持の身の、夜に入つて歸ることも一週に何度となくあるけれど、疲れ切つて
歸つて來ても、もう笑ましげに出迎へる人もなく、身の邊の用を深切に達して呉れ手もなく、
茶を呼び火を呼んでも福は返事をせぬことさへある。何かにつけて想出すは其人の事で、あゝ、
小夜さんは今頃は如何してゐるであらうと、朝目覺めて先づ想ふのもそれ、夜尊に入つて最後
に想ふのも亦それであつた。

丁度小夜子が去つて三日目の事であつた。例の通り學校から歸つて見ると、妻が居ぬ。妻が
居ぬとて、何の、關係のない事と、別段問うて見るでもなかつたが、隠居の方から口を切つて、
今朝小夜が荷物を取りに一寸歸つて來たを幸ひ、荷物は人に持たせて先へお邸まで届けさせ、
小夜は時が連れて葉村へ禮に行つたと云ふ。小夜と聞くと、哲也は妙に胸が悸つたのを押隠し

て、故と冷然と構へ、其癖其後を聞かうと竊に耳を聳てると、話は其切り、後は宜しく位の事
で少し本意なかつた。必ず澁谷の邸の様子が噂に出たに相違ないと思つたけれど、根問して此
人に痛くもない腹を探られるのも辛いので、其儘にして我部屋へ戻りは戻つたが、何となく残
惜しい。責めて時子なりと早く歸つて来よかし、歸つたら一つ鎌を掛けて言はせて見やうと思
ふと、つい今しがた迄何處へ行つたとて構はぬと思つてゐた妻の歸りを、曾て覚えぬ程待侘び
て、門の開く度に幾度か耳を聳てた。

時子は夕飯少し前に歸つて来た。例の通り食事に茶の間に集つた時、哲也は若しや其人の噂
が出るかと、竊に心に期せぬでもなかつたが、其は空頼みとなつて、反て葉村の生活振りの贅
澤な噂で持切り、やれ葉村の妻の冬子が米澤耕の羽織に糸織の衣物を不斷に着てゐたの、今度
新調の袷は鼠がとつた勝色の山繭入縮緬で、裾は梅鼠縮緬であつたが、あれは薄鼠の方が引立
つので、帯は唐織古代模様丸帯で慄ひ付くほど好かつたの、芝居は月に三度も四度も義理で行
くので、一つ芝居を二度観ることがあるさうだの、ダイヤ入の指環は最う二つから有れば不用
であるけれど、廉い出物が有つたから又買つたとして示せられたのと、哲也の耳には益體も
ない事ばかりを羨ましさに話し、さうした結構づくめを自慢らしさうに散々聞かされたを口
惜がつた果は、いつも同じ筋に落ちて、どうでも葉村は活才者だの、冬子さんは不器量だけれ

其面影

其面影

ど彼様に可愛がられて仕合せだのと、つい其處に居る誰やらに諷刺がましく娘がいへば母の隠
居も昔を思出して、阿父さんの生きてる頃は家も其には負なかつたと、昔の疵は忘れて華やか
な夢ばかりを反覆し、情けなさうな溜息を思ひも掛けぬ所で嘔と吐かれる。哲也は最う耳に
慣れて、如何なに諷られても、左程にも感じなかつたが、聞けば聞腹とか、餘り愉快でもな
かつたので、食事が済むと衝と起つて茶の間を出た。正可衝と起つたに何の意味のあるのではな
かつたが、母子は夫を席に堪へぬゆゑと誤解したらしく、冷笑して我後影を目送つたと、目で
確と認めた譯ではないけれど、何とやら其様な感じがして、厭な氣持になり、我部屋へ歸るな
り、卒然机の前にドツカリ坐つて、あと、小夜さんは如何して居るだらうと、またしても不知
其人が惚げられて、ヒシと我胸を抱くのであつた。

一七

茶の間では母子鼻を突合せて、人交もせず何やら密々と話してゐた。それが中頃から時々時
子の激した肝癢聲に絡むで、隠居の慰藉るやうな聲も聞えるやうになり、聽て誰が泣くのやら、
鼻汗を吸る音さへ漏れて、其が止むと又密々話になつて、約そ物の二時間ばかりは話聲が絶え
ず聞えてゐたが、其内にスラリと障子が開いて、時子の姿が半分椽に現はれると、「一寸！」と

隠居の聲が呼止める。「え？」と振向いた時子の面の、内から漏れる火影に照されたのを見れば、上氣して、額に肝癢筋を張り、眼に異様の濕みをさへ湛へてゐたが、「皆お前の楫の取方一つだからね、お前も能く其處を考へてね」と又隠居の聲が諭すやうに内からいふのを終尾まで聴かず、「其様な事いつたつて、彼人だつて子供ぢや有るまいし」と碯と障子を締切り慵げな足取で椽傳ひに夫の居間の前まで来て、と中を窺いた。

今しがた届いた郵便を洋燈の下で一心に讀むであつた哲也は、此時偶と無意味な面を揚げて、窺く時子と目を看合せると、急に何とも言へぬ厭な面になつて、大分の長手紙を急いでスルスルと卷納めにかゝる。

それを胡散さうに尻眼に掛けながら、衝と火鉢の側に坐つた時子が、「何處から來たのです？」と尻上りに聞くと、

「國からです」と哲也は蒼蠅さうに彼方を向く。

時子も急に厭な面をしたが、夫でも思返したといふ風に、「お國でも皆様お異りもございませんですか？」

「無事ださうです」と矢張愛想がない。

けれども時子は格別厭な面もせず、大人しく「それが何よりですわ」と鐵瓶を取つて、火を

其 面 形

穿つて見て、「まあ、此様に小さくなるまで」と獨言のやうに言つて、「一寸、憚りさま、其炭斗を。」

黙つて取つて出すのを、受取つて、二つ三つ添炭をして、「お茶でも吸りますか？」と一寸夫の面を見る。

「欲しく有りません」と只其ぎり。

「小夜が居なくつて、嘸御不自由でせうねえ」と又ぢろりと面を見る。

「なあに」と餘處を向いて、堪へられなきやうに面を擧める。

此には時子も流石に佛然としたらしく、久らく其横面を凝然と見据ゑてゐたが、又氣を易へて、「私も些と氣を附けて上ると好いんですけど、何だ彼だと、家は是で小人數でも用が多いもんですからねえ、つい構はないと云つては濟みませんが、手が廻り難るもんですから。」

「なあに、格別用も無いんだから」と夫でも此時ばかりは少し優しく言ふと、

「いえ、用の無い事は有りませんわ、貴方の御用だつて随分有るのは承知してゐますけど、夫でも如何も手が廻り兼ますのでねえ。彼様して福が居たつて、奉公人の事ですから、然う何も角も爲せる譯にも行きませんし、阿母さんは年寄の事て役には立たないし、詰り私一人で裁縫もすりや、臺所へも出るし、買物歩きもすれば、お客が有りや取次に迄出なきやならない始

其 面 態

末ですから見え。それで一日起つたり、居たり醒あぐさして目の眩まはる程忙しい想おもひをしても、後からく用が出て来て、如何しても追付かなくなるんですよ。然うすると、阿母さんが見かたて不つひ覺起つて来るのですけど阿母さんに手傳つて貰や、直ちき肩が凝こつたり、腰が痛くなつたりして、後で揉もむやら擦するやら、反て手数が掛るばかりだから、止して下くださいと云つても、でも見ておられないからつて、如何しても止とまないんですよ。ですから、常いづも晩になると腰が痛くなつて、今も彼方で福ふくに叩たたかせて居るんですけどね、まあ、然ういふ始末なんです。それで阿母さんが然う言ふのですがね、到底とても此様なぢや、お前も身からだ體が耐たまらなからうし、哲也さんだつても不自由でお困りだらうから、一つお願い申して、仲働なり小間使なり、もう一人置いて戴いたらいふのですがね、貴方も御都合の悪い所を、此様な事いふのは、私實に辛いんですよ、それでも實際もう辛抱が仕切れなくなつたから願つて見るのですが、如何でせう、もう一人女中を使はせて戴く譯には参りますまいか？」

と凝然ぢつと夫の様子を窺ふのであつたが、是が自分より朝あさ晏かさく起きて、寢床から烟草の火を呼ぶ、時子の口から出た言葉かと思ふと、哲也は冷笑の唇端しんたんに上るを禁じ得なかつた。

一八

「れえ、貴方」と催促しても、哲也は尙押黙つてゐるので、時子は少し急せき込み氣味になり、「れえ、不い好けませんか？ 私さう無理な事をいつてる積つぢや有りませんがねえ。考へて見て下さいな、今迄小夜の居た時分は、家内うちの事は、阿母おつかさんは別物として、私と小夜さよと福ふくと三人で仕てゐたのでせう？ それが今は二人に成なつたんですもの、三人でした事を二人にするのだから、如何したつて其だけ忙いそしくなる筈はずですわ、ですから、爰で仲働の一人も置いて戴かなきゃ、私到底遣り切れませんわ」と凝然と夫の面を見る。

哲也は始めて口を開いて「では、小夜さんの代りに仲働でも置かうといふ話ですれ？」

「ええ、まあ、然ういつたやうな譯なんですけど……」と少し言葉が曖昧になる。

「そんなら、小夜さんを呼戻したら好いでせう」と故わざと極めて平然としていふと、

「小夜なんぞ……」と時子は一言の下に之を排斥したが、しかし夫の言葉の餘り意表に出たのに狼狽おぼしたのは、掩おほはんとしても掩おほひ得なかつたので、「小夜なんぞ、彼様なダラシのない者を呼戻したつて、何の役に立つもんですか！」と口惜くちやしさうに罵ののしつて見たが、夫でも尙あは憐あまないで、「貴方は御存じないから、其様な事仰有るんですけど、小夜は何ですよ、口ばかり高慢なこと言つたつて、針を持たしたら、單物ひんものだつて碌ろくに縫ぬへやしませんよ……」と、焦い燥くする。

哲也も怫然ひつとして、「裁縫の事は私には分らんが、外の事は私も見て知つてゐる。小夜さんは何

を爲せても深切で、無論奉公人でないから、蔭日向がなくて、世話に成つても心持が好かつた』と故と小夜子を褒めて見たが、大人氣なしと思つたか、氣を易へて、『が、小夜さんは不好といふのなら、夫も仕方がないとして、それで經濟問題は如何なるのです？ 然うしても矢張今迄通で好いのですか？』

『それなんですがね』、と時子の見脈は少し和いで、『然うなると、到底も今迄通ぢや濟みませんわ。ま、一寸計算して見た所でも、爰で裁縫の心得のある——是非さういふのが欲しいのです。が、仲働を雇ふとしますと、給金から、年二度の四季施から、平生だつてチヨイ／＼心附をしなきや成らないし——しますから、幾ら内端に見積つても、月に十五圓や二十圓と、是非餘計に掛らうと思ひますの。』

『餘計に掛るのぢやない、仲働一人の、それは入費なんでせう？ さうでないと、小夜さんは飯を喰はずに居たことになる。』

『いえ、餘計に掛るのです。御飯といつたつて、小夜は食が極く細いのですから、あれは喰べる中には入りませんわ。奉公人は皆大食に極つてますからねえ。ですから、如何しても其だけ餘計に戴かなきやならないのですがね、夫をもう少し餘計に戴きたいの。』

『それを又餘計に？』と哲也が吃驚すると、

其面影

『ええ』と時子は平氣で答へて、『近頃の物價の高くなつたことは——貴方も専門の事だから、能く御存じでせうけど、それは本當に吃驚する程ですわ。去年の春頃は醬油が一樽二圓五十錢したもの、此頃ぢや三圓五十錢から成つてますからねえ。三圓五十錢だと何割になりますか知ら』、と口の中で計算して見たが、一寸分らなかつたので、『何でも大變な騰貴でせう？ 醬油ばかりでなく、萬事が其なんですから、到底も是迄通りぢや遣り切れませんわ。ですから、今度の仲働の給金も何も角もひツくるめて、一切で、これから毎月五十圓宛といひたいのですが、其處は貴方の御都合も有るでせうから、足らない所は如何にか遣繰つて置くとして、四十圓だけ殖やして戴きたいのですが、不好ませんでせうか？』

と左程の事でもないやうに、軽くヒヨイと言つて退けて、兩頬を引込めて吸溜た煙草の烟を、フウと吹いて、澄したものだ。

一九

哲也は黙つて妻の面を視てゐる中に、我にもなく嘔と太息を漏した。で、顔色の險しいには似ず、沈着いた語調で、決然と、『それは、お氣の毒だが、出来ません。私は學問の切賣をしてゐる學校教師です、三人の家族で下女二人使ふ身分ではない、が、まあ、身分は兎に角、使は

度も使はせられないのです。現在の収入が精一杯の所です。」

「さうしますと」と時子は倍と夫の方へ向直つて、「私は如何なるのです？ 何時迄も苦しまなきや成らないのでせうか？」

「さあ、夫は如何いふものか、私にも分らん。」

「分らない？」ト急に険しい目色になつて、「さうで御座いますか。ぢや、私にや到底家の經濟はお引受出来かれますから、今日限りお断り致します。唯今殘金は帳面と引合せてお引渡し致しますから」と身を起しかける。

「ま、一寸お待ち、それは引受けられんといふものなら、無理にともいふまいが、而してお前さんは如何する積りです？」

「私ですか？ 私は此家で生れた者で何處へ参り様もございませぬから、矢張り……臺所の隅へでも置いて戴きます……」と聲が慄へたが、眼を瞬いたのみで、泪は見せなかつた。

「それでは最う一切家事には關係せんといふのですね？」

「はい。私の様な馬鹿には、到底主婦の役は勤まりかれますから。」

哲也は手を拱いて凝然と目を瞑つた儘、久らく考へてゐたが、聽て目を睜くと、眼中に如何にも情なげな色を浮べてゐた。深い太息を吐くと共に、拱いた手を解いて、

影 面 其

影 面 其

「時さん？ お前さんは實に情ない心に成つたねえ。私には能く分つてゐる。其様な難題を出して人を困らせるのは、かうも言つたら、私が苦しがつて一文でも餘計収入を得やうと、焦燥り出すだらうと、思ふからだらう？ 今迄度々私に迫つても私の収入が依然として増さないのは、私の熱心が足らんからだ、お前さんは平生から誤解してゐる。それで今度は手を易へて、四十圓と切出して、責て其半分なりと殖やさせやうといふ腹なのだらう？ その動機も分つてゐる、今日葉村へ行つて散々贅澤な所を誇示かされた口惜紛れに違ひないが、それぢや恰で私を牛馬と同一に視るのぢやないか、私を鞭撻して、身體の續く限り働かせて、出来るだけ金を絞り取らうとするのぢやないか？ それも何の爲かといへば、高が美服を着たいとか、指環を買ひたいとかいふ、卑下な虚榮心を満足させ度ためばかりなんだらう？ 其で何處に夫婦の同情が有ります？ 私は今逆境に居るのだから、口へこそ出して喋々と言ひはしないが、心には相應に煩悶してゐるのです。假にも夫婦の同情が有るなら、慰めて呉れん迄も責めて餘計な苦痛を與へまい位は思つて呉れべきぢやないか。夫をお前さんは既に苦しむである私を彌が上に苦しめても、自分だけは樂を仕やうとするのだ。情ない根性ぢやないか？ 私はお前さんの阿父さんには大恩がある、高等學校の中途からお世話になつて、大學を終ることの出来たのも、全く阿父さんのお蔭だ、阿父さんが私に金を掛けて下さつたのは、死後にお前さん方を託さう

といふお考へが有つたからだ、私は夫を思ふから、謂はゞ寄託の義理を思つて、今日迄随分辛い事が有つても我慢して来たのだけれども、今夜のやうな難題を言はれて責られちゃ……」

「何時私が責りました？」

「まあ、お聴き……それぢや私は最う辛抱が出来られる、から、此上は別れるやうにして別れる外はない……トサ言はなきやならん所だけれども……」

「ええ、分りました、貴方のお心は夫で能く分りました」と聲が逆上る。

「まあ、後をお聴き……」

「いとえ、もも其で能く分りました」と最う夫の言ふ事は耳に入らず、唇まで眞蒼にして、「大方此様な事に成るだらうと、私はもう疾から察してゐました。それは、どうせ、こんな不束な者ですから、お氣に入らないのは仕様が有りませんけれど、現在の妹に見代られたかと思ふと、私は……ク、口惜しいイ……」と齒を喰緊つて不意に泣き出した。

二〇

哲也は呆れて、「何を云ふのです？ 小夜さんに些とも關係した事はない。小夜さんは……」

「いとえ」と時子は襦袢の袖で目を拭き敢へず、「それは幾ら何と仰有つたつて不好ません。私

ちやんと知つてますから。私と縁を切つて小夜と一所にならうと思つて……」

と又はらくと涙を濺して、泣聲を慄はせながら「それで其様な愛想盡しを仰有るに違ひありません……」

「誤解にも程がある。私は何も其様な……」

「いとえ、何と仰有つたつて、其に違ひありません。小夜が歸つて來ない中は、貴方は其様な邪慳な方ぢやなかつたけど、彼女が歸つて來てからは、貴方の御様子すつかりが全然變つて了つて、小夜ばかり大騒ぎやつて、私なんぞにや最う用が無いと言はないばかりに……」ヒイと泣聲を立て、「人が側へ來て物を言や……蒼蠅さうに餘處を向いて了つて……」ト又秋歎けて、「優しい言葉は只の一度だつて掛けちや下さらないんだもの……」

と暫く中絶れたが、稍泣止むと、

「辛と澁谷さんへ行つて、先づ安心だと思や、其からは、貴方は始終被女の事ばかり懐つて、鬱いで居らしつて、一寸私が側へ來りや、もう厭かほな面を成さるんだもの。其様なに厭がられる所で、お蒼蠅からうとは思つたけど、家事上の事だから、打棄つても置けないで、御相談をかけりや、もう直ぐ其様な愛想盡しをいつて……」と聲が慄へたが、今になつて考へて見ると、小夜が素直に澁谷さんへ行つたのを變だと思つたけど、皆貴方と共謀になつて爲した事だわ、

さうして別々に家を出て、何處かで密り家を持つ手筈に違ひないわ……えと欺されたのが、口惜しいッ……」

「實に呆れて物が言ん。何處まで誤解してゐるのか分らん。其様な誤解して罪もない小夜さんを怨むなら、今迄言ふまいと思つて居た事だけど、言つて了はう。小夜さんはね……小夜さんが澁谷へ行つたのはね、お前さんが餘り癖んで焦慮するので、それでお前さんに安心させる爲に行つたのですよ。だから、行く前日泣いて私に頼んで行つた」と又しても其人の可傷しかつた後姿を想浮べて、同情の涙に目を潤ませつゝ「私の事は心配せずに、姉さんを愛して呉れと、泣いて頼んで行つたのだ……」

「畜生め！……」と時子は涙の面を振上げて絶叫して「其様な憐れッばいことを言つて、貴方を迷はして、何處迄も自分一人善い子の風を仕様と思やがッて……先方が其氣なら、もう此方だつて姉妹も何も有りやしない。今度歸つて來たら、彼奴を殺して私も死んで了ふから……」と泣きながら叫き立てる聲が、其を誤解と言解かんとする哲也の聲と絡み合つて、何を言ふのか互の耳に聞取れぬ程騒がしくなつた時、忽ち障子が颯と開いて、心配さうな面をした隠居が、衝と中へ入つて來て、

影 面 其

「まあ、哲也さんも時さんも如何したといふんですよ、其様に大きな聲を出してからに。見つ

影 面 其

ともないぢやないかれ。」

と言ひながら其處に坐る。

と見ると、時子は「阿母さん？ 私到頭小夜に旦那様を取られたつ了ひました」と母の面を見て急に悲しくなつたやうに、わつと四邊憚らぬ泣聲を立て、其處へがばと泣伏した。

哲也は狼狽して「誤解です、全く誤解です。もう此通り逆上て了つて、何を言つても分らないのだから仕方がない。」

「ま、何ですか事の起因は私にや解りませんが」と隠居もおろ／＼聲で「餘り騒々しいから來て見ると、分れるの分れないのといふお話だから、是は滅多に中へ入れないと思つて、控へてゐる中に、お話の模様も段々分りましたがね、哲也さん……」と凝然と面を視て「今貴方に棄られたら、私共母子は乞食になります……」と泣聲になつて、

「此女が此様な我儘者だから、定めしお氣に入らない事だらけでせうけど、何卒……」ト精一杯の力を入れて「此婆々に免じて、勘辨して遣つて下さいまし……」

時子が勃然面を揚げて「阿母さん、もう其様なこと言つて、到底も無益ですよ、小夜に全然欺かされて居らッしやるんだから……」

「まあ、お前は黙つてお居で！」と女を制して「ねえ、哲也さん、もう貴方は立派に學者で世

間が渡られるンだから、此様な婆々や娘に用は無いでござんせうけど、末を樂みになけ無しのお金を皆注ぎ込んで了つた貴方に今になつて棄られちゃ……私共は乞食になります……何卒、お腹も立ちませうが、母子を助けると思つて、勘辨して遣つて下さいまし。此通りでございます』と稍禿げかけて地の見え透く、切髪の頭をペタリと疊に摺付けて、泣き聲を慄はせながら、『何卒御勘辨を……』

哲也は手を拱いて凝然と目を閉ぢた儘、默然としてゐた。言ふべき言葉を見出し得なかつたのである。

二二

夫婦間の衝突は隠居の厭味だらゝの仲裁で収まるともなく収まつて、哲也は毎朝苦しい面をして相變らず學校へ行く。けれども、収まるべくして収まつたのではないから、衝突の痕を自ら家族間の關係に留めて、其よりして母子の哲也に對ふ態度は、一は一層惡感になり、一は稍謹慎になつて妄に鋒銛を露さぬ代り、始終不吉な面を彫らして、動もすれば二人して茶の間に閉籠り、又は隠居所に隠れ、額を鳩めて密談に時を移し、時としては潜々泣いてゐることさへある。

其面影

衝突の後には常も斯うで、今度は只少し甚だしいといふばかり、格別珍らしい譯ではないが、哲也にしては是程不愉快な事はない。それにつけても、あく、養子になんぞ爲るのではなかつたと、又しても其を後悔するのであつた。

が、養子に來た昔を想へば、無論止むを得ぬ事情もあつた。静岡の實家には現に半身不隨の老を泣く父があり、此手数の掛る父を抱へて貧に苦しめられつゝ、身世の拙きを歎ずる兄もあるが、哲也はまだ實家が今日ほど零落せぬ頃、兄が虚弱で家督を弟に譲りたい願があつたので、其盡力で少し無理な所を都合して一高へ入學させられたのであつた。であるから、成業の後には父を引取つて、兄に代つて見事孝養を盡す筈であつたが、入學後一年餘にして、餘儀ない事情があつて、學資の仕送りが弗り絶えた。一月二月は無理も叶つたが、もう絶體絶命といふ時、偶と或人に養子に行かぬかと言はれて、一旦は大に迷つたが、此處で否と頭振を振れば、退學して故郷へ引込まればならぬ、それも残念といふのが一つ、今一つは、其頃は未だ世味の辛きを知つてゐるやうで、實は知らなかつたから、なに、大學さへ卒業して了へば、實家へ少し位づきは貢げぬことも有るまいと淺墓にも高を括つたので、二の足を踏む父や兄を強ひて納得させて、無二無三に養子に來て了つたのが即ち此小野家、勿論其時の約束は大學卒業迄の學資を出せ、出さうといふのであつた。

大學を卒業する迄は何事もなかつたが、卒業して愈職業を求める段になつて、徐々破綻が見え出した。といふのは、小野家は舅の禮造が贅澤家で、世盛の頃は可なり華美に暮してゐたから、餘處目には一寸資産が有りさうに見えたが、實は餘り有るのではなかつた。其故哲也に金を掛けたのも、娘の將來の爲ばかりではなく、少し皮肉にいふと、公債で持つてゐるよりは此方がといふ勘定づくも有つたので、哲也が卒業するや否や、待構へてゐたやうに、一日も早く一文でも多く取つて貰ひたいと、姑が言ひ出した。尤も其頃は養父は既に世を去り、小夜子は嫁いてゐたから、家族といつても姑と妻と二人切りで、若し是が普通の人達であつたら、之を脊負つて立つに哲也も左程の困難を感じなかつたらうが、不幸にして母子揃ひも揃つて大の虚飾家で、詰らぬ處で外見を張りたがるので、月々の經費が存外嵩張る。因で自分の希望ではなかつたが、家計上の都合で止むを得ぬ、といふばかりでなく、實は、極く秘密の話だが、大學を卒業したら直に高等官何等かの官員様の御隠居様でチンと澄してゐられるやうに、幾ら論しても自分一人極に極めて、少しは養子自慢であつた舊式の養母に、餘り失望させたくないといふ、一寸人には知らせたくない卑陋な考へもあつて、割の好といつても報酬は高が知れたものなれど、比較的時間に餘裕が有るのが目的で、之を利用すれば如何にかなると、不知學校へ足を踏入れて了つた。固より一生學校なんぞに埋れて了ふ了簡はなく、其内に機會を捉へて實業

其面影

其面影

界へ躍り出で、あはれ平生の抱負をと、只管望みを將來に屬してゐたのであつたが、倍愈教師に爲つて見ると、最初はかつ／＼家計を維持するに足りた報酬が段々足りなくなる。因で止むを得ず掛持の學校を一枚だけ持つて見た。持つて見ると、成程當座は少し樂になつたが、それもほんの僅の間で、間もなく又不足を感じ出したから、止むを得ず又一つ掛持を殖やすと、結果は矢張同じ事で、殖やした當座が少し樂なばかり、三月と経たぬ中に又元の木阿彌となる。かうして毎月生計に迫られるから、實家から時々窮乏を訴へて来るけれど、却々實家へ貢ぐ處の騒ぎではない。

其も好いとして、斯う生活に苦しむばかりでは、何一つ思ふ事が出来ぬ。前途は闇黒で、一點の光明も認められぬ。是といふも養家の贅澤な習慣の祟りで、浪費が多いからだと思ふと、どうやら母子の虚榮心を満足させる爲に養子に雇はれて來てゐるやうな氣がして不愉快でならぬから、折に觸れては言ひ好いので不知妻に向つて不平を漏らすと、負氣の時子が黙つて之を聞いてゐる筈がなく、直ぐ収入が少な過るのだと竹籠を返す。これが家庭不和の第一原因で、此外に第二原因、第三原因とも見るべき事情はまだ／＼澤山ある。

其面影

哲也は母子の仕打に始終不平が絶えぬが一方の相手の方にも其はある。縁組の當時人を以て聞かされたら、学校の成績は先づ優等の方であつたから、其なら好からうで莫大の金を掛けたのであるけれど、其優等生殿社會へ出て見ると、れッから優等でない。同期の卒業生で、而も哲也よりも成績の悪かつた者が、皆今は相當の地位に有付いて、中には參事官もあれば、公使官何等かの書記官もあれば、銀行の取締役もあれば、會社の支配人もある。誰を見ても哲也よりはガツと立派に成つてゐる。葉村さんにしても、學校は違ふけれど、家に居なすつた時は、紡績緋の衣服に、よれよれの小倉の袴で、後齒の減つたペタンコの下駄を穿いて、餘り見ツとも好い方でもなかつたが、今では彼通り金光りに光つて、何處へ行くにも立派なお俵で、ついで誰やらのやうに、吝嗇らしく踵の減つた古靴で、テクテク歩きなんぞで行きなざる所を見たことがない。同じ人間でも活才が有ると無いとで此程違ふ、家でも彼様な人を貰つてゐたら、今頃は芝居は観たい放題、衣物も着たい放題、嘸ぞ好かつたらうにれえと、母子鼻を突合せて雨夜の品定めをやつた後で、豈なら一週間も前に刺つた、色光澤の悪い薄汚ない、うツそりとした婚殿の面を見ると、堪まらなく厭になる。因で隠居は何か思ふ様にならぬ事でもあれば、直ぐ昔を憶出して、あく、家も阿父さんの生きてなざる頃は斯うではなかつた、下女は始終三人は使つた、自動車もあつた、車夫も居たと、執拗く昔の夢を語つて、溜息迄吐て聞かされると、時子

其面影

も餘りどツとせぬ我夫の事ながら、何とやら自分が叱られるやうで甚く心持が悪いから、つい、何とか言つて阿母さんを遣込める。すると阿母さんも黙つては居ず、母子喧嘩に花が咲いて半日物を言はなかつた擧句に、哲也がノツソリ學校からでも歸つて來れば、時子はもう黙つては居られぬ。今阿母さんが此々でと、詳細に母の言つたことを取次いで訴ける、取次で聞く話でも、聞けば無念にも残念にもなつて、哲也は心中では姑を呪詛することもあるけれど、例の氣性ゆゑ、口へ出しては何とも言はず、厭アな面をして只ニヤリとするばかり。時子が母の話を取次ぐ趣意は、之を聞せたら何ぼ迂濶の夫でも、少しは憤慨しやう、然うしたら一生懸命にお金を儲ける氣にもならうと、多少は激勵の意味もなきにしもあらずであるのに、黙つてニヤリとばかりでは餘り呆氣ない。かう遅鈍だから何時迄も發展が出來ぬのだと、自分一人焦慮するのが口惜しくなつて、是に於て阿母さんの不足を取次いだ好意が忽ち變じて惡意にもならぬが、憤慨位にはなつて、今度は自分の不足をつい持出す氣にもなる。姑の不足は黙つて聞いてゐた哲也も、妻の不足になると、もう然う遠慮はしてゐずに、重い口ながら、講義で慣れてゐるから、相應に廻して、道理らしく、其不足の謂れなき所以を説く。理窟では到底も敵はなくなる、口惜しくなつて不知皮肉を云ふ、皮肉で言返すと、爰でまた小衝突が起る。

常も此様な順序で夫婦間に小衝突が絶えぬのであるが、何方も曾て最後まで取詰めたことの

無いのは、雙方とも分れる氣はないからで。哲也にすれば、公債代りに貰はれた身と思へば、左程大恩を受けたとも思へぬけれど、隠居の言ふ通り、今棄てたら母子は路頭に迷ふ、厄介な人達ではあるけれど、正可其様な目にも合はせたくない、といふと、何とやら慈悲らしく聞えやうが、慈悲でも何でもなく、只氣が弱くて其様な酷たらしい事が出来ぬといふ點が有るし、時子にすれば、此様な亭主をへい／＼と崇め奉るのは馬鹿らしく出て出来ぬけれど、去迎棄られては大變といふ弱味がある。それで常も小競合のみで、大衝突は双方で避ける氣味があるのであるが、今度のは全く事情が別で、小夜子から起つてゐるから、平生の傳で三日経つてから曖昧に仲直りをして了解にも行かぬ。

熱々哲也も厭になつて了つて、今度といふ今度こそは稍眞面目に離縁問題を考出した。が、此問題を解決するには、是非とも金が要るけれど、其金の工面が容易に出来ぬ。あく何の因果で此様な想をすることかと、熱々我運の拙きことが傳なまれて、それで厭な面をして家を出ては、又厭な面をして歸つて來るのであるが、衝突があつてから一週間ばかりの後、或晩掛持で晩くなつて九時過に歸つて來ると、茶の間で隠居が盛に喋舌つてゐた聲が噤と止んで、洋燈を片手に出迎へた人をヒョイと見ると、

「ヤッ！ 小夜さんぢやないか？……」

影 面 其

と十年も逢はなかつたやうに、懐かしさうな聲が不知筒脱けて了つた。

二三

哲也が急いで不斷着に着易へて茶の間へ來て見ると、時子は如何したのか姿が見えず、隠居ばかりが氣難かしい面をして、黙つて火鉢へ炭を添加してゐる側に、小夜子が悄然と頸垂れて、慎まし氣に控へてゐる。

洋燈の影で能く見えぬけれど、家に居た頃とは見違へる程の服装で、不斷着らしい秩父銘仙の黄縞の袴の上に、夜ゆゑと之ばかりを着易へて來たのか、場違ひながらも黄八丈の羽織を着て、其紐のリボンの水色なるも鮮かに、微見ゆる襦袢の襟の白モスリンは、差俯向いた領元と白きを競ふにも似もやらずして、庇髪も根も緩く亂れたのはハイカラ振と見ても置け、心得ぬは三枚櫛が一枚缺けて二枚になつてゐる。それは哲也の目には入らずとも、左の小指を縋帶して、顔の色さへ常でないのは、仔細が有らうと、火鉢の側へ坐るなり、隠居への挨拶は匆々に、

「如何したのです、今頃？」

と哲也が先不審の眉を擧めると、

小夜子は一寸居直つたのみで、面さへ擧得ずして又萎れる。

影 面 其

「如何したのです？」

と哲也が今度は心配さうに隠居の面を見ると、例のニヤリとして、

「何だか此人の言ふ事は能く分りませんがね、彼方の旦那様が御酒に喰酔ひか、如何かなすつて、此様な者でも、若いもんですから、此女を捉まへて、何だか戯言でも仰有つたんでござんせうよ。それを此方が悪堅いもんだから、もう直ぐ本氣にしてからに、大騒ぎやつて逃出して来たんださうですがね、餘り何だか仰山らしくつて、却て先様へお氣の毒でならないから、是から直ぐお歸りつて、今も然う言つてるんですけど、何だか此女が溢つてるもんですから……」

と鼻めて齒牙の間に置くにも足らぬ一瑣事のやうに言做すのであるが、哲也の胸にはヒシと應へる所があつて、

「さうですか。や、其様な事が無ければ好いがと、實は心配して居つたのですが……しかし、只戯言を言つたばかりですか？」

と此「只」に力を入れて、氣遣はしさうに小夜子を顧へると、

「口ばかりで仰有のなら何ですけど……」と辛うじて聴取れる程の小聲で幽かに言つて、一寸身動をした。

「ぢや、手込にでも……」と哲也は倏然とすると、最う前後を忘れて血相まで變へた。

影 面 其

影 面 其

小夜子は颯と耳元まで赧くなつて、一層低く俯向いて了つて、何とも言ひ得ぬ。

「然うなんですか？」と哲也は最う堪まらなくなつて、外見も見識もなく、衝と振返つて、今朝迄は敵のやうに思つて居た隠居の面を、宛も救ひを求むるが如き面色して凝然と視たところは、一期の浮沈が此返答一つに繋つてごもぬさう。

先刻から哲也の様子を、見ぬ振をしてチヨイ／＼見てゐた隠居は、此時又例のニヤリとして、

「なに、其様に大した事でもないんでせうよ。此女の話は何だか大業でしてねえ。」

「大業だか、大業でないんだか、もう少し詳しく話して下さらんぢや、私にや判断が付きませんからなあ……」と哲也の心中の苦悶は顯然と面に現はれて、見るも笑止らしい程であつた。

「ぢや、此女にはお話が出来かねませうから、私が代つて何しますかね……」

と散々焦らして置いて、漸く隠居が成るべく控へ目に／＼と取繕つて、取次いだ話の要領は、

二四

小夜が始めてお目見えをした時は、澁谷の旦那様は随分傲然に構へてゐて、碌に頭も垂げなかつた程で、萬事の取扱振りは奉公人格であつたが、其晩旦那様のお召しといふので、お奥へ

其面影

上ると、奥様が肺で大磯の別荘へ出養生のお留守中は帳場の人さへ且那樣よりは此人を烟たく思ふといふ、准奥様のお濱さんといふのがお側に附添つてゐて、種々お話があつた。其時身の上を改めてお尋ねがあつたので、荒増を申上げると、殊の外御不便がり遊ばして、それからはお取扱迄が違つて了ひ、其迄部屋も碌に定まつてゐなかつたのが、急に別に下さることになつて、萬事お奥並といふでもなかつたが、准客分位になつて、何も出来もせぬ身を顧みて誠に痛み入つてゐると、其翌晩もお付き申すお嬢様方が御寝なると、またお奥でお召し。上ると、昨晚の通りお濱さんもお側で、また結構なお茶を下すつたり、お菓子を下すつたりして、お嬢様はお二方とも皆お濱さんのお腹なので、彼方からも呉々もお頼みがあつて、美しい絹半巾やらリボンやらを下すつて、其後で達ての御所望で、恥かしながらヴァイオリンの拙い調べを一曲お聴に入れて、お暇を戴いて部屋へ下つてから、熟々考へて見ると、新聞屋ほど嘔吐きはしない。あられもないお噂を立て、澤山御迷惑をお掛け申したさうなが、来て見れば、且那樣は彼通り御信切で好いお方なら、お濱さんにしても、少しお品が悪いが、矢張悪い方ではないらしく、お大切なお嬢様方をお託し遊ばしたからでは有らうが、お二方共大層好くして下すつて有難い事だと、結構なお邸へ参り合せた幸福を、小夜は氣の知れぬ耶穌の信者だから、天に在ます我父よとか、何とか、妙なことを言つてお禮を申して、其晩は穩かな夢を結んだ。で、其からは毎晩お嬢様

其面影

方が御寝なると、お奥へ喚ばれるのが例となつて、大分お馴染が重なつたから、もうお奥も左程居心の悪くなくなつた五日目の晩に、例の通りお召しで、伺つて見ると、其時はお濱さんの姿が見えず、且那樣お一人で御酒を召上つて居らしたつたので、是はと思つて躊躇ふと、透かさず且那樣が、今日は濱が留守で淋しいで、失禮ぢやが、先生にお間をお頼みせうと思つてお喚び申したのぢや、さあ、直と此方へと仰有る。私は不調法でと辭退はして見たけれど、争な事お聴入がなく、なに、酒は飲つても飲らいでも、お話だけで結構ぢや、まあ、老人を慰めると思つてと、達て御意あるに逃げもされず、據どころなくお座敷へ躡り入ると、小夜にもお膳が出る。夫から種々お話があつて、御酒もお勧め遊ばしたけれど、夫だけは達て御辭退申して、辛と免れて、お話だけのお相手とはいつても、小夜の事なら大方黙つて先様のお話をばかり伺つてゐたのであらうが、夫でも餘り手持無沙汰であつたので、お附の女中が御用で起つた後で、不知お銚子を取つてお酌をしたのが、小夜は失策といふけれど、何の、其は尋然の事。すると、其からはお酌は憚りだが先生に願うで、お前は彼方へ退つとれと、女中を遠ざけられて、急に大層打解けて、御酒の上のお座興であらう、先生は何歳ぢやつたの、其様なに若うては死去なつたお配偶が時々は戀しう成らうの、嫁に世話せうかのと、酔へば殿方は誰方でも仰有る御戲言を、此方が初心なので、聞く毎に赧顔になる。それを可笑しいと思召して、尙も調戲つて見

る氣にお成り遊ばしたのやら、如何やら、其處は判然分らぬけれど、先生の指は細うて白うて白魚のやうぢやに、其指に指環が無うては可笑しうない、私が一つ進ぜやうと仰有つて、御自身に起つてお手箆の中から、結構な金の指環を出して、どれ、私が嵌めて上げうでと、側へ寄つて手をお執りなすつたとやら、執らうと爲すつたとやら。それとても、お戯でも何でもなく、お心易立に眞に指環を嵌めて下さるお積りであつたかも知れぬものを、其を此方は六十近い老人でも、男が側へ寄りさへすれば、最う屹度如何かされるやうに思つて、前後の辨へもなく、卒然、お氣の毒な、且那樣を突退けて、部屋へ逃歸つて、もう夫からは何度女中を以てお召しになつても、如何しても行かなかつたといふ。

二五

先様は露淫らしいお心はなく、只お心易だてに爲すつたのか、さなくばホンの一時のお戯れであつたかも知れぬものを、小夜が悪堅くて飛だ恥をお搔かせ申したのに、且那樣は飽迄も心廣くて格別御立腹の御様子もなく、其翌晩もまたお召し、それを失禮な、假病を使つて伺はずに居ると、御深切にお濱さんのお見舞で、寝てゐもせぬのを御覽なすつて、其なら奥も同じ事ではないか、今日は貴女に褒げたい物があるのだから是非にと勧められて、勿體ない、不承

其面影

其面影

不承に跟に隨てお奥へ伺ふと、成程種々の御馳走が出て、且那樣も殊の外の御機嫌、お濱さんの前をお憚なすつてか、さう公然のお戯れはなかつたけれど、それでもチョイ／＼目を偷むでは妙な目色や面色を爲すつた、といふのも、餘り小夜が初心なので、故と然うしてお調戲なすつたのかも知れぬ。夫から後も小夜の面さへ御覽なされば、面白がつて其様な目色や面色をなさるので、小夜の胸の狭さ、熱々厭であつたけれど、辛抱して勤めてゐると、今日の夕方、西洋人のお客が有つた。久らくすると、お使いで、通辯を頼みたいから、表の西洋館の應接へ来て呉れといふこと。あら、通辯はお客様が連れて入らしつたといふにと少しは不審に思つたけれど、一寸した事なら豫て命ぜられてゐる御用の一つではあり、お断りもならず、複雑つたお話でなければ好いがと、女氣は先づ其を心配しながら、羽織だけを着替へて、恐る／＼お指圖の所へ伺ふと、煌びやかに飾立てた西洋間は、幾つかの電燈に華やかに照されて、成程一方のテーブルの上に珈琲茶碗の虚が二つ三つ並べてあつて、椅子も二三脚其側へ引寄せられてはあるけれど、且那樣がお一人長椅子に横になつて居らツしやるばかりで、お客様らしい人の影も見えぬ。不審に思つて躊躇ふと、且那樣もお人が悪い、故と眞顔で、お客は今一寸便所へ行かれたで、まあ此方へ這入つて待つて居ると仰有る。成程と合點が行つて、それならば丁度辛ひ、此暇に複雑つたお話ならお断り申上やうと、先御免を蒙つて中へ這入ると、且那樣が衝と起つて、

今閉めたばかりの戸の側へ寄つて、彼方向に何か爲さると、カチリといった。カチリといったつて、何がカチリといったのか分りもせぬものを、小夜は早合點にも、あ、錠をお卸しなすつたと思ふ途端に、クルリと此方をお向きになつた且那樣のお面を向上げると、何とも言へぬ薄氣味の悪い笑顔をして居らしたので、それで何も角も全然分つて、總身の毛が一時は彌整つたと、此處いらは餘り大業でお話にならぬ。で、且那樣は莞爾しながら段々側へ寄つて入らつしやるから、衝と飛退いて椅子を小楯に、何を遊ばすと、信と見据ゑると、何もしやせんがなと、矢張莞爾しながら、徐りくと側へ寄つて入らつしやる。夫から久らく椅子やテーブルの間を彼方へ逃げ、此方へ逃げしてゐる中に、到頭お座敷の隅に追詰められて、もう逃場がなく、身を縮めて何卒御免遊ばしてと言つたが、お聴入なさりさうにもなく、あはや大手を擴げて抱付きさうになすつたから、もう絶體絶命の場合、一生懸命になつて突飛すと、よろくと踰縁けて、其處の安樂椅子に尻餅を搗き、妙な面相をなさる其隙に、椅子に蹴躓きつ、テーブルに衝當りつ、辛と反對の窓際へ驅寄つて、帷の此方より、最う是迄とドンと突けば、玻璃戸は壊れもせずして、左右へパツと開いた。嬉しやと窓へ這ひ上る後に、失敗うたといふお聲がして、追蒐けて入らつしやる氣色なので、夢中になつて飛降ると、幸ひ下の應接で窓が低かつたので、大した怪我はなかつたけれど、其でも顛んで石塊で小指に彼様に怪我をしたといふ。其は其時

影 面 其

影 面 其

には氣が附かず、窓から且那樣が首を出してまだ何だか仰有つたのも耳に入らず、驅出して西洋館を一巡りして我部屋へ逃歸らうとしてヒョイと見ると、其處の車寄の處に、何時の間にか且那樣が立つてゐらしつて、窓を漏れる電燈の光に、小夜の立止つた姿をト透して御覽になると、串戯ぢやく、もう何もせんで此方へお出でとか仰有つた、其お聲を聞くと、何がなしに怖ろしくなつて、引返して表門から往來へ出て、折節通り掛つた俵を前後の考へもなく呼止め、賃錢も極めずに乗つて來たので、馬鹿々々しい、紀尾井町から此處まで三十五錢取られたと云ふ。

二六

隠居は小夜子の話を取次ぐに、故意にか偶然にか、往々肝腎の處を脱かしたり間違へたりしたが、それでは且那樣ばかり道理に成つて了ふので、小夜子が辛がりながらも一生懸命になつて、傍から補つたり訂正したりする。それで話が屢紛糾て分らなくなることもあつたのを、其を哲也が腹の中で解しく、條理を立て、組立てた所は先づ略と右の通り。

隠居は一通り話が済むと、

『といふ譯なんですがね、それは今晚なんぞは且那樣の御串戯も些と御念が入り過ぎた所も有るでせうけど、だつて先様ばかり悪いのぢや有りませんか。小夜にも落度が有ります、え

と、有りますともさ。何故ツてツて御覽なさい、此前の時でも今夜だつても、此女は一度も聲を立てなかつたといふぢや有りませんか。ほら、御覽なさいな、聲も立たないで、眞紅な面をして逃げてばかり居るンぢや、先様だつて誤解を爲さる筈ですわね。それも然うだが、何も十四や十五の小娘ぢや有るまいし、調戯れたつて逃出して来るにや當らないぢや有りませんか。どうせ女といふ者は、若い中は人中へ出りや、如何な者でも、些とや少と男に構はれない者はないんだから、可怪しな目色をされたツてツちや、歸つて來、春中を叩かれたツてツちや、歸つて來いしたら、到底も今時奉公なんぞにや出られやしません。だから、此女にも然ういふのですのさ、且那樣がお構ひなすたら好加減に柳に受て、先様にも恥を搔かせないやうに、自分も亦詰らない目に逢はないやうに、好加減に綾なして行かないやならないと、ね、其處が女の弱い所で、女は又弱いので持つンだから、辛からうが辛抱して、もう一度澁谷さんへ……」

「ですが」と哲也は例になく毅然となつて、「それは尋常の下女奉公か何かの場合でせう。小夜さんは下女奉公に行つたのぢや有りませんか。苟にも家庭教師と名の付く者に向つて、串戯にしろ、其様に淫がはしいことを言つたり爲たりするのは無禮でせう」と憤激の極、殆ど自ら制する力を失つて、「もう然ういふことを聞いた以上は、假令小夜さんが歸りたいと言つても、私が同意出来ません」と決然言つて、信と隠居を見据ゑる。

隠居も颯と面色を變へて、「然うですか、そんなら如何なと貴方のお意任せに成すつて下さい。私は又時が彼様に焦慮して狂人のやうに成つて居る所ですから……小夜だつても然うです、此女の面を見ると、プイと起つて奥へ行つたつきり、もう何と出ても出ない程なんですから、そんな所で此女が歸つて來たら、又何だ角だと蒼蠅い事ばかりで、此女も辛からうし、私も中へ入つて困らなきやならず、それも厭だし、それに澁谷さんの方だつて、能く聞いて見りや、其様なに何も辛抱の出來ないといふ程の事でもないと思つたもんですから、それで、まあ、今夜の處は一旦歸つて、而して篤りと考へて見て、其でも矢張り辛抱が出來ないやうだつたら、然うしたら兄さんとも御相談して、何處か好い口を探して戴いて、奉公換したら好からうツて、然う言つてゐたのですから、貴方が如何あつても歸せないと思つたら、其迄の事さ。如何なと貴方のお意任せに。」

とぼんと肝癢紛れに火鉢の縁で痛く烟管を敲く。

哲也は稍顔色を和げて、「さうですか。其は成程仰有る所もありますが、しかし外の事とは違つて、女の操を汚される危険が有るのですからなあ。其様な處へ、幾ら時さんが不服だからツて、小夜さんに歸れとは私には言ふに忍びない。小夜さんに其様な厭な想ひをさせちや、死去られた阿父さんに對して私が濟みません。」

と何心なく言ふ哲也の面を、隠居は急に険しい目になつて、信と睨付けて、

『さうすると、私は區別わいべつをしてゐますかねえ。私の氣ぢや、小夜は生なきない中だからと義理張つて、小夜の爲ばかりを言つちや、それぢや反つて區別わいべつがあつて水臭い。私の目から見りや、何方どっちも同じ事なんだから、それで雙方の爲を思つて……』

『や、悪うございました。私の言様が悪かつたから、妙に聞えたかも知れませんが、私は只多少時まさんの感情を害しても、此場合小夜さんを歸すに忍びないといふので。』

隠居は黙つて了つたが、聽て溜息をして、

『ま、如何なと貴方の好いやうに爲すつて下さいまし、どうせ私なんぞが何と思つたからつて、追付くんぢやないんだから。』

『そんなら、然う爲せて戴きます』と哲也にも似ず思切り好く、決然きつぱり言つて、小夜子を顧みて、『ぢや、もう貴方は歸るにや及ばん。此儘内にお出でなさい。』

『は』と小夜子は両手を突き、『どうも兄さんには種々御心配ばかり掛けまして』と衝と平伏ひれふして、『濟みません……』といふも泣聲で、最う面かほを擧げ得ない。

『なあに、濟むも濟まんもないが』と哲也も凝然と小夜子の様子を見て、『貴女も嘸ぞ厭だつたらうねえ』と目を瞬しほたくく。

隠居が衝と起つて茶の間を出たが、便所はせうへでも行つたのであらう。

二七

昨夜ゆうべの今朝けさ學校へ行くと、葉村から電話で、晩に行く、待つて居て呉れと云ふこと。用は聞かれど、孰れ其事でと心得て、少し早めに歸つて待つてゐると、七時頃果して葉村は來たが、來ると其儘隠居所へ喚び込まれて、小一時間も經つてから、辛ちやうと放免といふ形で、哲也の居間へ來ると、其處に設けの座布團に坐るなり、もう遠慮のない大聲を揚げて、

『や、聞かされたく、散々ばら聞かされちやつた。何しても兩雄舌を揃へて愚痴うぢるんだから堪られえ。しかし、君も其様な眞面目腐くつた面つらをしてゐて』と今更らしくぢろく哲也の面を見て、『却々隅なかくツ子に置けれえ男だね。全然すつかり聞いちやつたぞ。』

『何を？』とまづ聞いてみた。

『何を無えもんだ！』と突然いきなり猿臂を伸べてボンと一つ哲也の膝を叩いて、『お恍惚なさんなよ——今更未練らしく。』

『小夜の事か』と哲也は眉を擧めて、『君だから好いやうなものゝ、實に困つた人達だ。全で邪推で固まつてんだからなあ。』

『とお出でなすつたれ』と従頭茶にして、『併し時さんは口から火焰を吐くといふ凄じい勢だ。ありや何だぜ、半日一所に置いたら小夜さんは咬殺されツ了ふぜ。え、おい、色男如何する積だいッ』

哲也は又眉を顰て、『戯言にも其様な人聽の悪いことを言ふのは止して呉れ玉へ。小夜は是れから又嫁に行かなきやならない體だ。』

『へい、御免下さい。ヘン、口は重寶な物だ、自分は其嫁に行かなきやならない體を何してる癖に。』

『馬鹿を言つちや困るぢやないか』と眞顔になつて、『女の言ふ事なんぞを取揚げて、君迄が其様なことを言つちや、僕は好いが、小夜が迷惑する。』

『ぢや、實際純潔かい！』

『無論さ。』

『屹度だれ？』

『念を押すだけ失敬だらう。』

『好！大に好！』と何故か氣負つて、『そんなら一つ眞面目に聞かう。ぢや、何だれ、君は小夜さんを何時迄も唾へてゐる氣は無けれ、何處か好い所があつたら嫁けるね？』

影 面 其

『さう、良縁さへ有りや、嫁げたいと思つてる。』

『さうか。ぢや、僕が一つ好い所へ世話をせう。如何だ？ え、おい』と顎で一つ掬つて、『寧ろ澁谷へ遣つ了はんか。』

二八

影 面 其

哲也は少し怫然として、

『馬鹿を言つちや困る。澁谷にや僕が大に言分が有るのだ。今日君が來なきや、此方から行かうと思つた所なんだ。』

『大方君の事だから其様事だらうと思つてゐた』と葉村は一向平氣なもので、『が、まあ、然う頭から非難さずに聴き玉へ、斯ういふ譯なんだ。今朝老父の所から呼びに寄越したから、行つて見るとれ、昨夜は實は此々で大失敗をやつたといふ話さ。其様な事は毎度の事で些とも驚きやしないが、驚いたのは、老父小夜さんにや全然參ツ了つててれ、鐵砲どころかい、大砲を喰つてゐながら、言草が好いぢやないか、彼あ面白い女だ、見所があるッ……うッぶ、ふ、ふ』と口を結んで、態々吹出す眞似をして、『見所が有るが好いぢやないか、宛で新社員採用の時の應對試験といふものだ。それで彼あ是非欲しいが、一つ考へて見て呉れさ。そら、お出なすつ』

其 面 影

たと思つたから、それから大に吹いて遣つたね、そりや不好ません、瘦ても枯ても法學士の妹だ。其様なちよつくら一寸手軽く行くのとは質が違ふといふとね、だから妾にしゃうとは言はん、候補者に爲たいといふのさ。候補者は一寸分るまい？ 此奴あ斯ういふ理窟だ。ほら、夫人が肺で危れえんだらう、それで當人も最うチャンと覺悟をしてゐてさ、然う言ふのださうだ、私が死んだら、貴方は孰れ直と濱を——今居る妾なんだ、厭な奴よ、僕あ大嫌ひだ、尤も氣振にや少しも出さんがね——濱を後釜に据ゑる積だらうが、彼ばかりはお止しなさい、私は何も妬のぢやない、どうせ生きてる中から皆の共有物だと思つてる貴方だから、貴方に未練もない——旨いことを言ふぢやないか——未練もないとね、唯おでん爛酒から此處まで仕上げて來た苦勞を思ふと、今更彼様な降られえ女に此財産を引掻き廻されて滅茶々にされツ了ふのが、如何にも残念で死んでも死に切れないから、寧ろ私の生きてる中に、相談づくで候補者を極めて置かうぢやないかといふのださうだ。ね、流石は夫人澁谷だ。言ふ事がさげけてまさアね。そこで、老父の言ふ事にやさ、小夜さんなら大丈夫及第だが、卒然夫人の同意を得て了ふ譯にも行かれえから、行々は機會を見て候補者に引上げることにしてさ、當分は唯何となく何處ぞに小ぢんまりとした家を持たせて、當人に最う一遍學校を遣りたい希望が有るんださうだから學校へでも通はせて置くなんぞは如何だといふのだ。面白いぢやないか。え、如何だい、一つ

其 面 影

小夜さんの腹を聞いて見ちや？』
と竊と相手の顔色を窺ふ。
哲也は冷笑して、『折角だが、其は小夜の意嚮を聞く迄もない、僕が代つてお断りをする。』
『おやッ！』ト目を圓くして、『何故だ？ 何故不可え？』
『何故ツて、君の言ふことは皆虚構だらう、澁谷は小夜を外妾にしたいとでも言ふんだらう？』
葉村は突然聲を放つて大笑したが、笑止むと、
『可哀さうに、正可然うでもねえさ。が、戲言退けて、君、爰は考へ物だぜ』と忙し氣に目を瞬いて、『え、おい、爰は大に考へ物だぜ。』

二九

哲也は一も二もなく不承知で、『馬鹿を言つちや困る。考へ物だと云つて、考へる餘地が無いぢやないか。僕が幾ら窮したからツて、正可、妹を人の外妾にや出來ん。』
『だからさ』と葉村は此唐變木にも困るといひたさうな顔をして、『外妾にしやうとは誰も言やしない。夫人が逝ツ了つたら、後に直す、直らうといふ默契の下にだよ、好いかい、當分唯何となく學資を出させるのよ、而して置いてさ、後は當人同士で何を行らかさうと、此方や知ら

れえとして置きや、其で好いぢやないか。些とも君の體面に關りやしれえ。」

『正可其様な馬鹿な事が……』

『なに、馬鹿な事があるもんか。而して小夜さんを嵌はめッ了や、もう占めたもんだ。それで老父との因縁が全然付了すかりふ。さうすりや後は最う君を紹介するばかりで、直ぐ兄弟だか何だか知らないが、心を一にしてよ、内外呼應と來らあ。それで仕事が出来えンなら、君は馬鹿だ。』哲也の苦笑するのを見て『君は小夜さんを手放す話になると、兎角氣の進まないやうだが、小夜さんが老父の持物になつたからつて、何だよ、何もさう落膽することはないよ。小夜さんだつて正可彼様な梅干老爺に惚ッ了ふ氣遣は有るまい。ね、さうすりや君は兄者人あにじやひらです、随分無斷でお閨房へ迄も這入り込めやうといふものだ。何だつて好きな眞似が出来まさあ』ト妙にニコ／＼となつて『是程言つたら分つたらう。』

哲也は眉を擧めて、『君も餘程邪推深いれえ。彼程僕が其様な事はないと言つてゐぢやないか。其様な亂倫な——大抵考へても分りさうなもんだ。』

『へい／＼、御道理様でございます……君も餘程捌まげれえ男だ。是程此方が碎けて出たら、最う好加減に暴露して言つちやつても好きさうなものだ、が、まあ、其様な事あ如何だつて好い、僕の知つた事ちやれえ。で、詰まる所如何なんだ、好るのか、不好えのか？』

影 面 其

影 面 其

『好るも不好もない、それぢや考へる餘地がない』ト哲也は頑として矢張動かぬ。

『さうか、それぢや御勝手になさい。其代り僕は最う知らないよ。僕あ最う些と君は話せる男だと思つたから、今度は相應に骨を折つた積たまりだ。打撒うちまけて言つ了や、そりや老父は小夜さんを圍ひたいと言つたのよ。しかし、其ぢや何ぼ何でも承知が仕難しぢがからうと思つたから、骨を折つて老父を口説いてさ、君の承知の仕好いやうにして持つて來たのだ。ト言つて何も僕に些とも野心は有りあしないよ。平生が利己本位ふだんだからつて、誤解されちや困るよ。今度に限つて其は些とも無いけど、是だつて人間でさあ、君が何時迄も人並の生活が出来ないで窮々云つてるのを見ると、慙然みじめでなられえや。君からは直接に聞かんけれど、叔母さんや時さんが能く來ちや聞かせるから、君の家の事情は大抵僕にや分つてゐるが、君も随分苦しからう？ え、おい、随分苦しからう？』據どころなく然うといふと『それといふも、僕に言はせりや、皆自業自得だ。皆君が下手だからです。此間も言ふ通り、どうも君にや理想だの人情だのといふ粘氣ねばりが有るから、爲る事がネチ／＼ばかりして、洒然さらりと行かれえや。皆古本の精が憑よいてる所爲だ。だから、爰で一つ正氣に復つて、活きた人間になつて考へて見玉へ、今度の事なんぞは雜作もなく捌けて了ふ。そりや、どうせ小夜さんは女の事ことだ、而も若いと來てゐるから、彼様なお老爺さんは私厭わづらだわ何か言うだらう、けれども其處は君が手傳つて其若氣を棄てさせなきや不好うそだ。若氣

を棄てさせツ了や、なめに、金が有るなら老人程結構だ、早く片付けちやツて後で緩り樂をす
るといふ氣になります。小夜さんが其氣になりや、小夜さんも幸福だし、君も浮ぶ、君が浮べ
ば叔母さんや時さんの額の八ノ字は自然と消えます。そりや不思議なものさ。それを君が何時
迄も人情だの體面だのと、其様な物に拘泥つてゐたら、末はどうせ碌でもない事に成ツ了ふよ。
活きた世界だ、活きた世界に生きてゐやうといふに、人間を殺して掛つちや、到底も無効だ—
と云つても、君にや然うは行くめえ。』

と此人にも似合はず、末は何となく沁りとなる。哲也も沁りとなつて、友の説に耳を傾けて
ゐたが、此時如何にも力なげに萎れた面を擧げて、

『や、有難う。君が然う深切に率直に言つて呉れるのに、座なりを言ふのは不本意だから、僕
も率直に言つて了ふが、僕にや如何しても君の其流儀は飲らん。成程生活といふものは君の言
ふ通りの物かも知れんが、しかし、幾ら皆が物質的の満足を得るからと云つて、僕にや小夜を
……精神的に殺して了ふことは如何しても出来ん。』

突然葉村は天井を仰いで高笑ひをして、『不好え〜、君は小夜さんに戀してゐるから不好え〜』
といひながら、衝と起つて障子の外へ出た。便所へでも行つたのであらうと、久らく待つて
見ても歸つて来ぬので、不思議に思つて、手を鳴らして福を呼んで聞いて見ると、

『葉村さんですか？ 今しがたお歸りに成りましたが……』

三〇

昔は知らず、電車の響きの聒ましい今頃の、本郷の夜毎の熱鬧場といへば、先櫻木神社の前
通、四丁目の角の交番邊から富坂上に至る三四丁の間で、月三賽の薬師の縁日はいふも更、平
生も此間は日暮前から最う兩側へ夜店が出て、電燈の空に華やぐ頃は、散歩がてらの騒ぎの人
に、用を抱へた急足の人も交つて、往來の絡繹と絶えぬ賑やかな中へ、今しも右側の中程の、
何の湯とかいふ錢湯の、ガラス戸をカラ〜と開けて、濡手拭に石鹼箱を包んだのを片手に、
衝と姿を現はしたのは、湯上りの濡色の殊に美しい小夜子である。持前の沈着を失つて、今宵
は何やら蒼皇と、通りすがりの四五人連の制帽にビューチーのシエーネのと公然に鑑賞された
にも氣が附かず、往來の人の間を縫つて町を西へ四五間下ると、一寸立止り、恐怖を懐いた目
に四下を顧眄して、つい向ふの煎餅屋の横町は我家への戻道ながら、其へは足を向けず、赤子
を脊負つて小包を抱へた誰家やらの神さんの影に引添うて、反對の横町へ衝と逸れた。之を眞
直に行けば菊坂へ出るので、左手は舊は病院が原、今は表通りから此横町へ掛けて、新築の町
家がズラリと軒を並べてゐるけれど、裏手には尙些かの空地があつて、虎斑に残る雜草に、今

も昔の佛を留めてゐる。

小夜子は店明りを厭ふやうに、俯き膝に其處の町家の前を通り抜けて、一番盡頭の荒物屋の角を左へ曲つて、空地の間に紛れ入ると、一寸立止つて四邊を見廻した。此時つい其處の塀際を離れて此方へ寄り來る黒い影があつたが、ト見ると、小夜子は怡々と之を迎へて、相對つて立止ると、

『どうもお待たせ申しました』と一寸會釋して、『餘程お待ち下すつて?』

『なに、其様なでもなかつた』といふ聲は正しく哲也であつた。

『私氣が急いで成らなかつたんですけど、生憎お隣の方と落合つたものですから、入つたばかりで出るのも何だか變で。』

『お隣の偏目さんか。ぢや、話し掛けられて弱つたでせう。まあ、徐々歩きながら話ませう。』二人の影は並んで動き出した。

『それは然うと。貴女の家を出たのは何時頃だつたか知ら?』

『私? 七時打つと直ぐ。』

『さうか。それだと……』と立止つて、今夜は和服であつたので、兵兒帯に絡むだ時計を引出して、星明りに透して見たが、『暗くつて薩張分らん。小夜さんの目なら、分るだらう。一寸見

其 面 影

て御覽。』

『は』と側へ寄つて覗いて見たが、矢張分らぬ。『一寸』と時計を我手に受取つて見たが、帯に絡むであるので、甚く勝手が悪く、彼此と持扱ふ中に何時しか二人の影は一つに成つて、哲也の鼻の先で庇髪のリボンが颯と靡く。温かい人香に襲はれて、哲也は恍惚と白い小夜子の頬を眺めて、今夜は白粉を傳けたのか知らと思つたが、其香もせぬので、矢張り色が白いのだと思ふと、

『七時三十……三十二分だか三分だかですわ』と衝と離れて、獨言のやうに、『其様に長く入つてたか知ら。』

『ぢや、八時迄は好いね?』

『ええ。』

『そんなら其積で早速用談に掛らう。』

と又歩き出して、今夜此處で出會ふ目的の用談を始めたが、話しは極簡單で、去る女學校で事に寄ると事務員が要るかも知れぬといふ話を聞込むだが、何も家を出る一時の足場だから、行つて見る氣はないかといふので、固より否むべき筋でないから、私に出來ます事ならと、小夜子も承知する。話は其切りで、誠に呆氣ない。其様な事なら家でも話せさうなものを、とい

其 面 影

ふのは岡目の評で、當人同志は併し其を何とも思はぬのであつた。

九二

三一

話が済むと、二人共一寸無言になつて、眞砂町の通を漫々來ると、其處に水溜があつたので哲也はヒョイト跨いで、

「姉さんは矢張口を利きませんか？」

「ええ」と小夜子は頷く。

「どうも困つた人だなあ！」と歎息して、「しかし阿母さんは其程でも無いやうだね。」

「ええ……ですけど、矢張……」

「口を利きませんか？」

「いえ、口は利きますけど、厭味ばかり言つて……」

「そりや其位の事は有るだらう……如何な事を言ひます？」と小夜子の方を振向た。けれども小夜子が何とも言はぬので、「大方何だらう、貴女と私との間を可怪く疑ぐつて、それで種々厭味を言ふのでせう？」

「ええ」と答は只其だけであつたが、此時小夜子の面には言知れぬ苦痛の色が浮んだ。

其面影

其面影

暗黒ゆゑ、哲也は其と知る由なく、「貴女は家で始終其様な事を言はれて、嘸厭だらうねえ？」

「私は何ですけど、兄さんこそ嘸……お厭だらうと思つて。」

「なに、私は男の事だ、些とも構はんが、貴女は然うは行かない。是からまだ嫁に行かなきゃならない體だからねえ。」

「ですけど、私最う何處へも嫁かないことに極めてますから。」

「其様な事言つたつて。」

是で話は弗つり切れて、銘々思ふ所あるが如く、無言で富坂の通りへ出ると、往來も稍繁くなつたので、二人は言ひ合はされど、人通の多い新坂を餘處に、淋しい舊の富坂の降口に掛る時、道具箱を擔いだ大工らしいのが四五人擦違つたが、と見て其中の一人がエヘンと咳拂ひをする途端に、小石が一つ飛んで來て二人の足許へ落ちた。哲也が佞と振返ると、哄然と笑ひ聲を揚げて其四五人は行過ぎて了つた。

「仕様のない奴等だ」と哲也は呖くやうに言つたが、聽て喟然として、「しかし、無理はない、家の者ですら誤解をして居るんだからなあ。兄妹でゐながら、家では碌に口も利かれんといふのだから、實に馬鹿々々しくツて話にもならん。」

かうして出會ふのも是で三度目であるが哲也は毎も此感がある。小夜子も同じ感想に堪へぬ

九三

かのやうに、何にも言はず顔垂れてゐたが、偶と顔を擧げて、

『皆私が悪いンんですから……私寧ろ千葉へ行つて見ませうか知ら？』

『此間の話のバイブル ウーマンの口かれ？ お止し〜、田舎へ行つたつて詰らない。』
『ですけど……』

『まあ、宜しい、其様に心配せんでも。私に任せてお置き。それはどうせ家は那麽いふ譯なんだから、長くは居られない。其處は私も萬々承知してゐるから、若し今日の話の口が旨く行かなかつたら、如何にか又考へて、是非今月一杯には貴女の身の振方を附けて了ふ。而して置いて、其から私も考へる。』

『え？ 考へると云つて？』と聞答める。

『え、なあに』と哲也は一寸躊躇したが、『貴女だから言つて了ふけれど、私だつて然う何時迄も辛抱しちや居られんもの。何とか好加減に考へなきや……』

『では、兄様も家に居ないと仰有るンですか？』と凝然と兄の面を向上げる。

『然う……まあ、如何にか爲なきやね……』と言葉が濁る。

三三

話に氣を奪られて、いつ坂を下りたとも覺えず、と氣が附けば、最う此處は春日町の通り。

一方は砲兵工廠の、町家は片側ばかりで、店明かりの力弱く、町中は只薄朦朧とはしてゐれどまだ宵の口の事として往來が絶えぬ。二人は黙つて足早に歩き出して、壹岐坂手前で抜裏とも横町とも附かぬ所を曲ると、其處に胸を突くばかりの坂がある。其を上ると、弓町の高臺。此處は昔の大名屋敷の梯を留めた長屋建の一棟を後にして、前は崖、足下の屋根瓦の頻浪の彼方には、水道橋も一目に見えて、一寸した眺望であるけれど、固より今頃此様な處へ來る者は無い。屈竟の話場所と目星を附けてゐた二人は、此處迄來ると、言合はされど足を停めて、

『兄さん！』と小夜子が先づ聲を掛けたが、振向かれて、急に俯目になり、『今仰有つた事ねえ……』

『私が家を出る事かれ？』

『え……最う一遍考へ直して下さることは出來ませんでせうか？』

『何故？』

『でも、若し其様な事に成つたら、姉様が餘まり可哀さうですもの。』

『可哀さうだつて、自業自得なもの、仕方がないさ。』

『ですけど、原をいへば、皆私が悪いのですから。』

『なんの、其様な事が有るもんか。貴女に關係した事は些とも有りやしない。』

『でも、私さへ居なかつたなら、姉様も屹度彼様な癖みは起しませせんわ。然うしたら家庭も平和だつたかも知れませんもの。』

『いや、其や貴女の思過しだよ。家庭の面白く行かないのはね、私と姉様との性質が餘り違ひ過るからだよ。貴女は寧ろ側杖を喰つてゐる傾きがあるのだ。』

『然うでせうか知ら？』

『そりや其に違ひないさ。』

小夜子は溜息して『姉様も實際善くないのですから、私、生意氣のやうですけど、一遍能く言つて見ませうか知ら？』

『無効々々！ 怒かなことを言ふと、益々癖む。』

『それだと、私、如何したら好いのか……』

『まあ、然う心配せんでも好いよ、私もまだ確と決心した譯ぢやないのだから』と慰めるやうに言つたが、更に感慨に堪へぬやうに『彼様な冷酷な人でも、貴女は姉だと思つて然うして心配するけど、姉様は如何だ、貴女を宛然讎敵のやうに思つてゐる。姉妹でありながら、如何して然う性格が違ふんだらう？』

小夜子は之には何とも答へなかつた。久らく凝然と考へて『兄さん！』と小聲ながら腸を絞

影 面 其

影 面 其

るやうな聲で呼懸けて、『私、如何しても千葉へ行つては不好ませんでせうか？』

哲也は狼狽して振向いて『まだ貴女は其様な事を言つてゐる。何も貴女に關係した事ぢやないといへば。然うして貴女が今無理に身を退きや、反て破裂を早めるばかりだからね。』

『ですけど、如何考へて見ても、私も悪いのですから。』

『困るねえ、貴女にも。そんなら打明けて言つて了ふがね、私が斷然決心を仕難るのはね、姉様に未練が残るからではないのですよ。姉様と分れるのは左程遺憾とも思はないが、然うして了や、貴女とも……他人に成つて了ふからねえ。』

といつた哲也は何心ない體であつたが、之を聞いた小夜子は忽ら颯と面の色を失つた。けれども、暗黒ゆるる哲也は其とも氣が附かぬやうであつた。

是で二人共又無言になつたが、久らくすると小夜子が偶と面を舉げて、

『もう何時になりますか知ら？』

『さう』と時計を出して見ると、此處は四邊が豁然としてゐるので、哲也の目にも直ぐと分つて、『や、もう八時半だ。』

『あら、最う其様に成るでせうか？』と吃驚して『では、私もう歸りませんと……』

『さうねえ』と據どころ無きやうに『ぢや、其處の角迄一所に行かう。』

同じ家へ歸るのでありながら、切りに別れ惜むで見たやうなものゝ、角といつてもツイ其處なので、話もせぬ中に最う來て了つた。餘り飽氣なかつたので、不知又慾が出て、ぢや、向ふの、あの横町の角迄と、又其處迄來て立止ると、小夜子が小腰を屈めて、「では、お先へ」と別れて五六歩行き過ぎたのを、「一寸！」と哲也が呼止める。「は？」と小戻りして來て又相對ふと、折柄通る人もなかつたので、哲也は近々と小夜子の側へ摺寄り、

『明日の晩ねえ』と何の氣なしに其羽織の紐を弄り乍ら「又出られないか知ら？」

小夜子も黙つて其は弄らせ乍ら「出て出られないことも無いかも知れませんが、でも、さう毎晩ですと……」

『變に思ふか知ら？』

『ええ。』

『ではねえ……』と思掛けず衝と小夜子の手を握つて、一振り振つて、笑ひながら、

『左様なら！……』

小夜子は唯愕然したばかりで何にも言はず、其儘横町の闇の中へ……。

常は長湯した覺えない身の、今夜に限つて斯う遅くなつては、姉様が變に思ひはすまいか、阿母様が何とか仰有りはすまいかと、小夜子は其ばかりを苦しめながら、急いで我家へ歸つて見ると、其氣兼ねる母も姉も茶の間で鼻を突合せて、何か眞になつて話をしてゐたのが、格子戸の開く音と共に話聲が噤と止む。と、もう何とやら氣後れがして、成らう事なら此儘女部屋へ隠れて顔を出し度ないやうな氣がしたけれど、然うもならず、厭々ながら茶の間へ來て、挨拶をして引退らうとする、隠居が一寸といふ。ハツと思ふと、身體が竦むで、急に胸がドキ／＼としたけれど、據どころなく其處に座ると、隠居は例のギロリと目を光らせて、小夜子の面を睨めるやうに視ながら、

『大層長いお湯だことねえ。今迄お湯に入つてたのかい？』

『ええ……あの、少し……』と狼狽して「散歩したもんですから。』

『一人でかい？』と隠居の目が又光る。

『いくえ……あの、お湯を出ると……昔のお友達に逢つたもんですから』と俯むいて了つたのは、面に苦悶の現はれるのを見られまいとしたのである。

『お止しよ、阿母さん！』と時子が冷笑して「どうして此人が素直に言つ了ふもんか。そんな憐らしいのぢや無いんですツと。』

『まあ、黙つてお居で』と隠居は烟管で之を抑へて、更に小夜子に向ひ、『昔のお友達といふと其は何かい、男の人かい、それとも矢張女かい？』

『ええ。』

『ええぢや分らないぢやないか。何方なんだよ』

『女の方です』と少し聲が慄へる。

『へえ、女の方……でも、今しがたお前が妙な人と……』

『阿母さん、お止しと云へば！』と時子は最う齒痒さうに肝癢聲になつて、『誰と歩いてたか、聞かなくツたツて分つて居るぢや有りませんか。どうせ春情の附いた犬見たやうな人達なんだもの、人目も何も有りやしない。往來中を手を引合つて聯袂で歩いてたのに極つてまさあれ』とぶいと起て、『本當に馬鹿々々しくツて聞てられやしない』と獨言のやうに言ひながら、茶の間を出て行つた。

『あれだもの！ 宛然狂人のやうで手も付けられやしない』と隠居も後で口小言を言つたが、格別腹を立てた様子もなかつた。で、又小夜子の方へ押直つて、『もツと此方へお寄り』といつても、逡巡してゐるので、直肝癢を起して、『お寄りといつたら、お寄りなれえ！』と聲までが最う強くなる。

其 面 影

其 面 影

據どころなく少し前へ膝行り出て、洋燈の影に悄然と頭垂れてゐると、隠居は先づ一服して、氣を落着けて、

『隠立しては却て爲にならないよ。好いかえ？ 洗ひ浚ひ言つてお了ひよ。お前は何だらう、兄さんと一所に何處かへ行つたんだらう？』

と険しい目で、倍と小夜子を見据る。

あゝ、嘘を吐くは辛いものと、今始めて知つた譯ではないけれど、教を奉ずる小夜子の身にしては是程辛いことはない。何も後暗い事で會つたのではないのゆゑ、寧ろ明白に言つて了はうか、とも思つたけれど、言へば看すく彼れ程自分を思つて呉れる兄の迷惑になることを、辛いからとて言つては濟まぬ。死んでも言ふまいと決心して、冷汗にしとど濡れながらも、

『いゝえ。』

『さうかい』と隠居は無論信用した様子はないが、去り逆案外追究もせずして、『それなら好いがれ、餘まりお前の歸りが遅いもんだから、姉様は如何に心配したらう！ 正可其様な事は有るまいツて、幾ら私が慰めても、もう其れに極めて了つて、居ても起つてもゐられないやうに焦慮するんだもの。私は其を側で見えて、本當に情なくなつて了つた。姉妹喧嘩も好いけれど、喧嘩に事を缺いて、有らう事が、有るまい事が、現在の姉様の亭主たる者を奪つたとか、

奪らないとか、まあ、宛然大畜生の喧嘩ぢやないか。お前姉様に彼様に言はれて、何とも思はないのかい？ いとえさ、口惜しくはないかよ！ え、小夜、何とかお言ひなれ、と末になる程、聲が荒くなる。

三四

小夜子は艱まし氣な面を揚げて、「私が遅くなつて御心配掛けたのは濟ませんけど、だつて……だつて何も後暗い事してゐたんぢやなし、姉様も彼様に」と又俯むいて、「仰有らなくつても好いわ……」と聲が泣く。

「お前だつて犬だと言はれたら、口惜しからう？」と隠居が意地悪く又それを言ふ。

小夜子は耐へ難て、遂に潜々と泣出した。隠居は其様子を凝然と視て、「そら程口惜いと思ふンなら、お前も姉様に彼様な事を言はれないやうにするが好いぢやないか。姉さんが那麽言ふのに些とも無理はないよ。皆お前の心柄だよ。だつて、考へて御覽な、折角好い所へ御奉公に上つたと思や、直き家が戀しくなつて駈出して來るしき、そんならツて、歸つて來てからも、一生懸命に奉公口を探すでもなしき、それじや誰が見たつて、家に膠着くと外思へないぢやないか。此様な家に然う膠着く筈がないのに、お前は膠着くし、兄様は兄様で、お前の事といふ

影面其

影面其

と、目の色を異へて騒ぐンだもの、姉様の身になつたら、随分廻氣も起らうぢやないか。其も然うだしき、お前が本當に家に膠着く了簡がないンなら、何も然う行き處に困つてる筈は無いから、結構な口がツイ鼻の先に振垂つてるのだもの。』

「結構な口ツて？」と不審の面を舉ると、

「澁谷様の話さ。』

「だつて、あれは……」と言淀む。

「あれが如何したのさ？」と隠居は居丈高になつたが、小夜子が口を開かぬので、「お前は又お妾だから如何の斯うのと、生意氣なことをいふのだらうけど、此間も彼程お妾ぢやないと、嘸むで含めるやうに言つて聞かせたぢやないか。當分は只お金を掛けて勉強させて下すつてさ、行末は奥様に直して遣らうツて、こら程結構なお話は鐵の草鞋で尋れて歩いたつて、滅多にや有りやしないよ。そりやお前にしたら、お濱さんといふ人も有る事だし、正可の時にや然うばかりもならないといふ氣が有るかも知らないけど、其處は兄様なんぞと違つて、あの脱け目のない葉村さんが附てなざる事たもの、悪いやうには仕て下さらないわね。年齢は些と違ひ過ぎるけど、然う何も角も揃つて好いといふ事はないもんだから、其位の事は不承しなくつちや、お前。誠に結構なお話で私共なら二つ返事で承知する所だれ。それを兄様といつたら、自分一了

其面影

筋で從頭斷つて了ふし、お前は、お前で然う澁る處を見りや、姉さんばかしぢやない、誰にしたつて、是や可怪しいと思ひますよ』と理窟詰にして置いて、『だからね、本當にお前が後暗い事してゐないのなら、何も然う行處に困つてゐることは無いから、お前から兄様に願つてさ、澁谷様のお世話になつたら好いぢやないか』といつても小夜子が黙つてゐるので『ねえ、然うしたら好いぢやないか。私達が其を言ふと、直に兄様は目に稜立てゝ怒るけれど、お氣に入りのお前が言や、兄様だつて又其氣になるかも知れないわね——後暗い事をしてゐないのなら』と又煩瑣くそれを附足して『ね。まあ、お前にも家内の様子は、毎日見てゐるから、分つてゐるだらうが、お前が澁谷様へ上つた後で、お前の事で悶着してから以來は、兄様も姉様も、夫婦でゐながら、ついに一つ寢する様子もなしさ、那麽して物も碌に言はないでゐるぢやないか。此儘に打棄つて置きや、末は如何なる事か分らないから、今の中誰ぞに仲へ入つて口を利いて貰ひたいけど、媒人の梁瀬さんは長崎へ行つて了ひなさる、叔父さんも今は此方に居ず、私一人で如何なに心配してゐるか、分らないんだよ』と聲が慄へて、中絶れた。聽て袂から鄭重に四つに疊んだ手巾を出して、チンと鼻をかむで、目を拭いて『ね、だから爰でお前が少し位の不足は不承して、自分の心から出たやうにして兄様に願つてね、澁谷様のお世話になつてお呉れ。さうすりやお前は出世するばかしぢやない、身の明りも立つてさ、姉様も安心するし、兄様だつ

其面影

て、お前が然う成りや、屹度悪いことはないよ、そりや屹度悪いことはないよ』と二度反覆して、『ね、お前のお蔭で兄様が出世すりや、姉様だつて何でお前を疎かに思はう。其時になつたら、今彼様なこと言つたのを後悔して、屹度謝罪するよ、謝罪らなきや、私が謝罪らせます。ね、お前一人の心の持方で、三方四方圓く收まつて、皆が出世が出来るんだから、ね、此處の所を能く聞分けて、ね、どうか澁谷様のお世話になつてお呉れ、ね、ね……』

と『ね』を幾つも累れたが、小夜子は黙つてゐる。尙ほ反覆し、一つことを煩瑣く言つて見ても、小夜子が矢張黙つてゐるので、隠居の目は遂にギロリと光つて、

『こら程事を分けて言つても、お前はまだ聞分けないのかいッ！』

と佖となる時、表の潜りがガラ／＼と開いた。

『チヨツ！』と舌鼓を打つて『兄様が歸つて來た。ぢや、まあ、お前も能く一遍考へて御覽、今が今返事を聞かなくつても好いだから。』

と言つても、小夜子は何とも言はず、凝然と頭垂れたまゝ、身動き一つせぬのであつた。

三五

今日は暖かな小春日和の、老人は書き入れの外出日と、午過ぐる頃隠居は去る方へ行つて未

だ還らず、福も使ひに出た留守の間こそ幸ひと、小夜子は竊と奥を覗いて見ると、姉の時子は障子を明放しに椽近くで彼方向になり、久振に針を持つて切々と裁縫を爲てゐる。此様な機會は又とないと、昨夜一晩まんじりともせず考へた事を言つて了ふ氣にはなつたけれど、卒にれば例の内氣の、胸ばかり躍つて、何とやら躊躇れるのを、強ひて自分と氣を勵まして、竊と中へ入り、音のせぬやうに後を閉めて、姉の背所へ来て小さく坐り、先づ姉様と呼んでみると、時子は振向いて、額に八ノ字を寄せ、妹の居丈を見積るやうに見上げ見下した儘、何にも言はず、彼方向いて又切々と針を運ぶ。

「姉様！ お邪魔でせうが、少しお話が有りますから」何とか言ふかと待つて見ても、聞えぬやうに黙つてゐるので、「ねえ」と少し側へ躡り寄つて、面を覗くやうにしながら、「ねえ、姉様！」

「煩さいねえ！ 私は最うお前なんぞに姉様といはれる筈がないよ」と針の運びは愈急になる。「其様な事仰有らずに、まあ、私の言ふ事を聽いて下さいな。私昨夜阿母さんに種々言はれて一晚寐ずに考へたんですが、今迄姉様に大變御心配かけて誠に済みませんでした。私悪い所は幾重にもお詫しますから、勘辯して下さいな。ね、姉様！ 姉様は大變誤解して居らっしゃるけど、それといふも皆、私が今迄一度も打明けて言はなかつたのが悪いのだから、今日は

何も角も隠さずに言つて了ひますから、ね、姉様、聽いて頂戴な」と言ひ出して見ると、胸の動悸も収まつて、段々語調も沈着いて來たが、姉が矢張り黙つてゐるので、「ね、姉様！」

「饒舌り度や、勝手に幾らでもお饒舌なさいな」と矢張彼方向いた儘で、「其處で饒舌りやね、私も耳が有るから、聞き度なくツても、自然に聽えますよ。」

小夜子は逆はずに、「それではね、私もう何も角も隠さず言つて了ひますから、姉様も怒らないで聽いて頂戴よ」と暫く中絶してから「姉様！」と呼懸けて「私實に残念だわ……」と俯むくと、涙が潜然と膝へ零れて「他の事と違つて、兄さんと……まあ、私其様な不品行な者でせうか。餘り酷いぢア有りませんか。え、姉様？ それは阿母様の命令も有つたし、私も是から始終お世話に成らなきやならない方だと思つたから、私兄様の御用は成るだけ氣を付けて達してゐましたわ。それに、もう何も角も隠さず言つて了ひますけど、私實は姉様を餘り善くは思はなかつたのよ。だつて餘り兄さんを……粗末になさるんですもの。私それがお氣の毒でならかなつたから、兄様が成るべく其を感じないやうにしようと思つて、姉様に成代つた積で御用を達してたから、事に寄ると、姉様の爲さる事迄私が爲てゐたかも知れませんが、今に成つて考へて見ると、實に悪かつたと思ふわ。其様な御用は姉様に然う言つて仕て戴くと好かつたんだけど……」と凝然と考へて、「私實に悪かつたわ。赦して頂戴よ、姉様。私が其様な立入つた

御用迄するもんだから、姉様と兄様との間が自然と遠ざかつて了つて、實に申譯が無いんですけど、其時分は、私、馬鹿でしたわねえ、其處迄心が届かなかつたもんだから、兄様が私の世話を喜んで受けて下さつて、種々深切に言つて下さるのが嬉しくつて、私は又餘計氣を附けて上げるといふ傾きが……」と考へて「ええ、確に有つたわ。其を傍から觀たら變に思はれたかも知れませんが、私實際其様な姉様の疑つてらッしやるやうな、淫らしい……」

ふいと時子は起つて座敷を出た。折角熱心に辯解しやうとする小夜子も、これに忽ち機を挫かれて一寸飽氣に取られると、流石に恨めし相な面になつて、姉の出て行つた後を眺めてゐたが、聽て膝に手を重ねて悄然と頸垂れて了つた。暫くすると、時子は之を探しに行つたのと思はれる何やらの小布片を持つて歸つて來て、矢張彼方向に舊の座布團の上に座つたので、小夜子は姉の後姿を凝然と視て、

「姉様！ 私此様なお話をするのは實に辛いわ。ですけど、之を言つて了はなきや、何時迄も厭アな疑ひが掛つて、姉様は口も碌に利いて下さらないし、血の繋がつてゐるのは姉様ばかりだのに、此様な關係に成つたかと思ふと、私實に情なくなるから……」と潜然と泪を濺して、
 「一生懸命になつて言つてるんですよ。ですから、姉様も……」と中絶れて、「最う些と眞面目になつて聽いて下さつても好いわ……」

「馬鹿にお仕でない！」と時子は振返ると、信と姉を睨付けて、「私はね、まだお前が兄さんを迷はした情話をね、眞面目に聞ける程耄碌はしませんよ」と顎を突出したが、衝と又後を向けて「何處迄人を馬鹿にする氣なんだろう。」

三六

小夜子が恨めしさうに姉の半面を視てゐると、時子は、紛糾つたのか、えいと焦燥たさうに絲を引切つて、一寸圓めて、抛つて、又新しく絲を透して裁縫にかゝり、金輪際相手に成らぬと、決心してゐるらしい面色なので、小夜子は嘸と溜息して「姉様！ 如何しても疑を霽して下さらないのですか？」矢張黙つてゐるので「では、もう據どころないから、永々お世話様に成りましたけど、私明日にも家を出ませう、然うしたら姉様も安心なされるでせうから。ですがねえ、姉様」と沁りとなつて「貴女は兄様との間が此様なになつたのを私ばかりの所爲にして居らッしやるけど、貴女だつて私悪いと思ふわ。最う少し兄様に同情して大事にして上げなきや、私が居なくなつたからッて……」

「餘計なことをお言ひでない！」と時子は険しい面を此方へ振向けて、「兄様を大事にしやうとすまいと、お前なんぞの指圖は受けないよ。私はね、お前のやうに、阿諛が上手でないから、

どうせ兄様の氣には入らないのさ。それが如何したのさ。へ、へ」と鼻で笑つて、「家を出る！ 其方がお前様達の勝手だらうよ。家に居りや、口も碌に利けないけど、餘所なら朝晩引摺り込んで勝手に巫山戯散らされるかられえ。」

「あら、私家を出たつて、東京に居やしませんわ。千葉へ行くのですよ。」

「千葉は東京から日返が出来ますかられ。」

「さう疑ぐつたら、際限がないわ、姉様！」

「其處迄氣を廻さなきや、馬鹿を見ますかられ、お前さんは糊塗すのが餘程上手だから。」

小夜子は又溜息をして、「どうも仕方がない」と獨言のやうに言つたが、「如何して姉様は然う私を疑ぐるンでせう。そんなに疑ぐるのには、何か確かな證據でも有りますか？」

「證據呼はりは餘り爲さらない方がお爲ですよ。」

「あら、何故です？」

「證據を出されたら、何ぼお前が鐵面皮だつて、顔から火が出るだらうかられ。」

小夜子は一寸狼狽したが、併し考へて見ると、何も證據が有るべき筈がない。

「いとえ、有るなら出して戴きませう。私も唯漠然と疑ぐられるよりか、證據に就いて辯解した方が、辯解爲好いから。」

其 面 影

「さうかい。其様に見たきや、お目に掛けませうよ」と針箱の抽斗から、皺だらけの半紙の四つに疊むだのを出して、ボンと投付つて、「これは何だい？」

小夜子はハツと思つた。成程是は覺えがある。澁谷の邸から逃歸つた翌日、人目を忍んで竊と兄に手渡した、秘密といへば先秘密の手紙——ではあるが、其文意は唯前夜の禮を述べて、尙ほ母の注意もあるから、姉様の嫌疑を避ける爲、私は是から兄様のお身の周邊の御用は勤めませぬ、止むを得ぬ用事の外は、口も成るだけ利かぬやうにしますから、悪からず、といふだけの事で姉の疑ひのそれに好し關係はあつても、強ち知れて悪い事でもないから、先づ安心して、朝晩顔を合せてゐながら手紙を遣り取るなんて、お前様達は餘程妙な眞似をしてゐるねえ。」

「でも、是は此時限りで、阿母様の命令が有つたんですもの。」

「へえ、阿母様が手紙を上げると言つたのかい？」

「いとえ、然うぢやないんですけど、だつて阿母様の仰有つたことを兄様にも申上げて置かないと、私ばかりぢや守れませんもの。」

「そんなら、口でだつて言へさうなもんぢやないか。」

其 面 影

『だつて阿母さんが兄様のお部屋へは決して行くなと仰有つたばかりなのに、其様なことを言ひに行かれもせず、トいつて阿母さんや姉さんの前ぢや言はれない事だし、仕方がなかつたんですもの。』

『あく言へば、かうと……』時子は見る見る蒼筋を額に張つて、『そんなに剛情張るンなら』と同じ針箱の抽斗ひきだしから、今度は新聞紙の切端きりばしめくものを取出すかと思ふと、突然其を小夜子の前へ投付けて、『これを御覽。』

一目見ると、小夜子は颯と顔色を變へた。如何して是がと當惑したのは、これは昨夜の出会いの、ほんの時間を打合せの書付で、七時ごろにはお湯へと只其切り、後も前も切れて無いのではあるけれど……

『さあ、それでもお前はまだ剛情を張るのかいッ！』

と時子は信と妹を睨付けたのである。

三七

其面影

蒼褪めて黙つて了つた小夜子が、時子は信と睨付けた儘、尙ほも言葉を續けて、『昨夜お前のお湯へ行つたのは、七時打つと直ぐだつたよ、其處に書いてある通りだよ。鉛筆で書いてある

其面影

けど、お前の手に違ひないから。如何して其様なお前の書いた物が兄様の袂たもとに入つたのだい？ さあ、言譯が有るなら言つて御覽、さあ、言つて御覽』と責め立てたが、矢張小夜子が黙つてゐるので、口元に冷笑を浮べて、『出来まい？ 幾らお前が口巧者でも、其言譯は出来ない筈だ。ヘン、昔のお友達に逢つたが好く出来た。晝間の中間時間を打合せて置いて、晩になつてから、お湯へ行く風で家を出てき、何處かで落合つて、夫から一所に安待合へでも行つたのさ、それに違ひないのさ。何だい、自分は其様眞似をしてゐながら、人が知るまいと思つて、姉様は兄様を粗末にするから好まません、私は姉様に成代つてお世話をしたのです』と口眞似をして、『さうさ、姉様に成代つて飛んだお世話をして呉れたのさ。私はね、お禮を言ふよ。お蔭様で亭主一人形なしにしてしました』と間を置いて、口惜しさうに、『なんの、彼様な人に些ちつとも未練は有りやしない。其様なに欲しきや、呉れてやるから、何處へなと連れてツちまへ！』小夜子は涙を拭きあへず、『姉様！ 悪かつた……赦して下さい。姉様に隠れて兄様に逢つたのは實に私が悪かつたけれど、決して其様な汚けがらはしい……』

『何だい！ 今となつて其様なこと、誰が本當にするものか』と側へも寄付けぬ。

『さう言はれても、實際私が悪かつたのだから、仕方が有りませんけど、私唯御一所に散歩して、身の上の御相談したばかりで、そんな、待合へ行つたなんて——姉様も餘り酷いわ……』

『言譯をするならね、もう些と辻棲の合つたことをお言ひなさい。人を！ 身の上の相談が聞いて呆れらあ。へえ、身の上の相談ならね、家でね、皆の居る處で、立派に出来る筈ですからね。』

『だつて、それは……』と言淀むだ。家で相談する時は、私の意思は無視せられ、阿母さんや姉さんの勝手に極められて了ふは分つてゐる、外でお話して下すつたのは、兄様のお情と、心には思つたけれど、明けて其とは言ひかれて、あく何と言つたら好いものかと、身悶えすれど……『言譯が出来まい。それでもお前は汚はしい關係はないといふのかい。』

『ええ、そればかりは決して……』

『ない？ 人の目を抜いて、竊り外で出會つて置きながら、汚はしい關係はないなんて——其様な白々しいことを、お前は眞顔で能く言へるね。』

と曇みかけて責め付けられても、言譯をせれば止むを得ぬ。あく、兄様には濟まないけれどももう斯うなつては是非に及ばぬ、寧ろ打明て言つて了はう……とは思つたが、思切わるく、尙流石に躊躇はれて……

『其様なことはお取上はないよ。さあ、もつと辻棲の合つた言譯が出来るなら、仕て御覽。出来なきや、お前は兄様と姦通してゐるに極つたよ。』

えい、餘りなと、

『そんなら事實を言つて了ひます。内で御相談すりや、姉様が大變な誤解をして私を憎んでゐらつしやる所ですもの、私の思はくなんぞ通りませんわ、ですから、兄様が私を庇つて……』
『澤山だよ、其處迄聞きや！』と時子はクワツと急ぎ込んで『どうせ兄様はお前の肩ばかり持つて大騒ぎやるのさ、お前は兄様に好かれてゐるのさ、私は嫌はれてゐるのさ』と思ひ掛けず潜然と泪を零して、口惜しさうに『何だい、其様なこと、聞かなくつたつて、分つてらい！』
『あら、然ういふ意味ぢや無いンですよ。私は唯……』

『えい、もう、聽かない！ 言譯すると言ふから、何を言ふかと思や、自分が大騒ぎされることをさも自慢さうに……何だい！』と切齒して口惜がる。

小夜子はおろ／＼しながら『あら、姉様！』と思はず姉に取纏り、『何卒其様に怒らないで頂戴よ。私決して其様な意味で……』

『畜生！』といふ帛を裂くが如き絶叫と共に、翩と空に二尺尺、小夜子の頬にピシリと中ると呀と小夜子は目の下を抑へ、流石に恨めしさうに姉を見据えて、

『姉様！ 餘りだわ……』

『何が餘りだい！ 人の亭主を寢取つて置いて、何が餘りだい！ 義理知らずの……い、い、い、

犬め！畜生め！……」

ヒイと小夜子は泣聲悲しく、其儘其處に衝伏して、肩で浪を打たせるのであつた。

三八

折柄隠居が歸つて来て、奥座敷の騒ぎを聞付け、急いで来て見ると、姉妹が花を散らして狼藉たる有様に、吃驚して中へ入り、一方を慰め、一方を叱り、今時分うそくと視き込む福の馬鹿をも序に叱つて、小夜子諸共逐立てた跡は、時子と差向ひの密談となつて、久らくは音沙汰がなかつた。

小夜子は奥座敷を出ると、其儘納戸へ這入り、後から隨て来て何やら喋々と饒舌り立てる福をば、今日ばかりは煩さうに叱つて勝手へ逐遣り、嫁入の時に買つた我筆筒に凭れ掛つて、悄然と頭垂れてゐたが、偶と面を揚げて、其處の鏡臺を取卸し、我顔を映して見ると、今打たれた跡が腫脹れて黒痣になつてゐる。之を見ると、衝と袖を顔へ當て、又潜々と泣くのであつた。良あつて涙を斂めると、信と思案を定めて面を振上げて、其處の棚のズツクの鞆に目を注げ、踏臺をして之を取卸すより、手捷く筆筒の抽斗を明け、柳行李の蓋をも取つて衣類や帯や足袋までも、當座入用の分を一通り取揃へ、さて凝然と考へてゐると、

其面影

其面影

隠居が衝と這入つて来て、小夜子と面を看合せるや否や、お前はまあと其處へ坐り込み、飛んだ事をしてお呉れだれえと、小夜子が何と辯解しても承知せず、小言やら、愚痴やら、百曼陀羅聞かせた揚句に、此様な事を仕出來かして、お前は是から如何する積だといふ。えと、阿母さんは姉様さんの言ふ事ばかりを信用して、私の言ふ事には耳も藉して下さらぬと、小夜子も少しは恨めしくも思つたが、直ともう如何でも好いといふ氣になつて、私は是から千葉へ行つて、勝見様が世話をしてやると仰有いますから、バイアル、ウーマンといふ棚経讀みの尼さんのやうなものに成りたう御座いますと、古い隠居の耳にも分るやうに、嚙碎いて話をすると、うとく、勝見様とはお前の友達の嫁づいてゐる、アソソレ牧師とやら爲てゐなさる、おと日外も夫婦連で尋ねて下すつたことのある彼の方だね。彼方なら私も面馴染はあるお人、其は何よりだと、安心するよりは先づ喜んで、昨夜澁谷の世話に成れといつたことは如何やら忘れたやうな面色であつたが、行懸けに一寸學校へ寄つて兄様に一通り事由を話して行く積と聞くと急に面を曇らせ、兄様に會つたらオイソレと遣つては呉れまい、それよりか爰は黙りで行つて了つて、後で私から今日勝見様が出て来て二三日貸して呉れと小夜を連れて行きなすつたと言つて置くから、お前は其儘曖昧に彼地に居附いて了つた方が好いではないかと、隠居は隠居だけに小生面なことをいふ。小夜子は一寸考へて、そんなら然ういふことに致しませうと、素直

に言ふ事を聞いたので、隠居の機嫌は忽ち直り、お前は姉様と違つて素直で好いの、彼娘は子供の時分から大の肝癪持で、怒るともう親兄弟の見界がなくなるから、私は一生苦勞が絶えぬの、お前も打たれて口惜からうが、身から出た錆と諦めるの、些との間辛抱して彼方へ行つてゐる中には、私が又好い嫁入先を探して直き喚び還してやるのと、氣休めらしいことを並べて、急に小聲になり、それはさうとお前はお金を持つてゐるかいと、心配さうに凝然と面を視る。小夜子は一旦嫁づいた關屋といふを離縁になる時、貰つて來たのをまだ其儘持つてゐたので、其事をいふと、そんならお金は要らないれと辛と安心して、其よりして後から荷物を送る手筈を極め、着て行く衣服の世話迄焼いて、起つて車を誂へに行く、其間に小夜子は手早く其處らな片付けて、身仕度を仕て了ひ、責て一筆兄様にと思つたが、直と其は思返して、茶の間へ來て一つ二つ話してゐると、車が來る。では阿母さん、と兩手を突き、私はもう参ります、永々お世話様に成りましてと平伏して、姉様は御機嫌の悪い所ゆゑ、態と御挨拶を致しません、兄様へは阿母様から宜しくと起上ると、隠居も後から隨つて來て、玄關迄見送つて、此處で又改めて告別の挨拶をする時、隠居は言ふに及ばず、小夜子も思ひの外平氣で、泪一滴零すでもなかつた。が、門口へ出て、待せた車に鞆と合乗をして、車夫が彌轆棒を舉ると、福が挨拶に戸惑ひして、では行つてらっしゃいませといふのを聞くと、如何した機か、急に胸が通つて衝と

涙が迸り懸たので、周章て手巾を面に當たまゝ、あゝ、哲也も歸らぬ中に、小夜子は遂に弓町の家を離れたのである。

三九

小夜子の車が弓町を出離れて、本郷通りを一直線に走るころは、初冬の日の暮行く空を、棲へ急ぐ夕鴉が二羽三羽づゝ頻に電線を掠めて過ぎ行く時分であつたが、家は有つても居處に困り、友を使つて他郷の空を志す身は、今頃の道行く人は、大方は我家へ歸る人と思つてさへ、其幸福の身の上が美ましく、あゝ、家と名が付きや殖生の小屋も、餘所の金殿玉樓にも勝るものを、其懐かしい家の味を、まだ十分に味はつたことがなく、生れた家はありながら、夫にさへ住附かれず、かうして獨り淋しくも浮世に流離ふ此の身の果は何となる事かと、小夜子は泌々我運命の拙きを歎くのであつた。

僕ふれば、今は半年餘りの昔、便る夫に死別れて、悲ない身になつて家へ歸つて來れば、繼しき母や氣の合はぬ姉に邪魔にされ、始終出て行けがしに待遇はれても、悲しいかな、行處のない身は、矢張り辛抱してゐる外はなく、熟々辛いと思ふ事のある度に、顔さへ見知らぬ生の母が切に戀しく、慈悲深かつた亡父が坐るに慕はれて、時々其筐の寫真に物を言ふことさへ

其 面 面

其 面 影

あつた。固より人の數は濱の眞砂の讀み盡されぬ程あればとて、それは皆由縁のない他人で、誰一人力になつて呉れる者もなければ、鞆々たる孤獨の身は、好し繁華な都に住むだとして、深山に住むと何の異りもない。此時頼むは神の御恵み、縋るは其子基督の教へばかりであるけれど、それもこれも餘りに氣高く、神々しく、人氣離れがしてゐて、罪の深い身は受けやうにも縋らうにも手が届かず、祈禱をしても、讚美歌を唱つても、孤獨の身は矢張り孤獨と感ぜられて、堪へがたい淋しさを獨り泣くことも有つたのであるが、不思議な事は、初は甚く心の置かれた義兄の哲也に漸く親しむで、其温かに濃やかな同情を受けるにつれ、今迄暗黒であつた此世が、どうやら東雲の空ほどには明るくなり、我身にも添ふ影があるかと思へば、淋しさも幾分か薄らぎ、此頃になつては、浮世は憂世といふけれど、滿更然うばかりでもないと思ふことも有つて、繼母や姉に虐待されながらも、尙時には心から莞爾微笑まれるなど、段々心に餘裕が出来て見ると、其人の情が尙更嬉しくなり、頼もしくなつて、どうも心に染附いて忘れられず、あゝ姉様は頼もしくないけれど、其縁に繋がれて、私は好い兄様を持つて幸福など、竊に運命の我に笑ひ出したを喜むであつたものを、由ない姉の嫉妬に隔てられて、今は其人の側にも居られず、深き厚き人の情に我から背いて又便りない身にならねばならぬ仕儀となつたが、それにしても暇乞もせずに東京を去るとは、餘り恩を忘れた仕方と、若し後で恨まれたら……は餘り自惚ら

しいけれど、爪弾きされたら何とせう。母に逢はずに行けと言はれた時には、惣じ逢つたら別れがと、それに同意はしたけれど、夫では人間の義理に背く。寧ろ車を引返へさせうか、いや矢張此まんま逢はずに行つたがお互の……
『あら、兄様ぢやないか知ら……』

と柳原通を行く時、小夜子は思はず車を乗出して、右側を行く洋装の人を凝然と目守めた。

四〇

小夜子が哲也かと思つた其人は、成程背格構なら、歩行付なら、哲也に全然其儘ではあつたが、此方向いた面を視れば、似ても似つかぬ餘處の人であつたので、小夜子は落膽して、併し考へて見ると、今頃此様な處で逢ふ筈がない、我ながら馬鹿々々しいと思ふ傍から、萬一此處らで目に懸れたらと、つい又頼まれぬ事を頼む氣にもなる。其中に柳原も過ぎて了ひ、心は後髪を引かれるやうに思ひながら、身は一向走る車に運ばれて、いつしか兩國の橋も渡ると、偶と『小夜さん！……』と聞慣れた其人の聲が何處かでしたやうに思はれたから、延上つて其處らを回顧して視たが、其人らしい影も見えれば、矢張空耳だつたか知ら、と思ふ途端に、車が衝と横町へ逸れる。と、もう向ふに停車場の電氣が燦然華やかに見えたので、あゝ、もう是非に及ばぬ

と諦められずに諦めたが、車夫が息急き切つて驅付けて、和りと轆轤を卸すや、疾し遅し、消魂しい汽笛の聲と共に汽車が出た。あ、乗後れたと思ふと、諦めた身にも如何やら嬉しいやうな氣もして、車夫は氣の毒がつて言譯迄するのにと、其手前も少しは心恥かしかつたが、懸て手荷物を待合室へ運ばせて置いて、車夫は轎つて還し、其處のベンチに腰を掛けて見ると、もう次の發車を待つより外は如何爲様やうもない身となつた。

今度の下りは六時半。まだ一時間餘も間があるので、停車場の内も驛夫が暇有り貌に其處等を彷徨く外は、人氣が少なく、ガランとして電燈ばかり差明く光る中に、小夜子は手巾を頬へ當て、悄然と鞆に凭れ乍ら、尙ほ考へて見たが、如何考へて見ても、此儘にして行つて了ふのが、餘り名残り惜しいので、切て電話でなりと、お暇乞をして行かうか知らと思つた。さう思つたばかりで、未だ然う極めた譯ではなかつたが、折節側を赤帽が通つたので、呼止めて聞くと、電話は自働電話が停車場前に有るといふ。小夜子は態々其を聞いて置きながら、格別掛けに行くでもなく、あ、然うですかとばかりで又萎れて、何かは知らず深い想ひに沈むであつたが、懸て嘸と太息して、面を擧げて、其處の時計を見ると、もう六時。電話を掛けるなら今の中と、起つたり居たり騒つく中に、あれ、五分過ぎ、六分過ぎ、え、もう、十分になつて了つた。後二十分と思ふと、もう堪まらなくなつて、前後の辨もなく、手荷物は隣りの人に託し置

其面影

其面影

き、見ともない程衣服の裾を蹴開いて停車場を駆出るなり、卒然其處の自働電話室へ這入つて懸て通話を始めるのを聞くと、

「兄様ですか？ 私小夜でございますがねえ、はあ、あのねえ、お言葉に負いて……モシモシお言葉に負いて済みませんけどねえ、私如何しても千葉へ……千葉……千葉ですよ。はあ、千葉へ行かなきゃならないことに成りましたからねえ、是から参りますから、一寸お暇乞に……は？ いえ、然うぢやないのですけどね、如何しても……モシ、如何してもね、少し事情があつて、家に居られないやうに成りましたから。いづれ詳しい事は彼地から手紙で……は？ え、もう兩國の停車場まで参つて居りますの。はあ？ はあ？」と分りかたて、「何だか仰有る事が薩張りませんから、もう少しお静に。」漸く分つて「ですけどねえ、入らしつても、最う間に合ひませんよ、もう直ぐ汽車が出ますからね。え、終列車ですか？ 終列車は九時少し前ですけどね、でも、もうお目に懸つても、到底も無益なんですから、寧ろ此儘……はあ？ はあ？」と又分らなくなつて「もう些と小さな聲で。え、兄様も千葉へ入らつしやる？ 後から？」と嫣然して「そんならお待ち申します、此處で。いえ。欺しはしませんよ。え、大丈夫」と又嫣然して「では、何卒お早く。左様なら。」

三十分と経たぬ中に、兩國停車場へ車で駈付けた哲也は。車夫が轆棒を卸すが否、翻然と車を降立つて、わな／＼顛へる手先でポケットを探り、幾何かの貨錢を投るやうにして與ると多かつたと見えて、車夫が濟みませんを三つ四つ言つてヒヨコ／＼と頭を垂げる、それは視向もせず、卒然停車場へ驅込んでキヨロ／＼と四顧したが、見えなかつたので三等待合室の入口へ来て、と内を覗くと「兄さん！」と向ふのベンチを衝と離れたのは其人。急いで側へ行かうとして、何か踏付けると「お、痛！」といつたのは誰だか知らぬが、失敬々と拜み倒して置いて、危なく蹴躓かうとした其處の蝠蝠傘をヒヨイと跨いで、えい、邪魔ツけな、此様な處に立話してゐる人の後をグルリと廻ると、辛と側へ来て、

「あゝ、心配した？」と嘸と一息。「彼様なことを言つて、ヒヨツと行つて了やしないかと思つて……おく」と小夜子が一禮して擧た面に目を留めて「如何したんです、其面の志は？」
「これですか？……」

と伏目になつて黙つて了つたのは、何か仔細のある事と、
「此處ぢや話が出来ん。何處か其處らへ行つて話をしませう、貴方のだれ、これは？」

影 面 其

影 面 其

と其處の鞆へ手を掛けて、「此切かれ？」と一寸面を視る。

「は、それだけです」と遲疑して「私が持つて参りますから。」

「まあ。好い／＼」と提げて見て「おく、却々重たい、どうして是が小夜さんに持つてけるもんか。」

「どうも恐入ります。」

連立つて停車場を出ると、薄暗い處で哲也が立止つて、

「かうつと……話は長くなる。小夜さん！」と振反つて「かうして貰へまいか、兎に角今夜はれ、此地に泊ることにしてさ、而して一つ緩り話をしやうぢやないか？」

「泊るのですか？」と生返事をする。

「さう。到底も一寸では話は濟みませんよ。種々相談もあるから。」

「ですけど、私……成るべく……あの、今晚の中に行きたいと思ひますから」と一寸抵抗してみ。

「其様に急ぐ必要が有るんですか。」

「必要ツて、別に何ですけど……」と愈不得要領なことを云ふ。

「そんなら好いぢやないか。僕はね」と今夜は何故か平生の私が僕になつて了つて、「貴女が家

に居られなくつたといふ其事情を聞いた上で、少し話したい事があるのだ……聞きたい事もあ
る』と附足すやうに言つて、『而して其上で、貴方がそれでも如何しても千葉へ行くといふのな
ら、僕は最う留めない、潔く分れる』と思入つて言ふ。

『でも、もう到底も無益なんですから』、ときも情なさうであつたが、

『無益でも何でもさ、まあ、兎も角も緩り一つ話をして見やうぢやないか。ね？ 然うしやう
く』と獨斷專行といふ氣味で、哲也が匆々と歩き出したので、小夜子は誠に餘儀なさうに
其後に隨つて小半町許り行くと、一軒掛離れて、餘り好くはなかつたが、諸商人御泊宿でも無さ
うなのが有つたから、まあ、話さへ出来りや好いにして哲也が内へ入る。と、小夜子は何故と
もなく急に逃出したいやうな氣がして、門口で一寸躊躇ふと、『如何したんです？』と哲也が振
反つたので、我知らず衝と續いて入つて了つた。

成るべく静かな座敷をと注文して案内されたのは、裏二階の、一番盡頭の、随分お粗末な、
晝間見たら興の醒めさうな座敷では有つたが、壁仕切で隣へ話が聞けさうにも無かつたを取
得にして、それで不承して、私は濟んだが貴女は未だ飯前かと聞くと、小夜子は今は喰べたくな
いといふから、其は後廻しにして、飲めぬ口ながら、何も取らぬが可怪くて、麥酒に菓物とい
ふところを誂へて、女が起つて行くのを待兼たやうに哲也が、

影 面 其

『一體、ま、如何したんです？』

とまだ何も知らずに居る其面を見ると、小夜子は最胸が一杯になつて物が言へず、卒然手巾
を顔へ當て、潜々と泣出した。

四二

良あつて小夜子は漸く涙を斂めて、昨夜哲也に分れて家へ歸ると、母に澁谷の世話に成れと
難題を言はれて、最う遲疑してゐる所でない、今日姉に當つて碎けて見たら云々と、有つた
次第を具に語る。

それを哲也は逐一聴取つて、『ふうむ、然うでしたか。それで能く分つた』と首肯いて、『が、
しかし、時は怪しからん奴だ！ 幾ら腹が立つたからと云つて、貴女の面を裁尺なんぞで打つ
といふ法はない。實に怪しからん奴だ！』と憤激して、『宜しい！ 私が屹度其中に思ひ知せて
遣る』と目を光らせる。

小夜子は周章で、『ですけど、姉様ばかり悪いのぢや有りませんから、打たれた時には、私も
餘りだと思ひましたけど、能く考へて見ると』と急に萎れて、聲が小さくなつて、『私も悪いの
ですから……』

影 面 其

『其様な事はない』と哲也は熱心に打消して、『貴女は能く其様な事を言ふけれど、貴女に些とも悪い所はない、皆時が悪いのだ。が、まあ、其は兎に角さ、貴女が然ういふ譯で家を出たのなら、これは如何しても千葉へは遣れんねえ、遣つては私の面目が立たん。から、家の手前は千葉へ行くと言つて出て来たもんなら、矢張り然ういふ事にして置いても好いから、此地で當分下宿生活を行つて貰へまいか？ 差當り今夜は此家に一泊して、明日私が相當の下宿を探して来るから、然うしたら其處へ行つて落着くと、ね、然ういふ事にして貰ひたいが、不好まいか？』

『は。』
と小夜子は頭を垂げたばかりで、後は何とも言はず、其儘凝然と考へてゐるので、哲也は少し不思議に思つて、

『それでは不好のかね？』

『誠に兄様には濟みませんけど』と遲疑して、『私矢張り千葉へ……』と尻切になる。

『行きたい？』と目を睜る。

『行き度い事は些とも無いのですけど、でも、如何考へて見ても、矢張り行つた方が……』

『好い？』

『ええ』とまた小聲になる。

其 面 影

其 面 影

『如何して？』といつても、小夜子が黙つてゐるので、『そりや、私の案は貴女の嫌ひな隠し事をするのだし、それに露顯した時の事を思ふと、餘り妙でもないから、夫で行つた方が好いといふのかね？』

『それも有りますけど……』

『それも有るが、そればかりで無いと』と考へて、『ぢや何か、私の世話には最う成り度くないとでもいふのですか？』と半分は調戲に言ふと、

『いゝえ、成り度くないなんぞと、そんな……』と小夜子は熱心になつて、『兄様さへ御迷惑なきや、私一生お世話に成つてゐたいのですけど……』と又差問へる。

『あ、分つた！』と哲也は膝を打つて、『何だらう、姉様に濟まないとでもいふんだらう？ ね、然うでせう？』

『それも有りますけど、そればかりぢや無いのです。』

『はてな！』と小首を傾けて、『ぢや、別にまだ何か仔細が有るのだね』と考へて見たが、『もう僕にや分らん。其様に焦らさずと、もう好加減に言つて貰はう。』

『誠に濟みませんけど、こればかりは……』と如何にも切なさう。

『言はれないのか？』

『ええ……』ともう泣聲になる。

其面を哲也は凝と視てゐたが、

『さうか、それで大抵私にも分つた』と信となつて『貴女は何だれ、私が亂倫の事でも言つて、貴女に逼りはすまいかと、其を掛念に思ふんだね？』

『いえ、然うぢやないんですけど』と潜々と涙を零す。

『然うぢや無いのなら、私に言はれない筈が無いぢやないか。お互に何事も今迄打明けて來た關係だのに、如何あつても言はれないふのなら、其様な事と外思へんぢやないか？』

『兄様？ 赦して下さい……』と小夜子は面を手巾で掩うて、遂に泣出した。

四三

『ぢや、矢張然うなんだね』と哲也は厭な面をして、『貴女に其様な亂倫な事を強ふる——私は其様な人間かれえ』と如何にも情なさうに言つて歎息すると、

『然うぢや有りません』と小夜子は面へ手巾を當てた儘、狼狽て頭振を振つて、『そんな誤解をして……』

『だつて然う外思へんぢやないか。』

其面影

『然う外思へないたツて……』と少し甘へるやうな氣味もある。

『然うでなきや、私に言はれん筈がないぢやないか？』

『私に言はれない……』と矢張り頭振を振つてゐる。

『困るなあ、貴女にも！』と哲也も倦れて、『ぢや、如何あつても譯は言へないと、而して此儘別れやうといふんだね？』

小夜子は黙つて只頷く。

『貴女も實に……』と後は溜息になつて、『ぢや、どうも仕方がない、餘り馬鹿氣てゐるけれど、どうも仕方がない、此儘別れる外どうも仕方がない』と残り惜しさうに反覆して言つたが、今しがた婢が持つて來た誂への麥酒が、未だ手着かずに其儘に成つてゐるのを衝と引寄て、手酌で玻璃盃へゴホくと注ぐと、息をも續がずに之を飲乾して、急いで手巾で髭を拭いて、嘔と苦しきうな息を吐く。かと思れば、又一杯注いで又一息に仰つて、もう止すかと思ふと、又壘へ手を掛けたから、小夜子は堪らなくなつて、狼狽て横合から其を奪つて、

『あら、お酌なら私が見ますけど、其様に飲つて好いのですか？』

と平生の酒量を知つてゐるから、心配して聞くと、哲也は少し自暴氣味で、

『だつて、酔つた紛れにでも別れなきや、餘り馬鹿氣てゐて別れられんぢやないか。』

「ですから、私も言へる事なら、言つて了ひますけど……あく、寧ろお目に懸らなきや、好かつた」と溜息をする。

哲也は最う之には相手にならず、時計を出して見て「や、もう八時十分過ぎだ」と獨言のやうに言つて、衣囊へ納ふと「急いだら、今からでも間に合うだらう。終列車で行きますか？」といつても小夜子は黙つてゐる。

「いや矢張り明日にした方が好いかなあ。終列車だと、向ふへ着くのが餘り遅くなるかられえ。」
 久らく間を置いて「ぢや、此家の勘定は今私が歸りがけにして行くかられ、貴女は未だ飯前だ、腹が空いたらう、まあ、飯でも喰つて緩くりお休みなさい」と徐々帽子を引寄せて、「私は最う歸らう」と口には言ひながら、逡巡してゐたが、廳で思切て、「左様なら！」といふ拍子に衝と起上ると、小夜子も狼狽して起つて来て、今や障子を明けんとする哲也の腕にヒシとしがみ付いて、「兄さん！」と凄じ程眞面目な面を振上げて、「まあ、待つて頂戴！ 私如何しても此様な事でお別すること出来ませんよ。」

「だつて、貴女は斯うして別れるのが希望ぢやないか。」

「厭、私……厭ですわ！……」と頭振を振つて、衝と哲也の胸に面を伏せて、「此處な厭な想してお別する位なら、私寧ろ一思に死んで了ひたい……」と凝然としがみ付いた手に力が入ると

其面影

熱い涙が哲也の手の甲にはら／＼と降り掛る。

哲也は忽ち目の眩めくを覺えた。我を忘れて、卒然小夜子を横抱きに、引据えたのか、引据ゑられたのか、諸共に其處にくづなれると、腸を絞るやうな聲で、

「小夜さん！」と呼懸けて、「貴女は實に分曉ない人だれえ……」

四四

「貴女も實に分曉ない人だれえ」と哲也は横抱にした其手は離すことを忘れて、凝と泪に濡れた小夜子の面を視ながら、「そりや、貴女の氣ぢや、家へ内所で世話に成つたり何かしては、終局には私が……僕が如何な事を言出すかも知れんと思つて、それで無理無體に振拏つて行つて了はうといふのかも知れんけれど……」

「ですから、私然ういふ譯ぢやないと言つてるぢや有りませんか」と小夜子も熱心の餘り、絶つた手を離すことを忘れて、「私些とも」と満身の力を込めて、「お別したいこと無いわ……」

「そんなら、僕の言ふ事を聽いて、此方に居て呉れたつて、好きどうなもんぢやないか。」

と、小夜子は行詰ると、絶つた手が自ら離れる。哲也も氣が附いて早速抱いた手は離したが、しかし熱心は面を離れず、

其面影

其 面 影

「ね、小夜さん！ もう一遍考へ直して貰へまいか？ 僕が貴女を引留めるのは、決して何も其様な野心が有るからではないのですよ。僕あれ……僕あれ、今貴女に行つて了はれると、實に弱るんだ」と頹然となつたが、又面を擧げて、「餘り意久地のないことを言ふやうだけれど、好いやれ、貴女の事だから、笑つちや呉れまい、何も角も打明けて言つて了はう。僕はね、實は家が彼様だらう、始終不愉快で、氣が冴えないで、何一つ思ふ様に行かない。失意も失意、非常に失意の境遇なんだ。得意で調子附いてる時にや、意氣が壯だから、少し位の外界の刺戟は反撥して受付ないけれど、失意で意氣の阻喪してる時にや、俗に謂ふ弱り目に祟り目だ、僅かの刺戟にも直ぐ感じて、深くぢやないが、病的にだれ、生活の苦痛を感じて来る。斯うなると、人間といふ人間が皆殘忍刻薄に見えて、堪まらなく厭になる。厭になるけれども、此方が人間を罷めない以上は、人間界と交渉を絶つ譯に行かないから、その殘忍な、刻薄な、手前勝手な、鼻持のならぬ奴等の間に立交つて食を求めて行かなきやならんけれども、此程不愉快な事はない。それも僕に圓滿な家庭でも有りや、家庭の爲に辛抱する氣になるかも知れないけれど、僕にや其様な物はなし、考へて見ると、實に無意味だ。生活したいから、生活してゐるのだが、其生活たる、苦痛の外に何もない。だから苦痛を受けに生活してゐることになる。此様な馬鹿々々しい事はないが、それかと云つて死ぬ氣にもなれない。實に矛盾極まる話さ。僕み

其 面 影

た様な弱い人間は忍耐力がないから、かうなると直き自暴が起る、えい、寧ろ、酒は不味だ、酒でも飲習つて無茶苦茶に成つて了はうかと思ふことが屢あるけれど、其様な時に偶と貴女の事を想出すと、荒びた氣が自然と鎮まつて、又辛抱する氣になる。如何いふ譯だか、僕にや善く分らん。そりや考へて見ると、貴女も随分不幸な人だ、宛然孤兒だ、僕が力にならなきや、誰一人力になる者はないのだから、それで義侠心が起るのだから、何だか知らないが、僕一個の爲には無意義な生活が、貴女の爲だとなると、意義を有つて来る、沮喪した勇氣を振起して又奮闘する氣になる、それも貴女の身に直接に關係の有る事ほど、不思議に勇氣が出て来る。此處に又一寸妙な所があるがね、之を只同情だ戀愛だと、謂つて了や夫迄だが、僕にや何だか普通の同情や戀愛以上の或物が有るやうに思はれる、何だか分らないが、其様な物が……が、ま、それは兎に角さ、貴女はだから今の所僕に取つては唯一の慰藉であると同時にだれ、僕を生活に繋いで置くソノ……まあ、早く言や、連鎖のやうなものだれ。その連鎖の、慰藉の貴女がさ、事由を言つて納得もさせず、無理無體に千葉へ行つて了ふ日になると、僕は後で如何なるか分らんよ。」

と凝然と小夜子の面を視た目には、成程哲也の所謂或物の影が閃めくやうであつたが、なに、能く見たら、其は矢張り尋常の戀愛の焔であつたかも知れぬ。

哲也は又言葉を續いで、『だから僕が貴女の世話をするといつても、半分は自分の爲なんだから、決して其を恩に被せてどうの斯うのといふ、其様な野心は些ともない。そりやれ、僕だつて人間だもの、實を言や、時とすると兄妹以上の心持になることもあるさ。其様な時にや、あゝ、時と貴女と入代つて呉れりや好い位は思ふ。』慄然と小夜子が戦へたので、哲也は狼狽して、『けれども、夫は出来ない相談だ。ね、出来ない相談だらう？ だから僕は其様な非望は懐かない。なに、妹で好い。妹で好いから、何か一生涯の關係を繼續して行つて貰ひたい。といつて、無論僕は貴女の身體を束縛する氣はないよ、だから、其中に相當の縁が有つたら、貴女を嫁けはするけれども……』

『兄さん！』と小夜子は焦燥しきうに、『私最う何處へも嫁かないと言つてるぢや有りませんか。』

『だが、夫ぢや僕が貴女の幸福を妨げるやうで心持が悪い。』

『だつて、私だつて兄様が』と小聲になつて、『其様に仰有つて下さる處で、嫁なんぞされませんか。』

『成程』と一寸行詰つて、『しかし只妹と思つてるんだから、好いぢやないか。』

其面影

其面影

『だつて只た今兄妹以上の心持になる時も有るツて仰有つたわ。』

『さう、けれども心持だけなら、好いぢやないか。』

『心持だけだつて罪惡だわ。』

『さう、そりや然うかも知れんけれど……』と行詰つて了ふ。

『ですから、私實に辛いのですけど』と小夜子は熱心に、『此様なお話しない中に何にも言はないでお別れして、さうして神様の前で悔い悔めやうと思つてたのに、兄様が……』

『悔い悔める？』と哲也は聞答めて、『ぢや、何か、貴女も矢張然うだつたのか？』

小夜子は黙つて了つた。

『さうか』と哲也は始めて合點が行つて、『それで彼様に事由を聞いても、言はずに別れやうと仕たんだね。さうか』と凝然と考へ込む。

小夜子も泌りとなつて、『私今迄些とも自覺してゐなかつたんですけど、先刻停車場で電話を掛けて了ふと、何だか斯う目が覺めたやうな氣がして、私姉様に打たれるのが當然だと思ひましたわ。ですから、辛いけど、此儘お別して了や、兄様のお身體にも疵が附かないし、姉様だつて……』

『いや、構はん、僕は！』と哲也は焦燥となつて、『僕の身體に疵が附かうが、附くまいが、其

様な事は關はんが』と後は恨めしさうに『貴女は罪惡だといふと、直ぐ然う逃げる氣に成るんだれえ。』

『だつて』と小夜子は切なさうに『他の罪惡とは違ひますもの。義理の兄妹だつて兄妹なのに、如何して私此様な心に成つたかと思ふと實に』と力を入れて『情なくなりませわ。』

『ぢや、兄妹でなかつたら？』と哲也がクワツと意氣込むと、

『兄妹でなかつたらとは？』と小夜子は不思議さうに其面を視る。

『僕が時と縁を切て了や、それで貴女とも兄妹でなくなる。然うしたら好いのか？』

『だつて、私には姉様は矢張り姉様ですもの。私それでは濟まないわ。』

『さうか、貴女は矢張り然う思ふかなあ』と情なさうに萎れて『ぢや、どうも、もう仕方がない、僕は矢張り満足する。だから、貴女も責て此地にだけは居て下さい。』

『だつて、夫ぢや』と小夜子は愈切なさうに『心に忘れる暇が有りませんもの、始終罪惡の犯し通しですわ。』

『貴女は信者だつたれえ』とその信者であるのが恨めしさうに、黙つて凝と考へ込むと、折柄一間隔てた前の座敷で、酒でも始まつてゐるのか、大勢の聲で哄然笑ふ聲が聞えた。其聲を聴くと、哲也は急に又焦燥となつて『ぢや、仕方がない！ 別れやう。』

其面影

其面影

『え？』と小夜子は我耳を信ぜぬやうに。

『どうも、仕方がない、然う貴女が自分の身體ばかり庇つてゐるンなら。』

『然ういふ譯ぢやないんですけど……』

『いや、もう、好い！』と益焦燥しながら『僕は最う此儘家へも歸るまい、出て了はう。もう如何なつても構はん、是から先は暗黒の世の中だ。は、は、は』と妙な笑方をして『ぢや、別れやう。其代り僕あ何だ……僕ア別れたつて貴女の事は何だ……』と思掛す潜々と落涙して、

『一生忘れん！……』

『兄様！』と小夜子は思はず絶付いて『其様に私の事を思つて下さつて？』

『思はずにや居られんもの』と未だ涙が止まらぬ。

『本當ですか？』と信と目が据わる。

『迷惑か？』と手の甲で涙を拭きながら。

『ぢや、もう、私……私の身體なんぞ……』と息が詰まつて『如何なつても好いわ、兄さん！』と絶つた手に凝と力が入ると、戦々と顫ひ出す。

『えッ？』と哲也は猛然と振反り、卒然小夜子の肩へ手を掛けて『如何なつても好い？』と意氣込むのだが、小夜子はもう口が利けなかつた。黙つて頷く其蒼糲めた面へ、哲也の面が衝と寄

るかと思ふと、熱き唇と冷かなる唇とが、あく、遂に相接した……

此時停車場近傍で消魂^{けいたま}しい汽笛の聲がした。終列車は先刻^{さつき}がた出たのであるが……

四六

今日は小夜子が家を出てから三日目で、日曜で、上天氣で、而して朝から來客。三人目のに晝飯が出て、それが一時過に歸るのを玄關迄見送つた哲也が、我居間へ引返して何か彷徨^{さまよ}してゐると、

『福！それを奥で擴げちや不好^{ふけ}よ、まだお客が有るかも知れないから。茶の間の椽側でお仕。』
と何やら婢^{まんないひつ}に命^{めい}けながら、時子がサラリと障子を開けて入つて來た。見ると、柿の剥いたのを菓子皿に盛つて持つて來たので、其を其處へ置いて自分も座ると、

『今お客様へ出さうと思つて剥いてたら、お歸^{かへ}なすつたもんですから、此様に背負^{しよ}ひ込んすつたんですよ。一つ食上^{めしあが}れな。美^おいのですよ。』

『私は是から出懸けなきやならんが』と衝立つたまゝで。

『おや、今日もお出懸？』と一寸面を見上げて、『だつて之を食^{あが}つて行らツしやれないことも無いでせう。折角剥いて來たんですから、一つ食上^{めしあが}れな。』

其 面 影

其 面 影

不承々々に哲也が坐つて、楊枝が附いてゐるのに、指で撮むで、黙つて、其癖然^{まづ}う不味^{まづ}くもなきううに、むしやく喰^やり出すと、

『此頃は大變お忙しいのですね。一昨日の晩はお歸りが一時過だつたし、昨夜も十一時過ぎてましたが、今日も亦^{おそ}晩^{おそ}くなりませんか？』

『さう、晩^{おそ}くなるかも知れん』と曖昧^{あやふや}な事を言つて、切りに柿ばかり夷^{たひら}げてゐる。

『矢張り學校の方の御用なんですか？』

『さう』とばかりで、プツと核^{たね}を吐出す。

其吐出した核を、時子は何の必要あつてか凝と見ながら、『家にも種々^{いろく}お話が有るンですから、今日は御用が済み次第歸つてらしつて下さいました』と眼を柿の核から夫の面へ移す。

此時哲也は四切目が五切目かを撮^{つま}むで、口迄持つて行つた所であつたが、と聞くと、入れるのを見合せて、一寸上目で妻の面を見たが、見たばかりで、何にも言はず、見合せてゐた奴を頬張つて、もぐくやり乍^{たね}ら核^{たね}を吐出してゐると、『ね、貴方』と返答を催促されたので、殘餘^{あそ}は鶉呑にして、

『何時だつて用さへ濟めば歸つて來るのです。』

『其は然うでせうけど』と時子は一寸言ふことに困つて、厭な面をしたが、『貴方は其様に私

と口を利くのがお厭なんですかねえ、』

もう其様な事に答ふる必要を看出さぬといふ面をして哲也が黙つてゐると、

『先達て私が小夜の事で少し言過したもんだから、貴方は其を今だに根に持つて、其様な可怪ア
しな處置振を爲さるんでせうけれど、彼時の事だつて然う私の癖ばかりでせうか？ 其からだ
つて、私の胸に落ちない事は幾らも有るし……』

『其話なら又にして貰ひませう。私は今出懸けなきやならないのだから。』

『ですから今お話したいといふ譯ぢやないのですがね、今日は成る丈早くお歸ンなすつて、貴
方のお胸の霽れるやうに何も角も言つて下さいました。然うしたら私も申し上げ度いことも有り
ますから、其を申して、悪い所はお詫びもしますから。私だつて貴方が何時迄も其様に機嫌を悪
くしてゐらしツちや、實に厭な氣持がしますもの』、といふ目には涙を含つてゐる。

是で哲也も幾らか氣が折れたか、和かに、『ぢや、成るべく早く歸つて來ませう。ま、兎に角
今は出懸けなきや成らんのだから、衣服を出して下さい。』

『和服で行らツしやいますか？』

『まう。』

『何にしませう？』

影 面 其

『何、一寸、何か……何でも宜しい。』

時子が起つて納戸へ行つた後で、哲也は急いで起上るや、居間の正面に掛けた額の裏を探り、
其處に忍ばせた鱈皮の紙入を取出して、一寸中を檢めてから、机の抽斗へ入れて無意味な顔な
してゐると、躄て時子が衣服を一通り、新しい足袋迄添へて持つて來て手傳つて着易させなが
ら、

『あ、先刻小夜の所から葉書が來ましたッけ』、と憶出して、『貴方にも宜しくと申して』、とぢろ
りと夫の面を視る。

『然うでしたか』、と哲也は何喰はぬ顔をして、確か小夜子の勝見に連れられて千葉へ行つたと
いふ話は、昨日の朝母に聞かされた筈であつたと思ひながら、例の机の抽斗の物を懷へ藏める。
それで支度が出来て、倉皇と出懸けるのを、跟に隨いて玄關迄送り出した時子は、下駄も手
づから出して列べ、帽子も埃を拂つて渡し、ではお早くと一寸手を突くなど、此人には曾て無い
此忠實しさを、哲也は内々羞痒く思ひながら出て行く。

其後影は門に遮られて直見えなくなつたが、時子は茫然其出て行つた跡を視詰めて、何時迄も
玄關に立つてゐた。考へると云つて、凝と考へ詰めるのではなく、去迎放心してゐるのでもなく、
何か思ふ所があるのなれど、確と取留めては思辿る筋がないといふやうな様子であつたが……

影 面 其

「奥様々々！」と頓狂な福の聲が偶と耳に入ると、目の覺めたやうな面をして、「何だよ、騒々しい！」と慵げに茶の間へ。

四七

倉皇と家を出た哲也は、壹岐坂通りの四角で、其處の溜りの俵を呼んで、直段も碌に極めず飛乗るより、車上に身を揉むで焦心りながら、お茶の水橋を渡り、駿河臺を筋違に、淡路町への降口の、だら／＼坂の上迄來ると、もう好しと俵を棄て、其坂を中途迄降り懸け、一寸後先を見廻して、其處の右側の二階長家の町家の中の、と或る荒物店へ衝と入ると、

「おや、入らッしやいまし」と前垂で手を拭き／＼奥から出て來たのは、テツプリ肥つた四十格構の、此家のお神さんらしい女。

ト見ると、哲也は莞爾して「着きましたか？」

「へえ」とお神さんも莞爾して膝を突き、「先程お着きなさいましてね、お待兼でございます。さあ、何卒。」

「ぢや、御免なさいよ」と店先へ上る。

お神さんは氣を利かして、其處の梯子段の上口から、二階を見上げ、

其面影

「貴女！ いらッしやいましたよ。」

と聲を掛けて置いて、身を退くと、入代つて哲也は梯子段へ片足踏掛けたが、此が却々トンと昇れる梯子段でない。狭くて、脆弱で、慣れぬ者には危険言ふべからずであるから、警戒しながら一段づつ拾ふやうに昇つて行つたが、それでも氣の引ける程ミシ／＼といふ。

「お危険うございますよ」と下から聲を掛ける。

「大丈夫！」と其辯餘り大丈夫でも無ささうな腰付で、辛と昇り切ると二階座敷の入口に何時の間にか立つてゐたのは……小夜子。と、顔を看あはせて、まづお互に微笑する。

「ま、能くお早く」と小夜子は小腰を屈めて、身を開いて哲也を通して竊と後を閉切る。

此處は六疊の小座敷、北は襦子窓で往來を瞰下し、南は這上つたら直ぐ家根へ出られさうな低い窓の、障子には處々穴が明いてゐて、折柄何やらの鉢植物の影法師が朦朧と映つてゐる。一方は隣の小間物屋の二階と共同の壁で、其處と此處とは叩けば將に響へんとする間ではあるが、反對の入口の方は唐紙仕切で明放しでもない代り、其續きが直押入といふ随分無理な造作で、木口は固より貸家建の粗末ではあるけれど、新築だけに厭な心持がするといふ程でもない。

哲也は昨日來て見て極めた馴染の貸間ながら、座敷の中央に衝立つて、今更のやうに珍らし

さうにシロく見廻して居る中に、小夜子は下から當分の借物の勤工場仕込らしい、薄ッぺらな、相應に古ぼけた更紗の座蒲團を、是も同じ出身と見える、模造黒柿の、疵だらけの縁の付いた粗末な火鉢の前へ敷直して、哲也の爲に座を設けて置いて、一寸後退つて、鄭寧に兩手を突き、何やら口の中で曖昧な事を言ひながら、お時儀をする。

哲也も一寸會釋して座に着いたが、小夜子がまだ頭を擧げぬので、可笑しくなつて、失笑して「さう、どうも、四角四面ぢや弱る。もう、堅ッ苦しい事はお互に止ッこ」と高笑して、直膝を崩す。

是で小夜子も稍打解けたが、それでもまだ「だつて……」と羞かしさうに首を傾げて、袂を膝へ載せて八ッ口を揃へながら、嫣然してゐる所は、一寸此人の處女時代の倂が忍ばれて、その初々しい態度は一昨日の晩の小夜子とは全で別人のやうに思はれる。

哲也は始終莞爾しながら「何時頃着きましたか？」

「一時過でした」と矢張俯むいた儘で、

「ぢや、豫定通だつたね。僕も最と早く来ると好かつたんだが、今日は朝から客に押込まれて、脱られなかつたもんだから」と辯解して、「此處の家が知れ難くつて困りやしなかつたか知ら、電報を餘り略し過ぎたから？」

其面影

「いえ、直ぐ知れましたわ」と一寸面を見ると、直ぐ又手を突いて「どうも種々……」とお時儀をする。

「もう、そのお時儀は禁示だといへば」と哲也は笑ひながら譴めて置いて「餘り粗末だつたが何しろ貴女は今日歸つて来る筈だらう？ 然う悠長に贅澤も言つてられなかつたから、假に此家に極めといつたんだが、好いやれ、少し落着いたら、緩り又好い家を探すから。」

「いえ、結構ですわ、私には過る位ですわ」と一寸其處らを見廻したが、何故か哲也の面を避けて、成るべく見ぬやうにする。

「貴女が結構でも。僕が結構でないよ。二人で作るホームだもの、僕だつて發言權がなきや」と成程哲也らしい佻屈い串戯を言つて笑ふと、

「あら、彼様なことを！」と小夜子は目を擧げて瞥と見ると、笑の溢れさうな甘たるい目で疾から凝と面を視られてゐたので、狼狽して俯むくと、さう微と紅くなる。

其様子を見て、哲也は愉快さうに久らく高笑してゐたが、笑が止むと、泪を拭き、
「どうも可笑しい！ さうも羞かしいもんかね。」

其面影

此時下からお愛相に煮花を持つて来て呉れたので、談話が一寸中絶したが、聴て二つ三つ世辭を言つてお神さんが降りて了ふと、

「貴女がねと」哲也が莞爾しながら聲を竊めて、「此家へ着いた時、お神さんが何か妙な事を言やしなかつたかね？」

「ええ、言ひました」と小夜子も微笑の面を擧げる。

「意味が分つたかね？」と擦つたさうな面をする。

「何だか變なことを言つて、私にや能く分りませんでしたわ」と何か可笑しい事があつたのか、一寸手巾を口へ當る。

哲也も堪へてゐたのを、一時に關を切つて、心ゆく程笑つて、「こいつは一寸分らなかつたらう。僕あれ、變に思ふと不好と思つたから、此處の家へは斯ういつて置いたのだ。」

と其取締つた話を搔摘んでした。何やら小夜子は哲也の許嫁とかで、修業の爲に東京へ出て來たので、いづれ目的の學校を終つてから、結婚の式を擧げる筈であるが、夫迄は世間を憚つて別居してゐるのだとか何とか、随分失笑したくなる程の虚誕であつたので、小夜子も流石に微笑して其意を領すると、哲也は又一しきり高笑したが、偶と眞面目になつて、

「それは然うと、昨日千葉へは矢張二番で行きましたか！」

其 面 影

「ええ。」

「勝見様の方は如何でした！ 承諾して呉れましたか？」

「ええ、少し無理でしたけれど、如何か、斯うか。」

「ま、無理でも何でも承諾さへして呉れりや好い。然うして貴女が彼地に居る體裁になつてりや、一寸知れる氣遣ひがないからね。」

「は」と小夜子は頷いたが、此時何か不愉快な事でも憶ひ出したやうに、顔色が曇る。

「何か勝見様が厭な事でも言ひましたか？」と聞いて見ると、

「いくえ別に」と無意味な面をする。

けれども、哲也は何となく氣になつて、

「それは貴女は斯うして彼方此方を嘘で固めて置くのが嘸厭だらうが、當分は如何も仕方ないからねえ。一昨日の晩も言つた通り、私も屹度其中に方法を設けて、無理無體にでなく、納得づくで姉様とは別れて了ふから、厭だらうが、當分の所だ。まあ、辛抱して下さい。」

「は」と小夜子は又頷いたが、「ですけど……」と一寸言盡つて、「私それでは何だか姉様に濟まないやうで……」

「まだ貴女は其様な事を言つてるのか」と哲也は急に心配さうな顔になつて、「其様な事はない

其 面 影

といへば。』

『ですけど……』と小夜子は一寸身を曲らせる。

『ですけども何も無い』と哲也は一生懸命になつて、『だから一昨日の晩も僕が言つたぢやないか姉様が多少とも僕の事を思つて呉れてる所なら、貴女が濟まないどころか、僕が第一に濟まない。然うなら僕だつて其様な不人情な事はせん。けれども姉様は僕を生活上必要の道具と視てゐるだけで些とも夫婦の情愛なんぞは無いんだもの、別れたつて生活に困りさへしなきや、夫で苦情が無い筈なんだもの。』

『ですけど、兄様が他の方と結婚なさるのならですけど、私とだと、屹度姉様も厭な氣持がしますわ。それを思ふと、私本當に辛くつて』と萎れる。

『そりや少しは厭な氣持もしやうが、そりや仕方がないさ。それを貴女が今更彼此言つた日にや、僕は到底貴女と一所には成れん。さうすりや、僕は最う無茶苦茶だ……』と少し焦燥となる。

小夜子は暫じろりと其様子を見て、『あ、悪うございました』と直ぐ謝罪つて、『私が悪うございました。私の身體なんぞ最う如何なつても好い筈だつたのに、姉様に恨まれるのが辛いなんて——私餘程未練ですわねえ』と淋しさうに微笑する。

其 面 影

其 面 影

哲也も忽ち機嫌を直して、『や、然う言はれると、僕は殆ど感謝の辭に窮するが』と一寸間を置いて、『まあ、然うして置いて貰はう』と可笑しくもない事に高笑ひしたが、『もう、此様な話は止さう！ 鬱屈する。それよりか飯を喰ひに行かう。』

『御飯ですか？』

『さう。』

『無駄ではなかつて？』

『ま、好いく。今から然う所帯染みんでも好い』と辛やっと本當に機嫌が直つて、愉快さうに高笑をする。

小夜子も華やかに嫣然して、『ぢや、私お伴してよ』と言葉遣ひ迄が急に違つて来る。

『さあ、行かう』と哲也は今は無性に愉快になつて来て、躍り上ると、『小夜さん！』と振反つて、『今日ばれ、お互に學生時代に若返つて、一つ大に愉快に遊ばうぢやないか？』

小夜子は絹フラシの肩掛の襟を蝶々で留めてゐたが、嫣然して、『ええ、好いわ、其代り私お轉婆してよ。』

『お轉婆？』と哲也はクワツと氣負つて、『面白い！』と絶叫して、『貴女がお轉婆すりや、僕あ……僕あ……』と對句に窮つて、『亂暴するッ！』

此夜は哲也の身になつては此世からなる天國であつたが、しかし餘處目には皆他愛のない詰らぬ事ばかりで、まづ出懸に哲也が今夜は萬事夫婦氣取で行かうぢやないかと案を出すと、固く拒むかと思つた小夜子が、案外雜作もなく同意したので、それに先づ嬉しさの蓋が明いて、矢庭に例の懷中物を小夜子に渡して了ふ。

で、殆ど手を携へぬばかりにして宿の荒物屋を出たが、相談の結果は西洋料理が好いとあつたので、とあるレストラントの曲りくねつた階段を登り、電燈の華やかに耀く下に、雪白の卓布を掛けた食卓を隔て、和やかな面を向ひ合せて椅子に倚つた時の心持は、一寸口には言はれなかつた。ホーイが食單を持つて來て哲也の前に置いたのを、態と小夜子の前へ抛げて遣ると、突戻すかと思ひの外、小夜子は凝と其を視てゐたが、これをと指で差したのは、それは御一人前幾何かの宛がひ扶持で有つたにしろ、内氣な小夜子には是はと驚かれる程の氣取方なので、哲也も殆ど我を折つて了ふと、御酒はとホーイが聞く。小夜子は澄して、貴方飲りますかと哲也の面を見る。うう、葡萄酒でも飲らうかと、此方も調子を合せて平氣で言つたが、此處の「貴方」は平生の貴方と、發音相似て而も意味に霄壤の差ありと思と、嬉しさは下腹のむづ痒くな

影 面 其

る程であつた。が、それは押匿して、掛構ひのない事を併し面白さうに話合つてゐると、拆柄四五人連の商人體の客が、どや／＼と登つて來て、隣の食卓を占領して、四邊構はぬ高聲に何やら饒舌り散らしながらも、時々ぢろ／＼と無遠慮に此方を見おろす。これに少からず興を妨げられて、哲也が態と構はず話し掛ても、小夜子が最う妙々しく物を言はなくなつたが、聽てスーブが來、葡萄酒が來て、二人は黙つて食事に懸つた。其時小夜子の有様如何と上目で窺と見てあれば、ナプキン捌きなら、スプーンの持方なら、案外器用であつたので、哲也は竊に感心して、いや、しかし考へて見ると、傳道學校に居たのだから其筈だと、此様な事迄が嬉しくてならなかつた。只黙つてゐるのが物足りなくて、次の皿の來るのを待つ間の所在なきに、竊に一策を按じ出して、食卓の下で密々スリツパー穿の足を働かして、思ふ足を探り當て、一寸踏むと、引外して逃げる。追蒐けたが、行方不明になつたので、躊躇つてゐると、何處からともなく忽ち其足が出て來て、一寸踏むでスツと逃げる。これは食卓下の所作で、食卓上はお互に澄し切つてゐるのであるが、偶と面を看合せると、何ともいへず可笑しくなつて、小夜子は衝と俯むいて、ナプキンを嚙むで怵へたけれど、哲也が怵へじやうなく不知失笑して了つたので、隣の四五人連が言合はしたやうに吃驚した面を振向ける。これで折角の食卓下の鬼ごつこの足藝も中止になつて、聽て食事が済むで勘定となつた時、小夜子が食卓の影で例の紙入か

影 面 其

ら何枚かの紙幣を出して渡した其手附を、哲也は黙つて此方から見てゐたが、かうして考へて見ると、権利は主張するよりも、寧ろ放棄した方が趣味がある。ボーイが帳場へ行つた後で、今度来たら心附を興るのだよと竊り注意すると、幾らと聞返す、三十錢といふと、其様に多過るわと、剩錢を持つて来たボーイに興るのを見ると、二十錢銀貨であつたから、哲也の主張は詰り徹らなかつたのであるが、しかし考へて見ると、主張は採用せられるよりも、寧ろ排斥せられた方が趣味がある。

勘定が済むと、二人は戶外へ出た。種々買物があつたので、別れて一人小夜子の行かうとするのを、夜だ、大丈夫だと、連立つて其處らの店を搜り歩き、差當つての必需品を買調へ、持てぬ物は後から届けさせる事にして、持てる物だけを持つて歸る所は、髭の生えた眼鏡の男が、小机を引擔いで、片手に洋燈を持つたのに引添うて、矢絰の羽織に千代田草履を穿いた女學生風の女が、風呂敷包を重さうに両手に提げて行くといふ、一寸大津繪か何かに有りさうな圖で、餘り見とも好くもなかつたが、しかし二人して所帶道具を買つて歸るといふ其處に、所帶道具だけに、非常にソノ趣味があるのであつた。

五〇

其夜もいつか十時も過ぎ、颯て十一時近く成つた時、もう餘程前に卸した荒物屋の店の戸を内から明けて、衝と戶外へ出た哲也は月光の皎かに照す町の中央へ来て、立止つて、今出て来た潜りの未だ明放しになつてゐるのを振反つて見てゐると、其處から衝と又小夜子が姿を現はして、後を閉るなり、小走りに駆け出して来て、

「お待遠様。電車で行らしつて？」

「さう」といつたが、氣が變つて、「いや、月が好いから駿河臺を漫々行かうか。」

「ぢや、私其處のポストの處までお送りしてよ。」

淡路町の通りは未だ車の往來が絶えず、提燈の火のチラ／＼と往交ふのが此處からも見えるけれど、此處は横町の事とて、もう閑寂として人一人通らぬ。哲也は小夜子と肩を並べて漫々と坂を登りながら、

「しかし、今夜は愉快だつた。貴女は却々快活だれえ、尤も今は又元の小夜さんに成つてるけれど。」

「失禮でしたわねえ、お轉變ばかりして。もう今晚ぎりよ。明日から眞面目に成るわ」とまだ何處やら燥いだ調子がある。

「いや、眞面目も好いが、時には無邪氣に戯るやうでなくちや不好。今迄貴女は餘り陰鬱過る

と思つてゐたら、然うして見ると、ありや何だつたかれえ、幾分か姉様や阿母さんに壓迫されてた氣味も有つたかれえ。家ぢや此様な面白い處を些とも見せなかつた。』

『ええ、そりや然うかも知れませんが。學校に居る時分は、有名なお轉婆さんでしたから』と笑つて、『ですけれど、今晚は私……』と中絶れて、『少し調子が狂つてたんだわ。』

『調子が狂つてた？ さう、然ういや、少し變な處もあつた、戯てるかと思ふと、思掛けない時分に溜息なんぞして。如何して調子が狂つたの？』といつても小夜子が癖の黙つて了つたので、『れ、如何したの？』

『なあに、何でもないこと』と空とぼける。

哲也はかうなると、もう氣になつて成らぬ様子で『何でもないことが有るもんか。屹度何か仔細の有る事に違ひない。ま、さう焦らさずと言つて御覽。』

『でも、又叱られると不好きなもの』と微笑しながら立止まる。もう約束のポスト迄來て了つたので。

哲也も立止つて、まあ、其様なこと言はずに、れ、言つて御覽。』

『ぢや、私言つてよ。あのれえ、私……止さう！ 何だか叱られさうだから。』

『言はない？ 如何しても言はないね？ ぢや、宜しい、擦ぐるから』と笑ひながら衝と側へ寄

其 面 影

ると、

『あら、厭ですよ！』と小夜子も笑ひながら身を縮めて、『擦ぐるのは最う御免。』

『ぢや、言つてお了ひ。』

『そんなら云ふわ。私今日れえ、兄様の入らした時にれえ、面が變ではなかつて？』

『いや、僕は氣が附かなかつた。如何して？』

『だつて、彼時泣いてたんですもの。』

『泣いてた？』

『ええ。』

『如何して？』と急に氣遣はしさうになる。

『だつて種々な事を考へると、何だか變な氣持がして……』

『種々な事つて、如何な事？』

『まあ、もう少しと彼方へ行きませう。何でせう、之をかう行つて』と指先で方角を示して、『それから左へ曲つて眞直に行くと、お茶の水橋でせう。』

『さう。』

『ぢや私彼方を廻つて歸るわ。』

其 面 影

「だつて、夫ぢや大變な迂路まはりだぜ。」

「好いわ、迂路でも」と歩き出す。

「ぢあ、まあ、然うするとして」と哲也も歩き出して、「種々な事つて、如何な事？」

五一

小夜子は種々な事の如何な事なのかは言はずして、「彼様にお轉變てんぱしてもれ、時々何だか急に悲アしくなつて来て、泣き出したいやうな氣持がする事が有ますよ。」

哲也は軽く之を受けて、「そりや何だ、餘り心配したので、神經を痛めた所爲だ。」

「然うでせうか知ら」と少し不服の氣味で、「而してれ、兄様と斯うしてお話してゐると、其様でも有りませんけどれ、一人だと、何だか斯う始終姉様の顔が目に見えるやうで、悲アしくなつて、それで私先刻も泣いてたのよ。」

哲也は眉擡めて、「其様に貴女は煩悶してゐるのか？」

「だから私不知姉様の事を言ひ出すと、兄様は直きお怒いらなさるんだもの」といふ其音かみに何處か恨めしさうな響がある。

「然うだつたか。そりや濟まなかつた。なに、僕は怒るいらンぢやないがね、實は姉様の事を言ひ

其面影

出されると、僕も殆ど慰める言葉に窮するのだ。夫で不知無茶も言ふのだがね。」

二人共一寸無言になつたが、久らくすると、哲也が「面の志あきは最う大分薄くなつたやうだね。」

「ええ。」

「僕は其を見ると、どうも腹が立つて堪らなくなるけれど、貴女は其様にされても、まだ彼様な者を……」と後は言はずに溜息をする。

「だつて私が悪いンですもの、仕方がないわ」と同じやうに溜息をしたが、「兄さん！」と面を見上げて「私貴方にお願が有りますが、聽いて下すつて？」

「お願が？ 何でも聽く。其様な厭な想おもひをさせるンだもの、僕あ貴女の頼みなら……」命でも與ると言ひたかつたのを、それでは何だか小説じみると思ひかへして、「何でも聽く。」

「ぢやアね……あら、此處を曲まがるンぢやなくつて？」

「おく、さうだ。」

と話に浮れて行過ぎやうとした紅梅町のトある横町を曲ると、

「あのねえ」と小夜子は言葉が続いで、「私ねえ、自分だけなら捨てられますけど、姉様が如何しても捨てられませんからねえ……」と間を置いて、「何だか餘り生意氣のやうで極りが悪い」と嬌態しなをする。

其面影

『其様なことを言はずに、まあ、言つて御覽。僕は貴女の言ふ事なら、如何な事でも決して悪くは取らんから。』

『ぢや、言つて了ひますがね、若しお氣に障つたら恕して頂戴よ。あのねえ、私ねえ、如何かして、電話の交換手になつても好いから、早く自活の道を求めて、兄様の足手纏ひに成らないやうにしますから、兄様もね、今の困難の事情に負けてゐないで、奮發なすつて、一日も早く活動の出来る體にお成なすつて、而して、あのチ……兄様は私の事を孤兒のやうだと仰有つたわれえ。』

『うゝ。』

『ですけど、世の中には私よりも最つと最つと不幸な人が澤山有るでせう？ 然ういふ人達の爲に働いて戴きたいのですが、不好でせうか？ 兄様が奮發なさりや、如何な事だつて出来な事は無いと思ふわ。ですから、然うして兄様が其様な不幸な人達に同情して働いて下さりや、私姉様には誠に濟まない事をしてゐるので、兄様のお蔭で間接に大變な慈善をする事になりますから、幾分か罪が軽くなるかと思ひますわ。然うでなくつて、若し兄様が私一人に盡して下さるんだと、私は唯姉様の大事な方を奪つただけの事になつて了つて、如何しても安心して居られませんか』と深く思入つて、今は極りの悪いのも何も忘れてゐるらしい。

其面影

其面影

小夜子の言葉は哲也の耳には稍稚氣を帯びて聞えたが、其熱誠には深く感動せざるを得なかつた。聞終ると、先づ『難有う！』と其人よりは其得難い熱誠に一拜して、『能く分つた。實に貴女なればこそ其程に言つて呉れるのだ。難有う！』と又一拜して、『無論大體は同感だ。成程貴女の言ふやうにしなければ、我々の爲に活路は開けん。僕が貴女の愛に溺れるやうでは、貴女も不本意だらう。能く分つた。誓つて貴女の希望に背かんやうにするから。』

『どうも生意氣な事を申して、失禮でした』と小夜子は立止つて小腰を屈める。

『いや、其様な事は些とも無い』と哲也も無意識に立止つて、『實に難有い！』

『ぢや私餘り晩くなりますから、是で失禮してよ。』

『お！』と夢の覺めたやうな面をして四邊を見廻すと、いつかお茶の水橋を渡つて、此處は橋の袂である。何處を如何來たものか、顧みれば宛で夢のやうで、『思はず來て了つた。しかし何だか淋しいやうだね。其處ら迄送らう。』

『いとえ、好いわ。まだ電車も通つてますから。』

『さうか。ぢや、氣を付けてお行で。』

『は。左様なら』と會釋して、小夜子は獨り土手に沿うて、草履の音も輕々と行くのを、名残り惜し氣に哲也が見送つてゐると、偶と白い面が此方を向いた。定めて可愛らしい口元には微

笑も浮んでゐたのであらうが、もう其は見えなかつた。三度目に振反つた時、高く手巾を振つて見せると、彼方でも白い物の纏々と飄めいたのは、大方此方に應へたのであらう。聽て懐かしい其姿も夜霧の中に紛れて見えなくなつた時、哲也は深く溜息をして、踵を回らし、月に黒き我影を踏むで家路を辿つたが、如何やら魂は小夜子の身に添ふて、淡路町の荒物屋の二階へ行つた跡の、これは只形骸ばかりを弓町の宅へ運むで行くやうな心地がして、俄に水の如き夜氣が身に泌みて、肌の坐るに寒きを覺えるのであつた。

五二

がら／＼と我家の門を明けた哲也は、序に締りをして、矢張り平生の眞暗な玄關の積で、何心なくその格子戸の前まで来て驚いたのは、燈火が點いてゐる其よりも、妻の時子が細帯の寢衣姿でもなく、整然として不斷の姿で、其處に出迎へてゐるのみならず、哲也が何喰はぬ面をして、格子戸を明けて玄關へ上ると、一寸手を突いて挨拶をして置いて、入代つて履脱へ降りて、後の締りをする。之を不思議の始めとして、我居間へ来て見ると、平生なら朝出た儘に取散らしてあるか、さなくば福が寢急いで宵の口から敷つて置く臥床も今夜は見えず整然と片附いてゐて、火鉢には湯沸しの湯も沸り、側には茶道具を用意してあるなど、何から何迄意表に出た、

其面影

其面影

事の眞意は十分に分らぬながら、まづ兎も角も机の前に坐ると、時子も聽て入つて来て、火鉢の中に對合つて坐り、湯沸を卸して火を撥けながら、

『大層晩くなりましたねえ。外は冷えましてせう?』

『なに其様でもなかつた。』

時子は呉れとも言はぬに、響應振に茶をれて、夫の湯呑へ注いで其處へ置いて、哲也は何か茫然と腕組をしてゐて、見向きもせぬので『貴方、お茶を』と注意すると、氣の無さうな面をして湯呑を取上げて、一口飲だ儘下へ置いて、矢張り黙つてゐる。

『此様に晩くなつて、何か喰ひたくは有ませんか? お菓子なら此處に在りますけど。』
と菓子重の蓋へ手を掛けると、

『いや、何も欲くない。其よりか私は寝たいのだが、福は最う寝たんですか? まだ床も敷つてないが。』

『お床は今夜は奥へ敷らせましたが、まだ好まませんでしたか?』

衝突以來調物の忙しきに託して、哲也は我居間と極めた此六疊に獨寢の氣安さを貪るのであつた。時子は流石に口へ出して其を何とも言はなかつたが、母は獨り氣を揉むで、折に觸れては其となく舊へ撚を戻さうと勗めてゐた、それを哲也はあのくものと潜り脱けて、今日迄は

體好く意地を徹して來たのであるが、さては出抜かれたかと思ふと、残念で不覺面が膨れて、『まだ好なかつたのです。』

『さうでしたか。然うとは知らないもんですから、阿母様が此頃ぢや毎晩のやうにお歸りは晩いし、お調物の方だつて其様にお忙しさうでもないから、今夜から、彼方にしろつて言ふもんですから、年寄に心配させても何だと思つて、言ふ通りに爲せたんですけれど、不好と仰有るのなら、敷直しませう』と久らく考へて、『ですけど、貴方!』と凝と夫の面を視て、『何を然う貴方は何時迄も怒つてらッしやるのです? 何が然うお氣に觸つたか知らないけれど、一つ家に居ながら朝晩面を合せても、物も碌に仰有らないし、始終其様な厭アな面ばかり仕てゐらして、夫れぢや私だつて心持が悪いぢや有りませんか。何が然うお氣に入らないのだから、寧ろ潔りと仰有つて下さいな。ねえ、貴方? 黙つてらしッちや、私の様な馬鹿にや、何時迄經つても分りませんか』といつても矢張り黙つてゐるので、『若しもですれえ、此間小夜の事で私の言つた事がお氣に觸つて、夫で其様に怒つてらッしつるのならばですれえ、然うなら然うと判然仰有つて下さいました。然うすりや、私にも今だに胸に落ちない事が幾らも有りますから、其も申して見ますから。』

今迄腕組をして、目を閉ぢて、石佛の如く黙つてゐた哲也は、此時目を睜いて。落着いた、

其面影

併し何處かに肝癢の顫を帶た聲で、

『私は明日學校が有る身體だ、お前さんの相手に成つて夜深をしちや居られん。早く床を敷直して下さい。』

『さうですか』と時子は顔色を變へて、衝と起つて出て行つたが、襖障子に當り散して我他彼此させながら、一人で床を運んで來て、其處へ敷直すと、衝立つた儘、泪を含つた険しい目に偲と夫を睨付けて、

『斯うすりや好いんですか。』

哲也はぢろりと夫を尻目に掛けて、

『床さへ敷りや、夫で好いのです。』

『さうですか。』

とつか／＼と座敷を出ると、ピシヤリと障子を締切ると、狼狽て袖を面へ當たが、ヒイといふ泣聲がツイ漏れて、久らくは其處を去り得なかつた。

五三

障子の外の妻の泣聲を聞くと、哲也は愕然として面を擧げた。有様は、今の哲也は昔の

其面影

其面影

不平満々たる哲也ではなくして、面は兎に角、内心はいつも欣々たる哲也で、大歡喜に充ちて和氣霽然たるものがあるから、笑ふに適しても、怒るに適せぬ、能く罪を恕しても、人を憎むといふことは一寸出来難い氣味がある。かゝる時に、人は往々百年の恨みを忘れむとするが習ひであれば、仲違ひした妻ではあるけれど、之に對して腹は面程に苦みを有つてゐなかつたのみならず、其目を忍んで、其妹と那麽した關係に成つたかと思へば、實は少しは濟まぬやうな氣もするけれど、早晚縁を切らねばならぬと思ふと、滅多に白い齒も見せられぬ。で、必要が半分、行懸りが半分で心に思ふよりも少し手酷く當つて見たやうなものゝ、其泣聲を聞くと、流石に少しは氣の毒にも成つて来て、竊に耳を翫てゐると、久らく歎歎く聲がしてゐたが、聽て其も止むで、やうく濫々立去つた様子。まづ好しと安心して、起上つて居間を出て用を達して何心なく歸つて来ると、思ひきや、一旦去つた妻がいつの間にか又戻つて来て、居間の入口の柱に凭れて悄然と立つてゐる。ト見ると、うんざりしたが、しかし今更如何しやうもないから、據どころなく澄して其前を通り脱けて、今や居間へ這入らうとする途端、其時迄は身動きもしなかつた時子が、衝と側へ寄つたかと思ふと卒然轟としがみ付いて「餘りだ……餘り酷い、貴方は……」小聲ながら泣き聲を顫はせる。

ハツト思つて振放さうとしたが、確りしがみ付いてゐて却々離れぬ。男の力で無理に振放つ

其面影

たら振放れぬことも無かつたかも知れぬが、既に泣き聲に弱つた氣はしがみ付かれて更に弱つて、もう酷い事も出来なかつた。只言葉ばかりは荒く、

「何を爲るんだ！ 放さんか！」

「いゝえ、放さない……殺されたつて放さない……」

と女の力も一念力は侮り難い。しがみ付いた手に凝と力が入ると、哲也は思はず踏跟となつたが、幸うじて踏耐へて、

「亂暴しちや不可。言ふ事が有るなら、口で靜に言や分るぢやないか。ま、其處を放せと言へば放さんか！」

と半分行懸りで引くに引かれず、無理に振放さうとすれば、離れじと争ふ其拍子に、地が破れたのか綻が切れたか、びりんと袖が振断れさうになつたが、もう其様な事に頓着してゐられぬ。無二無三に居間へ押通れば、時子も引摺られるやうにして中へ這入り、諸共に下に居ると、凝としがみ付いたなりで恨めしさうに夫の面を見詰め、

「餘りぢや有りませんか、貴方は餘り酷いぢや有りませんか？」と、つぎ廻して「其様に貴方は私が憎いのですか？ そんなに憎けりや、寧そ一思に……」と泣聲になつて、「殺して、下さい、私が居なかつたら、貴方も思ふ様に小夜と一所に成れて好いでせうから、さあ、一思に」と身

を突付けて泣きながら、『殺して下さい……』

五四

幾らこづいても哲也が腕組をして、目を閉つて、黙つてゐて相年にならぬので、時子は益口惜しさうに『ね、貴方！ 寧ろ一思に殺して下さい。私を殺して小夜と一所に成るなど、如何などと、御勝手に爲すつて下さい。私だつて此様な厭な想をして生きてるよりか、寧ろ貴方の手に掛つて死んで了つた方が迥か勝ですから。ね、貴方』とこづいて『ね、何とか言つて下さいな！ 貴方といへば』と又こづく。

こづかれる毎に哲也の身體は、激しく揺れて、時々くら／＼と眩暈を感ずることもあるが、それでも哲也は尙ほ我慢して、凝と目を瞑つてゐる。

凝と目を瞑つてゐるのに深い仔細はない、唯當惑してゐるのである。激しくこづかれてくらく／＼となる時には、寧ろ思切つて破裂……といふ氣にもなるが。愈破裂するとなれば高等學校の中途から大學卒業迄に費はせた金を略と二千圓と見積つて、少くも其半額を右から左へ耳を揃へて辨償する必要がある。けれども今の哲也の身分にしては、如何考へて見ても、此金策が出来ぬ。出すべき金も出さずして強ひて離縁を取らうとすれば、無理無體に家を出て了ふ外は

影 面 其

影 面 其

ないが、弱い女を相手にして、哲也とも有らう者が、其様な亂暴眞似も仕度くない——とすれば、爰は迂迴に離縁話を持出すべき場合でないが、妻の今夜の見脈は容易な事では振放せさうもない、トいつて座なりを言つて一時を糊塗する様な事は厭なり、如何したもんかと、思案に暮れてゐたが、餘りこづかれるので、堪まりかれて、『ま、其處をお放し。』

『いえ、放さない。何で私が其様に憎いのだが、其理由を仰有らない中は、私如何あつても放さない。』

『ぢや、言ふからお放し。』

『仰有りや、放します』と放して、夫の面に凝と目を据ゑて、堅津を呑む。

『今更言つたつて始まらないが』と哲也は據どころ無さうに『私とお前さんとは餘り性質が違ひ過る、お前さんは派手だ、私は質實だ、だから爲る事も思ふ事も……』

『貴方は何んぞといふと、私を派手好だ派手好だと、仰有るけど、私は何も好き喜んで派手にするンぢや有りませんよ。親類の茶話にも、小野の家も阿父さんの頃は全盛だつたが、哲也さんの代に成つてから火の消えたやうに成つたと言はれるのが心外でならないから、夫で内輪を節て世間體だけを繕つてるンぢや有りませんか、皆貴方の名譽を思ふからぢや有りませんか。』

『さ、其處らが性質の違ふ所でね、私に言はせりや、其様な事は餘計な苦勞だ。』

「ぢや、貴方は意久地なしと言はれても心外とは思はないンですか？」
 「さう、實際意久地なしなら、意久地なしと言はれたつて仕方がなしさ、意久地の有るものを意久地なしといふのなら、言ふ方が間違つてるンだから、私は世間の評判なんぞは餘り構はんれ。」

と一方が激昂すればする程、一方は沈着になつて、髭なんぞ引張つて暢氣に構へてゐる。

時子は口惜しさうに凝と夫の面を見据ゑて「だつて性質が違ふたつて、其様な事今始まつた事ぢやないぢや有りませんか、それを今更彼此言つたつて仕様がないぢや有りませんか？」

「だから私は何も彼此言やせん。」

「だつて始終厭な面ばかり爲てゐらツしやるぢや有りませんか。」

「そりや不愉快だからさ。」

五五

哲也は必ずしも醜弄する氣ではなかつたが、事實は言へず、去迎今更空々しい氣休めも言度なしで、不知言ふ事が醜弄に成つたのである。けれども時子の身になつては、自分が眞面目であるだけに、之に甚く心持を悪くしたらしく口惜さうに、

其面影

「何仰有るンです！ 不愉快だから厭な面をなさるのは、仰有らなくツたつて分つてます。私其様な事を伺つてや爲ません、不愉快の所由を伺つてゐるのです。」

「其様な事を今更言つたつて仕方がない」と哲也は如何にも煩さうな面をする。

「いえ、仕方が有つても無くても何はなきやなりません。仰有つて下さい。」

「強ひて言へといふなら」と一寸考へて、「さう、まあ、家庭の圓滿を缺ぐのが一番不愉快とでもいふかな。」

と聞くと、時子はクワツとなつて、「誰が圓滿を缺かせるンです？ 皆貴方が缺かせるンぢや有りませんか。貴方さへ端然として小夜なんぞに關係なさらなきや、誰が醉狂らしい、泣いたり怒つたり狂人の眞似なんか爲ますもんか。皆貴方が爲せるンぢや有りませんか。」

と叱るやうな語氣で言はれて、哲也も怫然として黙つて了つた。

其面を時子は暫く凝と睨めてゐたが、聽て言葉を續いて「貴方は私の言ふ事は皆嫉妬にしてお了ひなさるけど、もうく何と仰有つたつて、私は最う糊塗かされませんよ。」

と其糊塗かされぬ理由を述べた中には、例の艶書でもない密書の贈答も、外での出會も出たが、其から後も、聞いて見ると、時子の胸に鬱結した疑團は幾らもあつた。時子は先づ小夜子が家出の次第を哲也に告げぬ筈がないと極めて、車夫の話で知れた小夜子が汽車に乗後れた事と、

哲也が其夜一時過に歸つて來た事とを照し合せて、胡散臭いと事實近くまで嗅付け、小夜子から千葉の郵便局の消印のある葉書が來たので、一寸紛らされて、昨日も今日も哲也は千葉へ行つて小夜子に會つて來たものと間違へ、歸りの時刻が終列車の兩國着の時刻と出合ふのに愈深入して、其に相違ないと極めてゐた。が、驚くべきは、今朝掃除する時には机の抽斗にも何處にも無かつた紙入が、哲也の出懸る時になつて、ふいと矢張机の抽斗から出て來た所を見ると、紙入は何でも何處か氣の附かぬ處に匿してあつたものと想像し、其匿した理由を摸索して、中には必ず何處からか融通して來た、小夜子に贈る金が入つてゐたに相違ないと斷定した事で、是は成程事實である。此他に疑念中の疑念として最も時子の心を惱ますものは、例の空閑獨眠の一件であるが、是は唯心に思ふばかりで、流石に口へ出しては何とも言ひ得なかつた。

で、時子は此等の疑點ではない、殆ど證據と信ずる事實を一々擧げた時には、稍觀察の奇聲に誇る色もあつたが、一通り其が済むと、

『ね、貴方、是でも私の癖みだと仰有いますか？ 何ば貴方だつても、正可最う白を切る譯に行きますまい。』と先づ勝誇つて、『そりや貴方も初の中はほんの一時の戯に爲すつたのかも知りませんが、最う斯う成つちや退引ならなく成りましたからねえ。小夜も泣いて責めたでせう？ 貴方も嘸お困りでせう？ ですけど、まあ、一體如何爲さるお積なんですか？ 寧ろ打明

其面影

其面影

けて仰有いましたな、打明けてさへ下さりや、私だつて萬更野暮ばかりも言ひますまいから。』
 といった趣意は、兜を脱いで降参したら、随分善後策の相談に乗らうといふので有るらしかつたが、哲也は何と思つてか、相變らず目を瞑つた儘、何時迄経つても啞の如く默然としてゐるのであつた。

五六

『ぢや、貴方は本當に家を出る氣にお成なすつたのですか？』と時子は顔色を變へた。何と言つても、哲也が意地に成つて押黙つてゐるので、最う斯うより外に解釋の仕様が無くなつたのであるが、實に、實に、意外とも何とも言ひやうがない。

今迄は、只た今かう言ふ迄は、口へ出してこそ小夜子に見易へられたの、棄てられたのと言つてゐたやうなもの、心では然うばかり思つてゐたのではない、正可といふ氣が何處かに有つた。であるから、嫉妬に身を悶えて怨みつ泣きつはしてゐても、其は心の上面で、心の底では我身の上の一大事と狼狽騒ぐのではなかつた。何處迄も非は夫に在ると思ふから、振合つた末は、惡かつた位言はせて仲直りして了ふ積であつたのに、思ひきや、可惜理詰の千言萬語も空に消えて、哲也は色一つ動かさず、冷然として夢木死灰のくなるの如を見ると、豫期するや

うで豫期しなかつた、女の身には一大事の『離縁』といふものと、直と面を突合せたやうな心地がした。此時、不思議や、其處等の物が一時に燦然と異様の光を放つて、瞬く間に面目を改め、過去の怨みも、未來の不安も、何處やらへ消え失せて、見識も外聞も忘れて了ふと、もう嫉妬も順志も無くなつて、只一筋に情ないといふ刹那の心になり、我を忘れて夫に縋り付き、『其ぢや、貴方、餘りだ、餘り酷いぢや有りませんか！』と其膝に泣伏した時子は、平生の時子の様ではなくて、若し時子以上の時子が有つたら、此様なものかと思はれたが、一しきり泣くと又舊の時子に成つて、純一無雜の情ないといふ念に利害の心が加はり、其が恨めしいといふ氣に變つて、泪の目に凝と夫の面を視詰め、『貴方は宛然鬼みたやうな方ですれえ。私今迄其様な方だとは思はなかつた。随分何かと氣難かしいけれど、情愛の厚い頼もしい方だと思つたのに、今更厭になつたからつて、性質が合はないの、家庭が圓滿に行かないのと、其様な事を口實に、八年も連添つた私を棄てて、まあ、其様な家を出て了はうなんて』と泣いて『其ぢや餘り酷いぢや有りませんか！ そりや小夜が歸つて來てからは、家が始終揉め通しで、貴方も不愉快でしたらうけど、私や貴方一人を便りに生きてるのですよ、掛け替へのない大事の貴方だと思へばこそ、彼女との間が何だか妙に見えりや、私だつて氣が揉めまさあれ。私は彼様な偽善家ぢやないから、露骨に言つて了ひますけど、貴方が小夜を可憐さうだ〜と言つて優し

く爲さるのが、厭で〜成りませんでした、貴方が優しく爲さる程、私は小夜が憎うございしました。唯一人の妹ですから、私だつて何も血で血を洗ふやうな事は仕度は有りませんが、だつて貴方にや換へられませんもの。其處を少しでも察して下すつたら、萬更私ばかりが悪くは見えなかつたでせうけど、貴方は彼女に迷つて了ひなすつたもんだから、彼女の爲る事ばかりが善く見えて、私の爲る事は皆お氣に入らないで、到頭其様な氣にお成んなつたのです。然う思ふと、私や彼女が憎くつて〜成りません』と又泣伏す。

嫌な妻の言ふ事ながら、今夜は例になく哲也も胸に應へた。言はれて見れば、成程連添ふも最う八年になるが、此間始終厭であつた譯でもない。殊に結婚當座の心持を顧へば、我が人かと怪しまれる程今とは違ふ。時子も平生は我儘に掩はれて然うとは見えぬけれど、哲也を便りに世を送るといふに偽もあるまいに、今更振棄てたら嘸心細からうと思ふと、何となく哀になり、其恥を忘れて取亂した姿も、勝氣な者だけに傷らしく、之を棄てて家を出やうとする我は成程鬼かと思ふと、何も角も忘れて、乃公が悪かつたと、ツイ言ひたいやうな氣になつたが、此時時子は言ふ事を言盡しても、泣盡しても、哲也が矢張黙つてゐるので、持前の肝癢が勃然と發り、『是程事を分けて言つたら、貴方も其様に黙りこくつて居ないで、何とか言つて下すつたつて好いぢや有りませんか！』と嘯み付くやうに言つたので、哲也も一寸躊躇つてゐると、『ぢ

や、好うござんす、私も最う覺悟を極めました。其代り何ですよ、私の目の黒い中は、貴方が幾ら小夜と一所に成らうたつて、飽迄邪魔をして一所には爲せませんから、然う思つてらっしゃい」とぶいと起つた。かうなると哲也も翻然と氣が變つて、續いて起上り、時子が出た後を確と閉切つた時には、もう誰やらの詩を低誦しながら帯を解いてゐたが、聽て寢衣に着替て床へ入つて、最う十分も經つたから寢たのかと思へば、然うでなくて、秋獻げてゐるのであつた。

五七

翌朝哲也は何時になく和服に袴といふ服裝で家を出で、四ツ角から俥に乗り、學校へ行くかと思ひの外、淡路町の小夜子の宿へ来て、學校へは缺勤届を車夫に持たせて遣つた後、如何やら濟まぬ顔色で、

「小夜さん、僕あ酒が飲みたい。麥酒でも取つて来て呉ないか。」

まだ何にも話を聞かぬ小夜子は、先刻から哲也の様子の尋常ならぬに、大方ならず胸を痛めてゐるやうであつたが、此時「お酒を飲むのですか？」と不思議さうにデロ／＼面を視て、一寸起ち難てゐる。

其面影

「さう。飲んぢや不好のか？」と眼中は血走つて、穩かならぬ色を示してゐる。

「不好ことは有りませんけど……如何なすつたのです？」と堪へかれて聞くと、

「如何したつて好いぢやないか」と哲也は焦だつて「それよりか早く行つて来てお呉れ。」

「は」と小夜子は逆らはず、紙幣一枚受取つて、悄然起つて出て行つたが、聽て命けられた麥酒に、柿を四ツ五ツ買つて歸つて来て、玻璃盃は下で借りて間に合はせ、先づ一杯滿々と注いで、黙つて、考へながら柿を剥きに掛る。

哲也も黙つて玻璃盃を把上て、一息に半を飲み乾して、嘔と苦しさうな息を吐いて玻璃盃を下へ置くと、頹然となつたが、思出して又把上て、又一息に殘餘を仰ると、

「小夜さん！」

「は？」と柿を剥く手を控へて、面を擧げる。

「もう覺悟をして貰はなきやならん。荒増感付かれて了つた。」

「あら」と柿とナイフを一度に下へ置いて、「私の此處に居る事が知れましたか？」

「いや、其は未だ感付かれん。矢張千葉へ行つたもんと思つてるやうだが……かういふ譯さ、昨夜僕が歸るとれ……」と二度目の衝突の有つたことを、時子の歎いたこと、自分の心の弱つたこと、終局に時子が小夜子との結婚を飽迄妨害すると言放つたことだけは省き、後は搔摘ん

で話して、「といふ譯で、僕は然うだとも然うでないとも明言はしなかつたが、しかし餘り空々しい氣休めも言度なかつたもんだから、不知先あ黙認したやうな形に成つて了つた。もう據どころない、もう家へは歸れん」と何とやらその歸れぬのが殘惜しさうで、「今日から宿無しに成つて了つたから、此家へ同居だ。然うして置いて、是から誰か間に人を入れて談判を開かにやならんが、何事も金が先に立つかられえ」と例の二千圓に當惑して、嘔と太息を漏らす。

小夜子は話の中に一旦は赧くなり、廳て死人の如く蒼褪めて、話の濟む頃には、低く俯むいて了つてゐたが、偶と潜々と膝へ零れたものがある。

哲也は其を目早く認めて、「何だ、貴方は、今になつて後悔するのかわ？」と険しい目に凝と見据ゑると、

『いくえ』と小夜子は頭振を掉つたが、矢張泣いてゐる。

『そんなら何故泣くのかわ？』

『だつて姉様に餘り氣の毒で成りませんもの』と泪が止度なく零れる。

哲也は厭な面をして、「それを言や、僕だつて同じ事だ。八年も連添つた夫婦だもの、愈別れるとなりや、餘り好い心持もしないけれど、もう仕方がないさ、今更其様なこと言つたつて。」と聞くと、小夜子は何故か急に泣き止むで、凝と考へてゐたが、面を上げて「もう仕方がな

其 面 影

いでせうか？』

『仕方がないさ』と少しは不審に思ひながら。

『私が居なくつても？』

始めて意が讀めて、哲也は急に周章出した。「そりや好かん、其様な事！ そんな！……此處で貴女が居なくなつたら、僕が立場を失つ了ふ。」

『だつて、若し私が急病か何かで死んだら、其迄ぢや有りませんか。』

『そんな馬鹿な事も……そんな……そんな詰まらん氣を出しちや困る』と愈周章で、

『貴女が死んだら、僕あ……僕だつて生きちや居られんぢやないか。』

『ですから私何も自分で死ぬとは言やしませんけど……』

『だつて今彼様な厭な事を言つたぢやないか。本當に其様な無分別を爲ちや困るよ。僕は家も名譽も何も角も犠牲にして掛つてるんだ。ね、其を貴女が今更其様な事をして呉れちや、僕は餘り詰らなくなる、』と恩に被せる氣でも無かつたらうが。

『ですから私家を犠牲にして戴き度くはなかつたんですけど』と小夜子は如何にも其が辛さうであつた。

『ぢや、僕が酔狂で犠牲にしたといふのか。』

其 面 影

『いえ、然うじゃ無いんですけど……』
 哲也は焦燥となつて、『詰らんく、もう此様な話は止さう。それよりか何處かへ行かう、而して何も角も忘れて了つて、今日一日愉快に遊んで来やう。ね、小夜さん、然うしやう。』
 『遊びに行くのですか?』と小夜子は何となく気が無さうであつた。

五八

其日は昨日に引替へて陰氣な一日であつた。哲也が氣霽しの遠出を思ひ立つたのも氣紛れなら、小夜子も固より行く氣はなく、其はいつかお流になつて、一日冴えぬ面を突合せ、是から先の身の處置を相談したが、格別好い分別も出ず、行詰つて哲也が我知らず太息を吐けば、小夜子が泣くと、埒はなかつた。夕方になると、小夜子は堪へかれて、今夜は家へ歸つてと言ひ出した。哲也は始終何とやら家出したのが悲しさうでありながら、斯う言はれると、急に厭な面をして、貴女は無情だの、殘刻だの、僕の思ふ十分一も思つて呉れぬのと、果は自暴を起すので、小夜子も泣いて其意に任せたが、さて斯うなると、取膳で喰べる其日の夕飯も、餘所で見たら程楽しくはなくて、如何やら果敢なく情ないものであつた。

其翌日哲也は辛いけれども命の綱と、爲方なしに學校へ行つたが、其日は何事もなくて、丁

其面影

其面影
 度家を出て三日目の朝であつた。例の通り出勤して、教室で氣の乗らぬ講義をしてゐると、給仕が洋紙の是が淺草紙といひさうな、粗末な、灰色の名刺を持つて来て、此方が御面會をといふ。見ると、養母の従弟で、立派な姓はありながら、お人好しの久兵衛さんとはかり言はれる、淺草邊で小商をしてゐる、氣の小さいが評判の男で、養母とて故郷の水戸には、此外にも親類縁者もあり、しがた暮はしてゐても、里と名の附く家もあるが、此東京では此人が唯た一人の親類であれば、さては頼まれて来たかと思ふと、會つて様子を聞いてみたいやうな、みたくないやうな、取止めぬ氣がしたが、ツイ一寸會ふことにして、講義が済むで應接所へ来て見ると、今年まだ四十七だといふに、可哀さうに最う頭はツルリと藥罐の久兵衛さん、狼狽て椅子を離れると、莞爾しながら何やら言つて、極り悪さうにお時儀する。で、用向は大抵分つてゐるけれど、故と改まつて聴くと、逡巡して言ひ難て、聽て重い口でポツ／＼言ふ所を不用意して聞いてゐたら、何を言ふのやら一向要領を得なかつたらうが、半分は推量して聞くと、養母も時子も泣いて心配してゐると云ふ。其は分つたが、何で貴方が来たのかと聞くと、非常に恐縮して、實はその、私はお瀧さんの臍線を十五兩借りてゐるといふ。いや、其様な事を聞くのでない、何用で出なすつたといふと、借が有るから、迷惑だつたが、頼まれては斷りが言へず、ツイお迎ひに参りましたので、へい、とお時儀をする。其事なら何れ人を以て此方から挨拶す

るから、貴方は此儘引取つて呉れといふと、久兵衛さん大に窮して、それでは私が困ります、何しろ期限は先月切れてるので、また其事を言つて、是非お連れ申してと申されまして、へい、と又お時儀する。哲也も弱つてゐると、其中に時間が来たので、其を言つて、少し慘酷のやうな氣もしたが、此方から起上ると、先方も誠に據どころ無さうに椅子を離れて、何分頼むと、今となつては何を頼むのやら、唯管頼むで、三つ四つ五つ續けざまにお時儀して、ヒョコ〜と出て行く。哲也は其後影を見送りながら、いづれ養母の計らひであらうが、時子が能くも黙つて斯様な馬鹿な眞似を爲せたものだ、氣嵩でも女は女、矢張り愚痴に成つたかと思ふと、厭なく人達ではあるけれど、此様な者の外力になる親類もない母子を、無理に振棄て家を出たのが、何となく後めたくも思はれたが……

宿へ歸つて小夜子の萎れてゐる姿を見ると、もう何も角も忘れて了ひ、嘸一人で淋しかつたらう。又泣いてたのか。其様に何も氣を痛めることは無いといへば。僕は最う、疾うから姉様を棄てゝゐたんだもの。さあ〜最うお泣きでない、好い土産が有るよ、貴女の好きな物だよ、と袂から出した物を見ると、ワッフルを五つ六つ紙に包んだの……。

五九

其 面 影

久兵衛さんでは埒が明かなかつたので、葉村が頼まれて雙方の間に入ることに成つたが、此役は儲からぬと、葉村の翻すこと〜。しかし其れも道理で、葉村が哲也に話す所では、哲也が家出の後の母子の有様は慘澹なものであつた。親類は有りは有つても、皆隔絶れた地方に居て、東京には久兵衛さんの外に一人もなし、トいつて平生懇意にする位の者は、此様な時には力に成つては呉れず、仕方がないので母子毎日鼻を衝合せて、取締もない空詮議に日を暮らし、隠居が愚痴を零して泣けば、時子が口惜しがつて泣くと、目も當られぬ始末。そこで自然葉村一人を便りにして、時子は來ぬが、隠居が毎日のやうに來る、來るは好いが、纏つた話はせず、唯愚痴ばかり零して泣いて行く。是には葉村も殆ど持剩してゐるといふ。

年寄は愚痴ツばいに極てるが、君の阿母さん程の者は澤山はないねと、葉村が熟々我を折つての話に、隠居は哲也が嫌ひだから、出るといふなら丁度幸ひ、掛けた金を悉皆辨償させた上に、多少の金を取つて出して丁へとも思ふが、又考へて見ると、時子は今年もう二十七。二十七で再縁では、假令嫁けるにしてから、相手が老爺さんか、さなくば小供の有る人になる。況して婚には、餘程の財産でもなければ、最う來手も有るまいから、矢張添はせて置いたものかと思ふし、いや〜婚を貰はうと思へばこそ、困りもすれ、嫁に遣るとしたら、時程の者なら好い所で貰手は幾らも有る、誰さんも彼さんも再縁で彼様な好い家へ來なすつた、假令先妻の

子の一人位は有つても、時は一生子供が出来さうもないから、それは構はぬと思ふし、然うしたら自分の身の始末に困ると思ふし、あくも思ふし、斯うも思ふしで、果は如何して好いか自分にも分らなくなる。それで不知愚痴になつて、哲也の戻るやうに盡力を頼みに來ながら、哲也のあくぞもくぞを並べて、彼様な人に死水貫ふ氣はないと言つて泣く。

時子はいふと、腹は口程でもあるまいが、例の氣象故意地一點張で、彼様な意久地なしの性根の腐つた人に些とも未練はない、出るなら勝手に出て行けど、其代り小夜の奴とは如何あつても添はせぬ。彼奴多分もう千葉には居まい、大方何處ぞに隠れてゐやうが、何處に隠れてゐやうと、草を分けても捜し出して、連れて戻つて處分すると、如何處分する氣か、其處までは聞かぬが、何しろ恐ろしい見脈で、哲也よりは小夜子を恨むで、畜生々々と言ひ通しだと言ふ。しかし小夜子を引上げるのは、詰り哲也に鼻を明かさうが爲で、報復の一手段らしいから、哲也が戻ると成つたら、反て小夜は家には置けぬといふは知れてゐると、葉村は云ふ。

葉村の話聞いたばかりでも、母子の煩悶してゐる様子が哲也の目には見えるやうで、氣味が好いとは思はぬ、何となく無残なやうな氣がして、彼程の悪感情も自然と薄らいで來るから、分れるにしても後の寢覺の好いやうにして分れたいと思ふし、隠居は從頭煮切らぬ事ばかりいふから、談判は頓と撻取らぬ。葉村は倦れて、もう小夜さんと手を切つて戻つた方が一番の上

其面影

分別だといふ。何も角も打明けてあるから、斯ういふのであるが、哲也は其様な事は最う死んでも出來ぬ。

それに無理もないのは、歸つて見ると、いつも小夜子の眼を泣腫してゐぬことはない。談判の経過は取繕つて話しては置くが、其でも大方は察して、甚く心配して、哲也が居れば左程でもないが、留守になると、不覺種々な事を想ひ出しては泣くといふ。それも道理だが、なかに、然う心配することはないよ、其中に何とか話は纏るよと、始終氣休めを言つて慰めて置くやうなもの……

あく、何時に成つたら纏まることやらと、哲也は斯う成る筈ではなかつたが、板挟みになつて、苦しさは譬へやうもないのであつた。

六〇

「兄様、先刻お留守にれ、此様な電報が届きましたが、如何したら好いでせう？」

と小夜子が心配さうに、小机の上の電報を取つて渡すと、今葉村から歸つて來たばかりの哲也は其を受取つて、一通り目を通して、凝と考へ込んだ。

電報は弓町の宅から、千葉に居るものにして小夜子へ宛てて打つたのを、勝見から再送して

其面影

来たもので、文言は「ハ、ビヤウキスガカヘレ」といふのであつた。

哲也が凝と考へてゐるので、小夜子は愈よ心配になつて来たらしく、

「本當の事でせうか？」

「なに、嘘さ。昨夜現に阿母さんは葉村の所へ行つたんだもの、嘘には極つてるが……」と尙ほ考へてゐたが、聽て「分つた！」と膝を打つと、電報を抛り出して「これで全然分つた。今葉村で聞くとね……」

と其聞いて来た話をして聞かせたが、葉村の話だと、昨夜隠居が来て、切に哲也の居所を聞きたがつた。で、一旦は、下話も出来ぬ中に會つたつて無益だよ、叔母さんと、葉村も跳付けて見たが、會はうで聞くのではない、念の爲め置いて置きたいからと切りに迫るので、さうく跳付けたら、貴方は哲也の肩ばかり持つと、例の愚痴が出て泣かれるのは知れてゐるから、些と拙かつたが、何でも學校の近所だつくと、書付を捜しても一寸見當らぬ風をして、今度逢つたら最う一遍能く聞いて置かうで其場は切抜けたが、居所を言はぬと、學校へ泣込む虞がある、寧ろ言つて安全辨を拵へて置いた方が好からうぜ、といふのが葉村の意見であつた。哲也も成程と其に同意して、しかし然うなると、最う小夜子と一所に居る譯に行かぬから、自分だけは明日にも轉宿することに決心して、居所を言ふは其上の事にして呉れと、それに話を

其面影

其面影

極めて来たのであるが、

「而て見ると、阿母さんは泣込まうで居所を聞いたのぢやない、屹度姉様が貴女を捜してゐるのだ。此電報も大方僕と一所で千葉には居まいが、先づ探りを入れて見ろで打つたので、萬一居たら是で釣り寄せやうと掛つたんだ。へ、へ、時の行きさうな細工だ。」

小夜子は姉が自分を取抑へて處分すると言つてゐる話は、未だ聞かされなかつたので、矢張り不審の霽れぬ面をして、

「さうして私を捜して如何する積りなんでせう？」

「そりやれ、貴女を取戻して僕に鼻を明かせやうといふ策略なんだ。」

と何心なく言ふと、小夜子は愕然とした様子で、

「ぢや、矢張り姉様も……」と黙つて了つた。

「姉様も如何だつて？」と訝かると、

「矢張り私が居なかつたら、此様な事に成らないと思つてるんですわねえ？」

「さう、そりや然う誤解して居るかも知れんけれど……」

「誤解でせうか？」

「誤解さ」と哲也は今更何を言ふと、不審に思つて小夜子の面を見て、「何故？」

小夜子は之には返答をせず、「誤解でも何でも、此様な電報を打つて來んですから何とか仕なきや……如何したもんでせう？」

「最う仕方がない、打棄つとくさ。」

と話が其方へ逸れて、此上は一日も早く小夜子は行方を晦まし、哲也は反て居所を明す外はないと、其相談に紛れて、哲也は遂に「誤解でせうか」の意味を聞かずに了つた。

六一

其翌日は氣分殊に勝れなかつたが、遊んで暮す程の果報を有たぬ身は、據どころなく例の如く出勤した。強ち此日に限つた事でもないが、授業の辛さは言ばかりもない。落着かぬ氣を無理に抑へて、張合もなく、活氣もなく、苦い面して義理一片の講義をする中にも、幾回か胴衣の時計を引出しては眺め、竊に時の移ることの遅きを歎つのであつたが、兎角して漸く待詔た晝の休憩時間になり、食事を済まして一息してゐる時、一寸と呼ばれて退儀さうに草履を引摺り校長室へ行つた。校長は某法學博士、哲也が爲には大學以來の恩師であるから、平生の恩顧を顧はぬではないが、今日ばかりは此人に對しても向ほ顔の無愛相を奈何ともする能はず、卒氣なく一禮して、與へられた椅子に就くと、博士は是が此男の常と、格別氣に留めた様子もなく、

其面影

其面影

如何だ、小野君、一つ支那へ行つて見る氣はないかと、哲也に先づ不審の眉を寄せさせて、今度なあと、軽い調子で語り續ぐ所を聞くと、清國は直隸省の某府に専門學校が創設せられる筈で、新任の提調蔡某といふのが、其教員招聘の爲態々渡航して來て、博士は即ち其人選を委託されたといふ話で、尙ほ詳しく聞くに、待遇も固より悪かるべき筈がない。此話を聴く中に哲也の眉は自ら開けて、口元に微笑の浮ぶを禁め得なかつた。此頃は此狭隘しい日本が厭になり、寧ろ小夜子を伴つて、伯刺西爾へでも秘魯へでも渡り、知らぬ外國の在郷で林檎でも作つて一生を送りたいなどと空想に耽るのであつたが、小夜子も是は同感で、時々夢のやうな事を語り合つて纔に現實の苦を忘れてゐた。然るに今や其豫期にもしなかつた機會が端なくも到來した。若し此機會に乗じて日本を去る時は、縦し西と東と方角は違つても、傭教師の煩はしきは農夫の氣安さに及ばずとも、身邊一切の葛藤を超脱して自由の新生涯に入ることを得るは一つ。あく、我運命も愈笑ひ出して來たぞと、哲也は心中では雀躍する程嬉しかつたが、面へ出せば只纔に眉を伸べて微笑したのみで、此處らは哲也も却々時子に負けぬ虚飾家である。が、それは面ばかりで、心に餘る嬉しさは行ひには掩はんとしても掩ふこと能はず、一考の後挨拶する程の自尊心を取失つて、我も輕卒の嫌ありとは思ひながら、明日迄の堪忍がならず。其場で不覺何分と頼んで了つた。

授業が終ると、平生萎れてゐるのが、急に現金に元氣づいて怡々と歸るが例ではあるが、今日は取分けて欣々と、心中の悦氣を時々獨笑に漏しながら、歸りがけに今日我引移るべき下宿を極めて行くことは全然忘れて、急用を抱へた人のやうに、傍目も振らず、すたくと淡路町の我宿へ歸つて來た。常は我宿近くなると、先一遍後先を見廻して、我眼を從ける者の有りや無しやを見極めた後、荒物屋の店へ驅込むやうに入るのであるが、此日は早く小夜子に話して其悦ぶ面が見たさに、其丈の注意をすることを忘れ、不知迂濶して店へ入つて了つた。

哲也が學校の門を出た時、其處からは稍隔絶れた向ふの四角に、烏打帽に二子づくめの、一寸小商人とも見える五十格構の男が立つてゐたが、哲也の姿を見ると、急に踵を回して見え隠れに跟に從いて來て、哲也が荒物屋の店へ入つたのを見澄まして、態々店前へ來て胡散さうに内を覗き込むだ。と見て奥に居たお神さんが、搔浚ひかと狼狽して店へ駈出すと、其男は衝と面を背けて匆々と坂を上つて駿河臺へ姿を没して了つたと云ふ、これは後での話。其時は哲也は何の氣も附かず、店へ上るや、慣れては例の梯子段も然う危険にも感ぜず、家鳴する程踏躡かして二階へ上り、卒然颯と襖を明けて、我から先づ滿面に笑を湛へながら、「小夜さん〜！ 好い話がある、好い話が……」と喚き込むだが、偶と小夜子の其處に俯した姿を認めると、忽ち驚きの目を睜つて、「如何したの？ え、氣分でも悪いの？」

其面影

其面影

六二

「おく、面色も悪い」と哲也は慵げに起直つて會釋した小夜子の面を諦見て、「氣分が悪いのなら、無理を仕ちや不好ぜ。床を設つて寝てゐたら好からう」といひいひ袴を脱ぐ。

「いゝえ、如何も仕やしません」と勉めて何氣なく言つて、小夜子は脱捨てられた袴を引寄せて疊みに掛つたが、思倣しか、哲也の目には其手附が怠氣に見えた。小夜子は袴を疊み終ると、溜息して、

「下宿を極めてゐらしツて？」

「いや、今日は止した。」

「さう」とばかりで、深く立入つた理由を聞くでもなく、袴を押し入へ納つて、哲也とは斜かひに火鉢の向ふに坐ると、側の編物を取上て、黙つて編始めた。

平生は此様な事はないので、哲也の歸りを待ちかねて、顔を見るより怡々とするのであるが、今日に限つて此卒氣なさを、哲也は不思議に思ひながら、久く黙つて其様子を見てゐたが、「小夜さん、貴女はまた煩悶してゐるね？」應がないので、「何を考へて其様に煩悶してゐるのか知らないが、若し當分でも別れるのが厭なら、一所に下宿しても好い、部屋さへ別々なら。」

『いえ、私、何も其様な事を……』

『ぢや、何を然う考へてるの？ 一人で黙つて考へてすと、僕にも話して考へさせて呉れるが好いぢやないか。』

恨みがましく言はれて、

『そんなら言ふわ。今朝ね、兄様が出て行らツしやると、直き俊子様が出来ましたの。』

『お、勝見の？』

『ええ。』

俊子といふのは勝見の細君で、小夜子の無二の親友である。哲也も二三度會つたことが有るから、是で漸く方角が附いて、

『心配して出て来たのか、彼様な電報なんぞが行つたもんだから？』

『ええ。それに牛込の實家にも用が有るんですつて。今晚家に泊つて、明日また来る筈だわ。』

『何か言れたね？』と何故か莞爾となる。

『ええ』と淋しさうに微笑して、『先達て行つた時にや、私何にも事情を言はずに、無理に頼むで来たんでせう？ ですから、大變心配するつて、種々責られたもんだから』と極り悪さうな嬌態をして、『私到頭言つちやツたわ。』

其面影

『もう仕方がないさ、何是迄隠してゐられるもんぢやない。然うしたら？』

『然うしたら散々言はれたわ。』

『何て？ え、何て言はれた？』と少し氣掛りに成つて来たのは、小夜子が俊子を姉様と崇めて、少からず其感化を受けてゐるのを知つてゐるからで。

『私肉に負けたんですつて。』

『肉に負けたとは？』

『兄様さへ好きや、自分は如何なつても好いなんて言ふのは、其は口實で、私は兄様をダシに使つて、一所に墮落して了つたんですつて。』

『そりや酷い！ そりや餘り酷い！』と哲也は迷惑の眉を顰めて、『俊子様は何にも事情を知らないものだから、其様なことを言ふのだ。』

『ですけど、私も其に違ひないと思ふわ。』

『何故？ 其様な事はないさ』と憤然となつて、『そりや僕が姉様に關係しつゝ、貴方と斯う成つたんなら、何と言はれたつて仕方がないけれど、僕は貴女と斯う成る前に、疾くに姉様は棄ててたんだもの。それも然うだし、是が一時の浮氣なら墮落かも知れないけれど、貴女は僕さへ好きや好いと言ふし、僕だつて其は同じ事だ、互に夫婦の眞情が動いて夫婦の關係を結んだ

其面影